

アースブロッカーズ バトラ スV (ふぁいぶ)

ガラパゴスゾウガメ

第1章

第一章 初陣

「僕、死ぬのかな？」

ふと、そうした思惟が、彼、吉原一矢の脳裏をよぎった。

バトラスを誘導電波にのせ、自動操縦に切り替えた。その直後の事である。眼前のスクリーンに映る、赤い夜空の景色に向けて、ポツリと言葉をこぼした。

緊急発進の慌ただしさの中、各種確認作業が終わり、コクピット内に静寂が訪れた。その静寂の中でふと我にかえり、そんな事を考えてしまったのだ。

そう思った途端、心臓がバクバクと鼓動を激しくしていくのが分かった。身に着けているパイロットスーツの感触も、急に、ゴワゴワした不快なものに感じられてきた。息が苦しい。このコクピットそのものが、棺桶の中に詰め込まれた気分だ。叫びだして、外に飛び出したくなる。

緊張したのだろうか？ 怖じ気づいたのだろうか？

基地を発進してから、戦闘空域に到達するまでの数分間は、パイロット達にとって生殺しの時間なのかもしれない。まるで、死地へ向かっての、カウントダウンだ。地獄の釜へ向けて、ゆっくりと落ちていくというのは、こんな感じなのであるだろうか？

「ダメだ！ ダメだ！ こんなじゃ！」

俄然、彼は声を荒げて、自分自身を叱咤した。己の怯懦を振り払おうとするかの様に、首を何度も、何度も激しく降った。

そして、心の中で念じた...

(いいや、やる！ 絶対にやる！ 日本の空は絶対、僕が守ってみせる！！ 皆の命は、僕が守るんだ！)

それから、何度も頷いた。自分自身に言い聞かせるように...

「ふう...」

ようやく、ため息をついてシートにもたれると、深呼吸を繰り返してみた。そして、左右の手で、各々握っている二本の操縦桿を掴み直し、コンボの入力の練習を始めだす。

この操縦桿は、細く伸びた棹の先端が、平らにカットされていて、そうして出来た端面には、十字キーがあり、その十字キーの隙間にも、四個のボタンが設けられ、側面にも幾つかボタンが並ぶ。裏側にはトリガー。この操縦桿は、ジョイスティックと呼ばれていた。

この巨大人型ロボットバトラスの操縦は、複数のキーを組み合わせる操作—コンボの入力で行われる。この操作は、素早さが信条で、自分の指先に馴染むように、キーのバネのテンションなどは、個々のパイロットが、自分で調整しなくてはならないほどである。

そのうち、落ち着きを、取り戻したように感じたので、大きく息を吐くと、パネルに手を伸ばした。

ピポッ！

指で突くと、静寂のコクピット内では、電子音がいつもより大きく聞こえた。同時に、今まで、赤く澱んだ夜空を映していただけのスクリーンがパッ！と明るくなった。少し眩しい。

スクリーンに大まかな地形図が映り、その上に多くの光点が現れる。これらは、地形図の上を刻々と移動していた。これで味方の展開状況が分かる。

ヘルメット内蔵のスピーカーから、味方の通信が聞こえた。聴こえてきたのは、錯乱した声、声、声...

「増援求ム」

「損害多数」

「友軍ヨリ通信途絶」

「新タナル敵編隊ヲ確認」

「陸上施設ニ損害多数。工業地区炎上中！！」

そうした声に連動するかのように、スクリーン上の光点は、消えていった。墜とされたのだ。自分は、今から、こうした状況の下に突入しようとしているのだ... 先刻、怖じ気づいたのは別に、一矢は緊張に心を引き締めた。みんなの命を守るんだ、という決意を新たにした。

だが、それでも...

「兄さんが、いればなァ...」

思わず、本音を口走ってしまった。

一矢は、今、ここに居ない男の事に、思いを馳せた。

自分はいつも、いつも、兄に頼り切って生きてきた。実際、兄は、どんな時も、最後には助けに来てくれたものだ。

孤児の兄弟二人を引っ張ってきたのは、いつでも兄の方である。彼にはどんな時でも、前に進もうとする意志の力の様なものが感じられた。立ち止まる事を良しとしないのだ。とにかく進みたがる。

もっとも、気が短くてすぐ頭に血が上るところは考えもので、もうすぐ二十歳になるのに困ったなあ...と思う。

だが、実際に、彼の機体と共同で、戦闘が出来るのならば、戦力は二倍ではなくて、四倍になると思えた。

ピピピピピ...

「いんふおめーしょん・めっせーじ...」

人工知能君の合成された電子音声、一矢の鼓膜を叩いた。ハッとなって我にかえる。

友軍機からの通信が、入っているというのだ。

でも、指はコンボの入力の練習を続けていたりする。コンボの入力なら、他にどんな事とでも併行して、執り行う事が出来た。むしろ、精神が集中して、感覚が研ぎ澄まされる。

「回線を開け」

とにかく、人工知能君に口頭で命令すると、スクリーンにウィンドウが開き、人の顔が映った。同時に声が飛び込んでくる。

「...そこの友軍機、応答しろ。聞こえないのか」

すごい剣幕だ。ちょっとたじろいだ。

「そういう、あなたは、誰ですか？」

「なんだ、その口のきき方は！ それでも防衛隊の隊員か？ 誰だ？ 所属を知らせろ」

「失礼しました。なんせ民間から、臨時に雇われたものですから」

「何だと...」

「こ、こちら、横須賀基地所属、第一特殊戦闘機隊、コードネーム、バトラス7です」

慌てて訂正する。

「こちら、管制機ディンゴ1 {ワン}。小早川少尉だ」

よく見ると女性であった。声も澄んでいて高い。バイザーを装着しているが、凄い美人だ。

「増援というのは貴官か？」

喋る言葉が、いちいち、きびきびしている。

「はい、そうです。僕は吉原一矢。曹長待遇の軍属です」

緊張しながら答えた。軍人の喋り方というものは、詰問されてるみたいでコワイ。

「バトラスか... 噂の秘匿部隊だな」

関係のない独白だった。自分の事を疑わしく、胡乱なヤツと思っているようだ。仕方あるまい

でも、それも一瞬で、すぐ形式張った口調に戻った。

「実験部隊と聞いているが、それが出撃なのか？」

「そうです」

こちらも、短く、手早く答えた。そうしなければならない雰囲気にも思えた。

「増援と聞いたが、たった、一機なのか？」

「はいッ！ そうですッ！」

ちょっと、力み過ぎた。一機しかいない事を怒られているように思ったのだ。

「この先に、何がいるのか分かっているのか？」

自分が大声で答えてしまった事は、気にしていないようだ。気付いていないのかもしれない。

「はい！ タルサリスが三〇機です」

傍目には、実に元気よく答えたように見えた。

「それを分かっている、このまま戦場に向かうのか？」

「このままでは、メガコンプレックスに大損害がでます。迎撃可能なのは、自分しかいません」

「貴様一人で戦う気か？」

「たとえ一機でも、時間稼ぎくらい出来ます」

一瞬、小早川は目をそらした。すぐ一矢を見据えと言った。

「フン、いい根性だな。了解した。進路を誘導する。人工知能をリンクさせる」

美人なのにぶっきらぼうだった。

※ ※ ※

人工知能君のデータ移行が終了...コクピットはまた、先刻の静寂を取り戻した。

この時の息苦しさは、何なのだろう...

コクピット内は音も無く、全周スクリーンが、ケロ粒子で赤く染まった夜空を映しているだけであった。その赤く薄暗い光に、ぼんやりと照らし出されたコクピット内で、一矢は静寂に耐え

ていた。

「あれ...」

指が、まだ、コンボの入力練習を続けていた事に、一矢は気がついた。

「俺、死ぬのかな？」

また、呟いた。

※ ※ ※

その時が来た。

「いんふおめーしょん・めっせーじ。目的ノ空域ニ接近中」

「！」

ジッと瞑目していた一矢は、パッと目を開いた。

人工知能君の報告で、体が強張る

サッとスクリーンが、暗視スコープの映像に切り替わった。

緑色を基調にした映像には、クッキリと夜景が捉えられていた。

埋立地特有のスパッと切った様な海岸線に、隙間なく建造物が配されている。その建物の並びは、幾何学的模様を成していた。そして、その内陸に、ひときわ高い高層建築物が、五棟、そびえていた。その全高は、一〇〇〇メートル。幅も同様であった。

超高層複合住宅、メガコンプレックス・スカイコンドミニウム。通称バビルタワー。十万人の市民を収容する超高層建築物である。二十一世紀の都市の、シンボルの様なものである。

住民の避難は進んでいるのだろうか？

「あらーむめっせーじ、粒子ふいるたーニ感アリ。本機前方ニけるる帯域ヲ確認。中央部ニ質量反応アリ」

「ケロ粒子戦闘濃度散布！ カメレオンモード起動！」

「れでい！」

全周スクリーンの映像が、粒子フィルター特有の赤い画面に切り替わる。大量のケロ粒子が、放出されていく。

バトラスの外装材であるラバロイド装甲が、一様に虹色の斑を帯びた...と、思うと、バトラスは、周囲の色に同調して、空に溶け込んだ様に不可視状態になった。

一方、粒子フィルターは確率的重みを与えられたケロ粒子が、伝播・拡散する過程を演繹し、そのデータが理論値と比較されていく。その結果が、物体の存在を示しているのだ。さらに刻々と観測と演繹が為されて、その物体の運動状態をも把握できるのだ。（何の事だか、良く分かりません）

町並みの上空に、濃い紫色のモヤの様な模様が見えた。

ピポピポピポポポポ... 電子合成音が立て続けに鳴り響く。そして、紫色のモヤは、一瞬にして四角い格子、ターゲットボックスの塊と化した。

蚊柱。

蠢いているボックスの一つひとつが、飛行物体の存在を示しているのだ。

「交戦規定、X条項を適用。このまま戦闘に入る」

対象物の形状を確認する事なく、いきなり敵機と認定したい。今はそれで良い。

(あれが、敵なんだ！ 本当の、現実の、敵なんだ！)

そう思ったとたん、カッと頭に血が上り、思考回路が熱くなる。

「管制室、こちらバトラス7、予定空域に到着、戦闘に突入する」

気が昂ぶってくる。

...

応答が返ってくる。その一瞬の間すら、もどかしかった。

「こちら、管制室。了解」

だが、受信したのは、管制室からの通信ではなかった。

「待て！ こちら、ディンゴ1！ 今、観測したデータによると、この辺にいる敵機は全て進路を変えた。こちらに向かって進んでいる。真正面から鉢合わせだ！ 数は七〇機以上！」

「！」

確かにそうだった。蚊柱の映像はどんどん大きくなっていく。

※ ※ ※

一方、敵もこちらを検知していた。当然であろう。

リーデ首長国連邦航天軍 {ユナイテッドエミレーツ・アストロフォース} の自律型巡航ミサイルホニャララ (表記困難) に、搭載されている人工知能君は、自身が敵異星人に、タルサリスというコードネームで呼ばれている事を、自覚出来るほどには発達してはいないが、敵機確認という事態に、対応出来るほどには高度であった。

彼 (笑) は、そのアルゴリズムに従い、対応を検討し始めた。

難点があった。敵機は一機であるが、機種が不明である事であった。いつも、カモネギにしているラフライダーではない。この機種に関する情報は一切、存在しなかった。ラフライダーより大型なのに高速で迫ってくる。こういう場合には、かなり特殊なオペレートが必要であろう。滅多に使う事のない、確率分布関数を、適用しなくてはならない。

とはいえ、計算はすぐに終わった。

結果は大げさだった。たった一機に、七〇機の全戦力をもって迎撃にあたる事にした。

彼らは、目標 (メガコンプレックス) から進路を変更した。全機が変更した。

この判断が結果的に、メガコンプレックスの住民達の明暗を分けたのであった。或いは、一矢のたった一人の出撃が彼らを救った、と言えるのかもしれない。

※ ※ ※

「撤退しろ！ 上層部には、自分が掛け合う。一機では無理だ。自滅するだけだ」

「いいえ、やりますッ！」

一矢に怯んだ様子は微塵もなかった。

「正気か？」

小早川には、一矢の発言は、蛮勇としか聞こえなかったようだ。

「たった一機で、何が出来る？ 無駄死にしたいのか？！」

「でも、メガコンプレックスには、大勢の人がいるんです！」

「一機だけで立ち向かって、焼け石に水だ！」

「でも…」

「それでは、お前が、死んでしまうぞ！」

「分かっています。でも…」明らかに気圧されて、弱々しい口調になった。「でも、だけど…」一矢はグッと唾を飲み込むと、力を振り絞った。「たとえ素人でも、他に誰もいないのなら、やる時はやらなくちゃダメなんです！！」

言った。思い切って言った。一番、言いたかった事を…

「…」

一瞬、沈黙があった。小早川が何か喋ろうとしたが、一矢はその前に割り込んだ。

「それに、シミュレーターが正しければ、なにも問題ありませんッ！」

「エッ？」

「この機体は、オールラウンドベクターシステムは、今までの戦闘機とは違うんです。これは、人型機動戦闘機バトラスなんですッ！」

その間にも、蚊柱は接近していた。プレッシャーすら感じられた。殺気だ！

「もう、敵は目の前だ。行きますッ！！」

「ま、待って…」

その時、少尉の声は弱々しく、一般民間人のそれになっていた。

「戦闘モードへ移行！」

一矢は叫ぶことで、プレッシャーを振り払った。（負けるかァァァ！）と心の中で念じる。

この時、スクリーン前方は蚊柱に覆い尽くされていた。警報もうるさかった。

「れんじ4ニ飛行物体。敵機形状ヲ確認。機種名たるさりす。ソノ数多数、多数。危険、危険、撤退ヲ推奨」

人工知能君の言葉を、一矢は無視した。そして、スクリーンの真正面に映るターゲットボックスの蚊柱をキッ！と見据えて、言い放った。

「全超電磁スラスタ、ベクトル集中！ 出力最大。突進！」

ギョッ！ gが生じた。

警報が、鳴りまくっている。

敵は、覆い被さるかの様に散開して迫ってきた。スクリーン前面が蚊柱掩われていく。

「行くぞオオオ！」

一矢は敢えて、そのど真ん中に突っ込んで行った。

タルサリス独自の武装、破壊力線の雨が降り注いだ。

コンボを叩き続けて、複雑な飛行 {マニューバ} を繰り返す。

バシッ！ 衝撃！ コクピットが揺れた。

(撃たれたッ！)

すかさず、人工知能君が報告する。

「本体、左側面ニ被弾。ダメージポイント三七〇」

この衝撃はホンモノだ。本物なんだ！ 仮想現実ではない！ 本当にバトラスは、壊れたのだ

！

(でも、それがどうしたっていうんだ?)

一矢は怯まなかった。ごく自然に指が動き、十字キーを操作した。照準用のレティクル(十字)がヒュッと動いた。

すかさず、トリガーを引く。

ビュン！

バトラスの両腕に備え付けられた超電磁レーザーが光った。

そして...

ヒットした！

爆発四散。スクリーンのボックスが一個、消滅した。

記念すべき初戦果だ。バトラスによる初めての撃墜だ。

出来た。動けた。訓練通りに行動出来た事が、初戦果以上に嬉しかった。スパルタ特訓は無駄じゃあなかった。

だが、敵も怯まない。数にものを言わせ押し寄せてくる。そして、一矢の方も動じない。何故だか分からないが、絶対に大丈夫だという自信-確信があった。考えなくても、何をすべきなのかが完璧に分かった。脳内には完璧なイメージがあった。人工知能君が告げるけたたましい警告も、きっちり脳にインプットされている。慌てること無く、尚且つ素早く、コンボを叩き込んでマニューバを実行した。敵の攻撃は全て回避出来た。ついでに一機撃ち落とした。

体が昂揚していた。雄叫びを叫びたい気持ちだった。でも、そんな自分を、冷静に認識、観察している自分もいた。

一矢の操縦は、迅速でありながら、リズムカルでもあり、敵の攻撃を飄々と躲し、薙ぎ払うかのように敵機を撃墜していった。

不思議な感覚だった。自分が冷静なのか、興奮しているのか、分からなかった。その、どちらでもないように思えた。頭脳が無意識のうちに判断し、体が反射的に、いや自動的に動作していた。敵の攻撃はスムーズに回避され、こちらの攻撃はヒットしていく...

今、一矢は、リラックスと緊張が、アウフヘーベンした状態にあった。

※ ※ ※

目には見えない巨人は、同じく不可視的な蚊の群れに、飛び込んでいき、舞を踊るような様な飛翔を行い、群がる蚊を追い払い、飛刀の様な光の針を放ち、これを刺し殺していった。

※ ※ ※

ハッと我に返った。呼吸が荒くなっていた。敵機の半数は撃破した。さすがに疲れが見えた。

その時、視界の隅に光点の点滅を見つけた。飛行物体の存在を示している。

敵機ではない。

そんなバカなと思いつつ、画像の倍率と解象度を上げてみる。

そうしても、映像はブレて朧気ではあったが、タケトンボのような物体が飛行している姿を見て取れた。

「オートジャイロ？」

スクリーンに、最大望遠で捉えたそれは、オートジャイロの姿であった。

「いんぷおめーしょん・めっせーじ。識別信号確認、民間所属ばーそなるじゃいろこぷたー。形式、呉羽七〇〇〇」

一矢の独り言のような問いに、人工知能君は反応した。

この時代、オートジャイロは個人用の移動手段として、ポピュラーな存在であった。それが今、戦場を飛んでいる。その機体には文字がペイントされていた。

無理やり判読する。“SKY COMPLETE TV” テレビ局だ！ 戦闘の様子を撮影しているのだろうか。正気の沙汰ではない。

「なんでだ！」

一矢は思わず、罵った。

「そこのオートジャイロ、着陸しろ。死にたいのか」

とにかく、無線で呼びかけてみるが、応答がない。

(どうすれば、いい?)

一瞬だが逡巡した。そして、決断した。

戦闘を放棄するのだ。

ジョイスティックを短く振ると、スクリーン正面にオートジャイロを示す光点が滑り込んできた。

落下する感覚—重力の方向を自分の鼻先に感じる。

足のフットバーを前に倒す。すると、地面がドンドン接近してきた。重力と加速のgが拮抗して、胃が気持ち悪い。

機体は一気に降下した。オートジャイロが、見る間に眼前に迫った。そして、人工知能君に向けて言った。

「目標を認識。捕獲」

要するに、あのオートジャイロを捕まえろ、と命令した。

キング・バトラスが、オートジャイロに覆い被さるように迫ると、無骨な指がオートジャイロを把握した。人が、タケトンボを持つ様なものだ。それにしても、バトラスのマニピレータ {手と指}は、本当に良く出来ている。どんな構造なのか知りたいものだ。

「バトラス7！ 何をしている！ 敵が行ったぞ。上昇しろ！ 上昇だ！」

「ぼいんと、二七〇〇喪失」

ディンゴ1からの警告の声が聞こえてきた。人工知能君だって叫んでいる。スクリーンも敵を示す光の点の揺らめきでいっぱいだ。絶好の獲物とばかりに急降下して迫ってくる。

一矢は臍を噛んだ。この状態では、戦闘も回避も自由には出来ない。とにかく降下が最優先であった。

キング・バトラスは地面に降り立ち、身を屈めて、オートジャイロを横たえた。

そこに、強力な光の杭が、バトラスの装甲に叩きつけられた！ 直撃！ 巨人の機体が大きくよるめいた。

「バトラス7、退避しろ！ 退避だッ」

ディンゴ1の絶叫が聞こえた。だが、続けて降り注がれた破壊力線の驟雨が、バトラスの装甲を激しく乱打した。

「F R A - D W E E E E E E E T ! ! !」

最早、人工知能君は、ヒットポイントの減少を告げるのを止め、絶叫した。

一瞬、一矢は、自分の死を覚悟...などしなかった。そんな暇もゆとりも、有りはしない。警告や損害報告も、耳には入らなかった。

とにかく、このオートジャイロを護るのだ。護り抜くのだ！ 脳内にあるのは、その一念のみであった。

破壊力線の嵐はますます、激しさを増してキング・バトラスに叩きつけられた。だが、一矢は停止しなかった。怯まず、強引に、バトラスを立ち上がらせた。

カメレオンモードが消え、内装までが剥き出しとなった満身創痍の姿で、キング・バトラスは再び立ち上がると、左足を立てて、右膝を突いて、昂然と胸を張った。まさに、自らを盾にして、このたった一機のオートジャイロを庇っていた。狂気帯びていた。

そして、そんなバトラスに光の驟雨は容赦なく叩きつけられた。バトラスはそれを全身で受け止める。

反撃する力など...あるはずも無かった。

バトラスはただ、敵の放つ破壊力線の雨を受け続けた。コクピットのある頭部にも命中していた。

コクピット内、スクリーンには亀裂が走り、そこが爆発し、その度に破片が飛んで、一矢を襲う。それは、彼の生身のライフポイントを、ガンガン、削っていく。

(もう、ダメだ...)

激痛に耐えられなくなった。一矢は観念した、観念してしまった。自分は死ぬのだ、それ以外、何一つ考えられなかった。

だが、意識が途切れる刹那、一矢が見たもの...

それは、タルサリスを示す光点が、次々と消えていくスクリーンの映像であった。

タルサリスは、一斉に攻撃を停止して、退却していった。

※ ※ ※

「何コレ？ ワケワツカンネエー」

タルサリス搭載の人工知能君が、感情というものを有していたなら、こう言って、ボヤいていたかもしれない。

タルサリスの人工知能君は、この事態に混乱していた。どちらかと言えば優勢の内に戦いを進めていた敵が、突如、戦闘行為を停止して、しかも、こちらからの攻撃に敢えて身を晒し、無抵抗で損害を受け続けている。これは、解析不能の行為であり、この人工知能君に感情らしきものがあつたとしたら、不気味に思ったかもしれない。

人工知能君は、アルゴリズムを起動させた。これまでの損害の多さも考慮すれば、この手強い敵の情報を持ち帰る事も重要だ。

彼は撤退を決定した。

これは、現時点での人工知能の限界なのであろう。

※ ※ ※

一矢のキング・バトラスは、壮絶な状態だった。ラバロイド装甲が、ボロボロになり、カメレオンモードは崩壊していた。内装が露出し、まさしく満身創痍となっていた。

まるで、暗○大将×の戦△獣に袋叩きにされたマ◇ンガー□のようになっていた。

「やったぞ！ バトラス7。メガコンプレックスは、空は、君が護ったんだ」

キング・バトラスのコクピットの中、一矢は完全に昏睡状態で、パイロットスーツに血が滲み、ヘルメットのバイザーからのぞける顔にも一筋、血が流れていた。ディンゴ1の呼びかけなど、聞こえてはいなかった。

※ ※ ※

辺りに人だかりが...できていた。皆、今までの、空襲の恐怖も忘れ、この半殺しにされた巨人の姿を、呆然と見上げていた。

これが、人型特殊戦闘機 F S X R-1、通称バトラスの初陣であり、御披露目でもあった。

※ ※ ※

最初、一矢は、かすかな刺激のようなものを感じた。それと同時に、自分の意識が何かを求め動き始めていた。その動きはとても愚鈍緩慢でもどかしく、時折、悶え出したくなる様な息苦しさも伴った。だが、意識の欲求は止まらなかった。それは、倦怠とのせめぎ合いを繰り返した。不意に、意識の中が白く染まった。見る間にそれは白光となり、意識の全てを覆い尽くした。それに逆らうもどかしさは消え去っていた。

そして、彼は目覚めた。だが、求めていたほど鮮明なものは得られなかった。目は映るものを、全てははっきり捉えているのにも関わらず、どれも不明瞭で、明確な認識が出来なかった。そして、あのまどろみのような緩慢さも甦ってくる。そのまま身を任せてしまいたい気持ちすらわき起こってくる。

「一矢！」

その時、自分に呼びかける声が遠くから朧気に聞こえた。だが、その声よりも、その口調から感じ取れた情感の方が刺激であり、彼の意識に強く訴えた。それは、彼を揺り起こすものであり、明確な現実へと導くものでもあった。

何気なく右方を見やると、そこに二人の人影が見えた。一人は白衣を着用している。おそらく医師だ。もう一人は看護婦のようである。

「気分はどうですか？ 吉原一矢空曹長」

看護婦の女性が尋ねてきた。スッキリとはしていないのだが、苦痛と呼べる感覚も無かった。喋る力が出せなかったなので、なんとか頷いてみた。ものうげな動作だったのだが、相手には意味が通じたようだ。

その看護婦は軽く微笑んでみせた。

ここは、何処です？

なにやら、唇が微かに震えていた。そう聞きたいらしい。

「基地の医療ブロックよ」

その声は違う方向から聞こえてきた。一矢は反対側に顔を向けてみた。

そこに舞がいた。答えたのは彼女であった。

舞は彼を一心に見つめていた。溢れ出そうな情感を、懸命に堪えているようでもあった。涙に目をウルウルさせている。

「...」

一矢が何か言ったようだった。彼女の名を呼んだようだった。

とにかく、頷き返す。

「私のこと、分かるよね？」

弱々しい声で尋ねた。一矢は口元に笑みを浮かべて頷いた。

「ヨカッタァ！」

決して大きな声ではない。押し殺した声。でも、激しい声だった。

一矢は包帯だらけの姿で、ベッドに横たえられていた。この病室の中にあるのは彼のベッドみで、ベッドの周囲はやたらと複雑そうな機械で囲まれている。周期的に電子音を発し、小さなディスプレイに某かの表示をしていた。これらの全てが、一矢の体をモニターし、或いは、身体機能の補助代行を行っているのだ。

一矢は、先の防空戦で意識を失う寸前の事を思い出していた。あの後、自分は救助され、今、治療を受けたところらしい。戦闘の結果については頭に浮かばなかった。

「もう大丈夫ですね。意識も回復したし、脳波、脈拍も安定してきましたから。でも、当分は絶対安静ですよ」

もう一度、反対側に目を向けると、医師と思われる人物が喋っていた。

どうやら自分は危地を脱したらしかった。だが、まだ頭は朦朧としていた。一矢は虚ろな目を天井に向けると、再び目を閉じた。

一命は取り止めた。だが、絶対安静、面会謝絶。

これが、現在の一矢に関する全てであった。

※ ※ ※

こうして、第一特殊戦闘機隊は、パイロット一名が懲罰刑で謹慎。もう一名が半身不随の重傷となり、初陣早々に壊滅状態となった。

※ ※ ※

横須賀基地の、喧騒に明け暮れた一日は終わった。だが、敵はこちらの事情など考慮してはくれなかった。

明払暁、CMDゾンデが多数の機影を捉えた。敵襲である。

即座にスクランブル命令が出た。昨日と同様、第一特殊戦闘隊にも出動命令が出された。敵は前回の三倍の規模の戦闘機を繰り出してきた。そのため、特例として独房入の猛にも、出動命令が、出た。

戦力は絶対的に不足しているのだ。

※ ※ ※

「俺は行かないぜ。俺はもうバトラスには乗らない。そう決めたんだよ」

独房まで迎えに来た舞の前で、猛は簡易ベッドにだらしなく座ったまま、言った。

「あなた、何言ってるの？」

「言ったとおりの意味さ。俺は、もうあんなモノには乗らない」

「どうしてエ？」

舞は半分、パニックになっているように見えた。

「ヤツには愛想が尽きたぜ」

「そんな事、言ってる場合じゃないでしょう！ 敵が来たのよ」

「単細胞だな、お前は。どうせ出て行って勝ったら、また、ここに入れられるんだろ」

「猛、今はそんな事...」

「俺はアイツの奴隷じゃない。人形でもない。どうせ死ぬならここで死んでやる」

「本気で言ってるの？」

舞は驚愕し、呆然としていた。

「これ以上、何を言っても無駄だ。俺は行かない」

「意固地にならないで、戻ってきて。みんな、待ってるわ」

「意固地になんかなってないぜ。ただ、わけの分からない大人どもの、言いなりになるのはたくさんだ」

「猛、お願い、考え直して。悔しいけど、私じゃ...」

猛は何も答えずに、ゴロリと簡易ベッドに横になり、背を向けてしまった。

「この、バカ！ バーカ、バカ、大バカ」

そう喚くなり、舞は踵を返し独房から飛び出していった。その声からは、嗚咽をこらえている事がハッキリと分かった。

※ ※ ※

プシュッと短い音がして、ドアが左右に滑る様に開いた。看護婦が入室して来る。

「吉原空曹長、点滴の時間です」

彼女はそう言うと、部屋の中に入って行った。

ここは、横須賀基地の医療区画。この部屋には、前日の戦いで重症を負った一矢が入院している。

モニター類や点滴の器具に囲まれたベッドの上で、一矢は寝ているはずであった。

「アッ！」

その看護婦は叫ぶと、息をのんだ。ベッドがカラだったのである。信じられなかった。安静にしていなければならない、重傷の患者であった。そもそも、自力で動けるはずがないのに...

彼女は狼狽したが、すぐに気を取り直した。そして医療ブロックのセンターに、事の次第を通報した。

次に廊下に飛び出すと、辺りを見回した。人影は無い。不意に一矢がパイロットだった事を思い出した。

まさかと思いながら、彼女は直感に従って走り出していた。

※ ※ ※

ダガーによく似た真緑のインフォグラフィックスが、発令所のメインスクリーンの上を滑るように動いていく。戦場へ向けて...

舞は出撃した。

彼女が出撃を志願した時、一矢という前例が出来た以上、誰も異を唱えなかった。ただ、神宮寺のみが慚然としていた。それでも、彼は舞の出撃を認めた。バトラスの参戦は彼も渴望するところであったのだ。

舞は知らないことだが、後輩の士官が猛の説得をしているという別のプランもあった。

※ ※ ※

戦闘配備中だが、ここは静寂が治めていた。独房区画である。その中の一房に猛はいる。背後の戸口に、人の気配がした。

「まるで駄々っ子ね...」

聞き覚えのない声だ。だが、澄んでいて美しい声だった。でも、猛は起きようとしなくて、壁を向いて寝そべったままでいた。

「私は小早川少尉。哨戒任務群のね」

そう言うと、彼女はククッと小さく笑ったようだった。猛は知らないことだが、彼女がディンゴ1だ。

「何の用だい？」

「この非常事態に、命令拒否とは良い度胸ね」

押さえられた口調が、冷たく聞こえた。

「みんな出撃したわよ。舞さんもね。良いの、ほっといても？」

「異星人にやられちまえば、何がどうなろうと関係ないさ」

「事情は舞さんから聞いたわ」

「ああ、そうかい」

ぶっきらぼうに喋ってしまった。怒られるかも...

「気持ちは分からなくもないわ。でも今は、みんなが一つになって、助け合わなければならない時ではないかしら？」

「...」

一応、労わってくれる気持ちもあるらしい。でも、それがどうしたという気分だった。

「バトラスの力が必要な。あの戦闘力は絶大だわ。町の市民だけじゃない、味方のパイロットだって、みんなが期待しているわ」

「だからって、俺に死ねっていいのかよ？」

まったく、バトラスなんかに関わったおかげで悪運だらけだ。

「もう、あなたしかいないわ。みんなを守る事が出来るのは」

「守る。フン、下らないぜ」

この一言が、彼女の気分を害したようであった。

「じゃあ、君は、自分の弟が命懸けで守り抜いたモノを、壊されても平気なの？」

怒鳴り声ではないが、ドスの効いた声だった。声の冷たさが増したようだった。

だが、そんな事より、一矢の名が出た時に思わず肩をピクッと動かしてしまっていた。しまったと思う。

「ええ、そうよ！」

その猛の反応を、彼女は見逃さなかったらしい。今までとは違う強い口調で言った。

「昨日の夜、あなたの弟君は文字通り、体を投げ出して、命を的にして、たった一人でメガコンプレックスを、たった一機のオートジャイロを、日本の空を守ったの！！ もし、あなたが彼の兄だというのなら、彼と同じ血がその体に流れているというのなら、あなたには彼の志を受け継ぐ義務があるはずよ！！！！」

さらに語気を強めて、まくしたてるように彼女は言い放った。

だが、小早川の言葉は、猛の心にかほどの感銘も呼び起こさなかった。

(ゴチャゴチャうるさい女だなァ...)

実に鬱陶しいセリフを吐く女だ。どんなヤツなのか顔を見てやろう。そう考えて猛は身を起こした。

(！！！)

起き上がって振り向いた猛は驚愕した。

そこに立っていたのは、スラリと、細身の超美人だったからだ。バイザーを上げているから、端正な顔立ちがよく見えた。美貌で、知性も感じられた。舞などとは全然比較にならない。しかも、冷たい目線でこちらを見ている。その怒った顔がまた...美しかった。なんという幸運！！！！

(ウヒョー！)

と思ったが、顔に出さないようにするのに苦労した。そして、ワザとゆっくり立ち上がった。ここは相手の言いなりになっておくのが得策だ。

さらに、両手でズボンの尻をはたいて時間を稼ぐ。

「分かったよ」

出来るだけ素気なく言った。さりげなくバイザーを被る。横目でチラリ。アノテーションもバッチリ、取得した。

「行けばいいんだろ、行けば...」

彼女の肩の線が、少しだけ丸みを帯びたように見えた。

彼女の前を横切って扉をぬける。横目に美しい顔を見て、更に胸がドキドキしてしまった。

廊下に出て歩き出す。チラと振り返ると、彼女がまだ自分を見送っていた。

(生きて帰れたら、また会えるかな?)

とても、気分が弾んだ。

それにしても、

(一矢が一人で戦っただって。フン、アイツのことだ...自分から行くって言い出したんじゃないのか？ 僕がやります、とか言ってな。まったくアイツは昔っからああなんだ。頼まれてもいないのに自分から人助けを買って出て、最後は俺に押し付けるんだ。もうすぐ二十歳になるっていうのに、困ったモンだぜ)

「まあ、いいさ。面倒見てやるぜ」

こんな一言を口に出すと、ニッと笑って足取りを速めた。

※ ※ ※

一矢が格納庫にたどり着いた事に、最初に気づいたのは整備主任であった。

「か、一矢ッ！」

ベテランの整備主任も、この時の一矢の姿には息をのんで固まった。主任の声を聞きつけて、他の整備士達も集まってきた。

一矢は基地全体が戦闘配置についている事を逆手に取り、人の往来の皆無に近い事を利用し、パイロットスーツに着替えまでして、格納庫にたどり着いたのだった。

「一矢、お前... なんのつもりだ」

「自分も発進します。キング・バトラスの応急処置は、済んでいるんでしょう？」

「そ、それはそうだが、お前、体はいいのか」

「な、何とかいけそうです」

そう言った一矢の額には、汗が滲んでいた。本来は起きて動ける体ではないのだ。戦える体ではないのだ。そんな一矢がなにか壮烈な義務感のようなものに突き動かされ、ここまでたどり着いたのだ。

そこに先の看護師が飛びこんで来た。

「吉原空曹長、どうして勝手に動くんですか」

彼女は一矢を見つけるなり叫んだ。そして、ポケットからモバイルを取り出し連絡をした。

「いました。やっぱり、バトラスの格納庫です。これから連れ戻します」

看護師は一矢を、さあと言う様に促した。

「待ってください。戦況も逼迫しているんです。バトラスで発進させてください」

一矢は、看護師から退きながら言った。

「それに自分は、大丈夫です」

そう言ってはみたが、実は喋るだけで体力が磨り減るような感じがしていた。

「無理です。やめて下さい」

看護婦が遮った。

「彼女の言うとおりで。吉原空曹長。お前は動ける体じゃない」

看護婦の背後から整備主任が言った。その口調はきっぱり、厳然としていた。

「しかし、戦況はどうなんですか。危ないんでしょ？」

「そんな事は無いッ。お前はケガを治すことが先決だろ」

「そうです。吉原空曹長。今が一番大事な時なんです。先生もそう言っていました」

しかし、一矢は怯まなかった。

「舞は何処にいるんですか。彼女の飛行時間を知ってるんですか？ 彼女は管制官の見習いで、戦闘訓練は僕の半分もないんですよ！」

一矢はたたみかけるように喋った。そして、そこにいる誰もが答えられなかった。一矢は更に言葉を続けた。

「それだって無茶じゃないですか」

「だからって、お前が出て行ってどうなるんだ。そんな体で…」

「そうですよ、吉原空曹長、その体では無理です」

整備主任と看護師の女性が説得を試みた。だが、一矢は諦めようとしなかった。

「そんな事、やってみなくちゃ分からないでしょう。このまま何もしないで見ているなんて出来ません。出来る事はやりたいんです。街を守るために、空を守るために」

しゃべり終えた一矢は、息をきらしていた。誰がどう見ても常人の体ではなかった。だが、彼はしゃべり続けた。

「このまま黙って見ていられないんです。お願いします、出撃させてください」

ただ、両の瞳の輝きだけが彼の意思の強さを表していた。

誰も、何も言えなかった。

一矢は皆を押しわけ駐機場へ向かおうとした。片足をひきずり必死に歩いていく。

「おい、一矢！」

不意に背後から声がした。

「バトラスの操縦ってのは、つき指しただけでも出来なくなるんだぜ」

驚いて振り向いた一矢は驚きの声をあげた。

「に、兄さん！」

猛が、立っていた。二人の視線が交錯した。猛は、ほんの一瞬だけ、微かに笑った様だった。

「ど、どうしてここに？」

それには答えず、猛は言った。

「キング・バトラスの修理は出来てるんだろ。俺が行ってやるよ」

「兄さん」

その時、初めて一矢の顔が輝いた。そして、周囲のみんなも。

「舞のヤツまで狩り出されたんじゃ、仕方ないよな。また、アイツのゴリ押しだろ」

「兄さん、司令だって好きでやってるんじゃないよ」

「どうかな。ま、とにかく行ってくるぜ」

「待って、兄さん」

歩き出そうとした猛を、今度は一矢がひきとめた。そして、格納庫の奥の方を指差した。

グレート・バトラスの鎧武者を連想させる巨大な機体が、物静かに佇立していた。

「ずっと、兄さんが来るのを待ってたと思うよ」

一矢に声をかけられるまで、猛はその姿を見つめていた。それは彼の愛機、彼の分身、もう一人の自分なのだ。

※ ※ ※

「データリンクを試験」

「超電磁スラスタ、1番、2番、起動。3番、4番、停止。5番、6番、7番、8番、起動」

「オールラウンドベクター」

「こんちは。こちらバトラス」

「OK、バトラス。君のNOは7だ。フライトレコーダーをオンにしてくれ」

「出撃許可をお願いします」

「許可する。武運を祈る、バトラス7」

グレート・バトラスは飛翔した。赤い地平線の向こうに、よりいっそう紅の朝日が顔を出していた。

※ ※ ※

世界の全てを赤色に染めるかのように、強烈な赤い砂塵の中を、目には見えない女神と、勇敢な鷲の群れが戦っている。毒をもつ蚊の一群と戦っている。のたうつように戦っている。もう夜明けだが、赤い砂塵の中にいる彼らは気付かない...

※ ※ ※

(うちのシミュレーターはホント、正確だわ)

片貝舞は、愛機クィーン・バトラスのコクピットの中でボヤいた、と言うか嘆いた。敵機の群れに突入して、コンボを入力しまくった。最初の数十秒で数機を撃墜したものの、こちらもヒットポイントをかなり失っていた。

訓練と同じパターンだった。そして、実戦では訓練以上のことは出来ない。司令がよくそう言っていた事を思い出していた。

内省している時ではなかった。現に今も、味方機が一機、爆発四散した。

ラフライダーとタルサリスでは性能に差が有り過ぎた。バトラスだけが超電磁スラスタの効力で、航空力学的にはあり得ない運動を可能とする事で、かろうじて互角に渡り合っていた。新兵器の実戦投入という場面なのだが、その数は僅か一機であり、パイロットは未成年者で、民間人上がりであった。

そんな事を考えているうちにも、またも僚機が撃墜されていた。それに対し、こちらのスコアは圧倒的に少ない。これでは一方的な屠殺だ。

「あの敵...」

撃墜される味方を見やりながら、舞は敵中の、ある二機の機体に注目していた。注目せざるを得なかった。その二機だけが、スクリーンの光学素子を活発に回折させていた。そして、味方機の存在による回折を沈黙させていたのだ。

ラフライダー隊は、三機一組で敵の一機に集中攻撃をかけ互いに援護をし、なんとかこの難敵を凌ごうとしていた。それに対しタルサリスは、編隊毎の戦闘は行わず単体で戦っていた。しかし、その中で例外があった。この特定の二機だけが、ペアを組み、変幻自在の連携を見せていた。そこから繰り出される縦横無礙の攻撃が、味方の戦力を次々と削いでいったのだ。

舞は暫し臍を噛んでいたが、やがて決意した。

「隊長！ 聞こえますか？」

「どうしたバトラス3」

「敵の中に妙に動きの良いのが、二機いると思うのですが」

「分かってる。ジェミニ α とジェミニ β だろう。今、束になってかかっているところだ」

事態を把握しやすくするため、敵に即席でコードネームを付与する事があった。

「私に単独で攻撃させて下さい」

舞には、ラフライダーではかえって味方の出血を増し、損害を大きくするだけだと思えていた。

「何ッ、それは無茶だ」

「敵のダンスに合わせてタップを踏めるのはバトラスだけです。私が囮役になります。その隙について、一機だけでも撃墜できれば...」

「ダメだ、危険すぎる」

「単独で局面を打開出来るのは、バトラスだけです！」

もう、これ以上考えあぐねている場合ではない。

「行きます！」

言い放つと、舞は不敵にもほくそ笑み、ダッシュのコンボを叩き込んだ。

「やめろ！ 片貝空曹」

制止する声を振りきり、舞はクィーン・バトラスを、空中戦の只中へ飛びこませている。

「しょうがない。援護してやる。どうなっても知らんぞ」

舞は口々に聞いてもいなかった。

クィーン・バトラスは戦闘区域の最激戦空域に突入した。目標は敵のエース、ジェミニ α と β ！

「行けェェェ！」

まっしぐらに突進した。超電磁レーザーを乱射しながら、敵の群れの中に突っ込んでいく。

「全超電磁スラスター、ベクトル集中！ 出力最大！ 突貫！」

彼女の命令に人工知能君が、再検討を提唱するが無視！ 超電磁レーザーを乱射して、フルスピードで突き進む。敵の突っ込んで来たのと、すれ違う。コンボを叩き込んで、素早く旋回。その間にも、もう一機の敵ジェミニ β を探す。

(いない！！！)

それでもコンボの入力は滞ることはなかった。だが、四方を見続けているが、ジェミニ β は見つからない。そもそも、粒子フィルターの解析画面は、赤くぼやけて、見えづらいものなのに...

(どうしよう)

思わず弱気になってしまった。それが一瞬のスキを生んでしまう。敵の攻撃がヒットした。

「左側腕二被弾。ぽいんと、五〇〇喪失」

ここで気後れしてはダメだ、と思う。だが、まだ見つからない。そして、目の前が敵機で埋め尽くされた...

「FREETA-DOOOOOP！！！！」

人工知能君もショート寸前だ。

「左だ！ バトラス3！」

もうダメか。舞が観念しかかったまさに直前、ラフライダー隊の隊長の声が舞を我に返らせた。

。

舞は冷静さを取り戻すと、コンボを叩き込んで機体を左にターンさせた。

「見つけた！！！」

確かにそこにいた。多くの僚機を後方に従えてジェミニβが遊弋していた。

「右にもいるぞ！」

誰の声か認識する時間も惜しく、視線を向ける。いや、機体ごと向きを変えた。ジェミニαがいた。

そして、次の警告が来た。

「一〇時の方向に敵だ」

舞は最後まで聞いてはいなかった。とにかくコンボを叩きこんで、新たな回避行動に移った。だが、側面からの攻撃を躲すと、正面からの攻撃が間髪いれず舞を襲う。ダメージポイントを計上してしまった。

こうして、二機の敵機が息つく間もなく、交互に舞に猛射を浴びせ続けた。彼らは舞の回避動作を高いレベルで予測出来ているらしかった。事実、今までは、この攻撃に晒されたものは確実に撃破されてきた。それでも、舞が撃墜を免れる事が出来たのは、バトラスの対被弾性と機動性の故である。

敵はクィーン・バトラスに攻撃を集中しつつも、その隙をついて襲い来るラフライダーの攻撃を悉く回避し、更にラフライダーを返り討ちにさえしていた。

結局、舞は自分の目論見が失敗に終わった事を認め、クィーン・バトラスを一時この敵戦域から離脱させる事を試みた。しかし、今度はこの二機の敵がクィーン・バトラス絡み付いてきた。

二機は二手に分かれてクィーン・バトラスに迫った。

問題は標的とされたクィーン・バトラスであった。舞はその精神力の持続の限界に達していた。攻撃を躲しはするのだが、それが精一杯の行動であり、動作にも思考にもゆとりが無かった。反撃など出来なかった。舞はコックピット内で、恐慌と意識朦朧の二重の悪夢的状态に陥っていた。

ヒットポイントがどんどん減少していく。

舞は恐怖を感じた。これが本当の恐怖なのだ！

「負けるものか！」

彼女は気を奮い立たせて叫んだ。逃げる事も泣く事も、考えはしなかった。

※ ※ ※

通信はディンゴ1とグレート・バトラスのコックピットでも傍受していた。

「とても苦戦しているみたい」

「らしいな」

「大丈夫よ。シミュレーターが正確なら、あなたにも勝ち目はあるわ」

「は？ 何だ、そりゃ」

「あなたの弟君がそう言ったのよ」

「ああ、なるほどね。じゃ、俺は良くて相討ちだね」

「エッ？」

「俺、アイツほど成績、良くないんだよ」

「エエッ！ そんなあ…」

「もう、着いたみたいだぜ。じゃあ、また」

グレート・バトラスは、加速した。

※ ※ ※

「ええい、しつこい。今度こそ、撃墜してやる」

舞と敵エースコンビの二回戦が始まった。

「ええい、こんなヤツ」

舞は強がりを行いながら、二手に分かれて接近してくる敵機に迫った。敵は頻繁にポジションチェンジを行い、容易に照準を付けさせてくれない。その動きは航空機には不可能な機動であった。舞の方も立て続けに多様なコンボを叩きこんで、バトラスを素早く機動させ、敵の攻撃を躲そうと試みていた。回避運動をしつつも、相互に射撃の応酬を繰り返す。どちらもヒットはしなかった。

やがて、二機の敵は一直線に並んだかと思うと、一気に加速してクィーン・バトラスめがけて突っ込んできた。

「しまった」

舞がうろたえたのは、この戦法の巧妙さに気付いたからであった。先頭の一機が破壊力線を乱射しつつ突き進んでくる。問題は後ろの一機だ。僚機の影に隠れて完全に気配をけしている。隙を見て飛び出てくるつもりなのだろう。予期せぬ二列目からの飛び出しだ。そうして、二機に斉射をされたら避けられるだろうか？

舞は先頭の敵機を撃ち落すべく超電磁レーザーを必死に放ったが、敵は縦列隊形を維持したまま、上下、左右と、あらゆる方向に自在に動き、全ての射撃が回避された。さらに先頭の敵機が破壊力線を応射して、バトラスを攻撃に専念させてはくれない。

「チッ」

舞は覚悟を決め敵めがけて突き進んだ。敵影がコクピットのスクリーンに大きく映ってくる。舞はその機影の背後から殺気ともとれる気配を感じた。

「来たッ」

後ろの二機めの敵が、先頭の影から踊り出るやいなや、破壊力線を放った。こちらも撃ち返す。

爆光があがり、紅天の空を白濁の中に埋めた。

両者はすれ違っていた。

クィーン・バトラスは撃墜されてはいなかった。

「F R A - D W E E E E E E T」

だが、その両の腕が肩先から消失していた。

そして、敵は二機とも健在であった。機首をこちらに向け、再びクィーン・バトラスに迫ってきた。

舞は今度こそ敗北を覚悟した。もう、敵の攻撃を避ける自信は無かった。自分の限界を越えたと悟らされていた。

「こ、こんな敵」

迫ってくる敵を見ながら、舞は口惜しそうに言った。

「ぜろ方向二、敵機」

舞を我に返らせたのは、人工知能君の鳴き声の様な叫びだった。

「！」

直上に別のタルサリスがいた。

舞は、例の二機を回避する事だけに気をとられ、そこを真上から第三の敵がつけ込んだのであった。舞は全く気付いていなかった。

舞は今度こそ、顔が引きつっていた。観念していた。

「後はお願ひ、一矢、...猛」

舞は、解析スクリーンをこれまでになく凝視した。

その瞳が大きく開かれた。

敵が迫ってくる。

「！」

舞は身をすくめ、ギュッと瞳を閉じた。スクリーンが眩しく発光したからだ。

だが、それは敵の攻撃の煌めきではなかった。

思いもよらぬ方向から光条が走り敵に突き刺さったのだ。超電磁レーザーの光だった。

第三の敵は爆発四散した。同時に頭上を何かが過ぎていった。典型的な一撃離脱の動きだ。

舞は全てを悟った。

全ては赤い霞の中であって、なにも見えてはいなかったが、肉眼で全てを見る事が出来たなら、巨大な揺らめきがゆっくりと降下してくるのが確認出来ただろう。

そして、舞の心の目には、グレート・バトラスの勇姿がハッキリと見えていた。

※ ※ ※

コクピットの中で猛は震えていた。

遂に来たぞ...戦場に来たのだ！ これは実戦だ。叫びだしたくなるような狂おしさだった。

解析スクリーンの映像は素っ気ない色の濃淡の揺らめきだけだったが、それが意味するものが分かり過ぎるほどに分かる猛は己の心を昂ぶらせた。

人工知能君が戦況の分析を述べていたが聞いてはいない。

「猛！！！」

舞の声がつつざくように響いた。びっくりして我に返った。そして、その声を聞き、あらためて彼女の無事を実感した。間に合って良かったと素直に感謝した。

「さがれ、舞！」

猛は舞が続けて喋ろうとするのを遮った。視線を前に戻す。

スクリーンの上で多数の光学素子が回折を繰り返している。大群だ。何機いるだろう。

「ちくしょう、コイツら...」

猛は歯噛みしていた。スクリーンから感じるのは凄いプレッシャーだった。

全てを振り払って叫んだ。

「目視確認完了。敵機と認定だ！ 全超電磁スラスタ、ベクトル集中！ 出力最大！ 突貫！

」

※ ※ ※

舞は息を飲んでスクリーンを凝視した。全周スクリーンは粒子フィルターの解析画像を投映する時は、薄暗くぼんやりとした赤い発光をするだけなのだが、今は、飛行物体の反応を示す光学素子の回折が光の群となって蠢き、舞の顔を暗闇に浮かび上がらせている。蚊柱の様に群れて見えるタルサリスども。

そして、友軍を示す緑色の光を帯びた蛍のような光点。グレート・バトラスだ。

「！」

緑色の輝きが動き出した。蚊柱へ直線的に進んでいる。スピードがグングンと上がっていく。これでは正面突撃ではないか！ いかにも、いつも無思慮な猛らしかった。でも、敵は四〇機以上いるのだ。無茶だ。

「ちょっとオ、猛！ 何考えてるのよ、猪じゃないんだから」

通信マイクに思いっきり叫んだ。しかし、グレート・バトラスの動きに変化はない。

あっという間に、グレート・バトラスは蚊柱に飛び込んでしまった。

「ヒエッ」

舞は顔をこわばらせていた。彼女の経験上、自殺行為であるからだ。自分が先刻、敵の真っ只中に飛び込んで半殺しにされた事を思い出していた。

「無茶よオ！」

嘆きなのか、鳴き声なのか、判然としない口調だった。

目は大きく見開かれ、食いつくように緑色の光点を見つめていた。

だが、彼女は意外な光景を見ることになった。

※ ※ ※

「シミュレーターって、案外、不正確なんだな...」

自分にはどこまで出来るか分からない、でも、もう突っ込むしかない。そう思って突撃した。敵を何機墜とせるか、相討ち覚悟だった。

最初は夢中でコンボを叩き込みまくるだけだった。今までになく、短時間に大量のコンボを入力した。コンボを叩くことしか頭になかった。初戦果の昂揚も、感じている暇はなかった。頭がのぼせ上がって思考が視野狭窄的になっていた。

しかし、ふと気付いた。

「あれれれれ？」

敵を二、三機、撃墜して感じた事だが、ヤツらの動きはスローモーだった。タラタラと駆け足しているようだった。その動きがハッキリクッキリと見えた。完全にトレース出来ていた。ヒットポイントもたくさん残っている。

シミュレーターではとても残念な成績だっただけに、ホッとした。驚いてさえいた。

「マジで、妙だな？」

本当に訝しいことだった... 手応えがなかった。実に呆気ない。

訓練の時とは大違いだ。実戦では訓練以上のことは出来ない。教官に言われたことはウソでは

ないか？なんて考えたりした。

（もしかして、シミュレーターが故障してたのかな...？）

...などと考えているうちにも、数機を撃墜していた。

こんな考え事しながら敵を撃ち墜とせるなんて、訓練時にはあり得ないことだった。

「おっとオ！」

危うく、後方に回り込もうとしたヤツがいた。しかし、バッチリ視界の隅に捉えて見逃しはしなかった。

機体を切り返してコンボを叩く。超電磁レーザーという光の矢が敵に突き刺さった。

「へへへ」

思わず笑みがこぼれた。コイツら、ショボいではないか。チャラ男だ。猛はサクサクと撃墜スコアを重ねた。快調、快調、絶好調。

気分はまさに“君が行くなら、何処へでも♪”だった。

グレート・バトラスの猛威は、それまで劣勢だった状況を、揺り動かし始めた。戦いの一角が崩れ出していた。敵も味方も最後の力を、その一角に集中させ始めた。これからの数分間の戦いを制した側が、勝者となるであろう。

そうしている間にもグレート・バトラスは、活発に戦っていた。そのグレートに一機、正面から突っ込んでくる機体があった。

「みくびるな！」

猛は叩き落としにかかろうとした。

「危ない！ よけて」

舞の悲鳴と、敵機の影からもう一機が姿を現すのが同時だった。

「ゲッ！」

二機編隊の敵機は、併行して破壊力線を乱射してきた。ちょっと意表を突かれたが、敵の動きは対応出来ないスピードではなかった。

グレートは一瞬のうちに体を捻ると横っ飛びに飛んだ。ブンと空気を裂く音が聞こえそうだ。

「猛、その二機は連携攻撃がすごいから気をつけて。味方も散々、墜とされてるの」

「チッ、一番手強い相手ってことか... 誰も手を出すなよ」

通信を聞きながら猛は叫んだ。そうしている間に、敵は二手に分かれて散開し、左右からグレートを挟撃しようと迫ってきた。左右両サイドを使うワイドアタックだ。機械の冷たさが殺気と思える。

「チィィィィ」

敵は高速で左右から体当たりをするかの様に迫ってくる。そして、破壊力線を乱射しながら、交叉して飛び去っていった。グレートは、この攻撃をкаろうじて躲した。

敵機はクルリと反転すると再び、肉迫攻撃とでも呼ぶべき攻撃を開始した。

猛は全神経を両足と両目に集中した。左右の敵を交互に視覚に捉える。左から来る破壊力線を躲すと、右からの攻撃が機体をかすめる。

また、左からの攻撃が来る。両足のレバーを操作し機体を傾け、バトラスを右に左に回転さ

せる。バトラスは箆球で行われるフェイント、フェイクのような動きを見せた。そこを破壊力線がかすめていく。

「今いくから、がんばって！」

「舞、お前、こんなのにてこずっていたのか。だらしねエ」

「何、強がり言ってるの」

「まあ、見ている」

そのやり取りの間にも、猛は何度も敵の攻撃を躲し続けた。躲しながら彼の眼は、敵の動きを少しずつ見極め始めていた。特に敵の方向転換のタイミングを。

ジョイスティック握る両手の指が緊張に小さく震える。

猛は、両の足のレバーでバトラスの両足のスラスターを操作し、方向転換させ敵の攻撃を回避し、同時に左右、各々の手に握ったジョイスティックで照準用レティクルを二個同時に操作し、二機の敵を一度に捕捉しようと試みた。

再び敵と交叉する。一機は前を、もう一機は背面を通り過ぎて行く。グレートとの距離がひらいてゆく。この間に猛は右腕左腕の超電磁メーザーの照準を、それぞれジェミニ α と β に重ね合わせていた。

両の手のジョイスティックでバトラスの手首の超電磁メーザーを操作し、背もたれはバトラスの胴体の動きに連動する。これでバトラスの胴体と腕の超電磁スラスターの動きを制御する。両足が踏んでいる短いレバーは、バトラスの両脚に連動。これがバトラスの脛脛に内蔵された計二機のスラスターを制御する。文字通り、五体をつかってバトラスを操る。さらにスクリーン上の映像にも気を配る。こんな事が出来るのも、猛のシステムへの習熟の故、と言っても過言ではない。彼自身は気付いていないが、彼の幼年期からの特訓と天性の反射神経による賜物である。...そして、敵が反転しようとした瞬間...

「今だッ！」

猛はコンボを叩いた。

バトラスの両手が左右にビンと伸び、その手の先から光条が走った。放たれた二本の光線は、それぞれの目標に突き刺さった。

敵は木端微塵になっていた。

「やったー」

周囲の誰もが、左右の爆光に照らされているグレート・バトラスの姿に快哉を叫んだ。

※ ※ ※

戦いは終局した。エイセスを失った敵は引き上げて行った。

最後に哨戒機からの報告が来た。

「こちら、ディンゴ1、これより哨戒任務に入る。現在、天気晴朗、電波快晴。関東上空に敵機なし」

皆が安堵の吐息をついていた。

第2章

第二章 ジャリン子登場

「コマンドコントロールより、バトラス1へ...」

発令所から、今日、三回目の命令が届いた。

通信員は、エリア53に敵機が侵入した事、その戦力は十六機（フォーフィンガーズが四つで十六機なのだ）である事を告げた上で、迎撃を命令し、最後に、「増援部隊が合流する予定です」と言って、通信を終了した。

猛は「了解」と返事をする、通信を終了した。

上を見やると、赤い霞を透して鈍く光る太陽。あまり熱は感じない。

下を眺めれば、赤色フィルター越しに見ているかの様な錆びた町並み。市民の避難は、どこまで完了しているのだろうか？

※ ※ ※

この赤い色素が充満したかの様な世界で、目には見えない巨人と、毒針を持つ蚊が乱舞していた。目まぐるしい錯綜した舞いだった。それは友好的なダンスなどではない。一方が一方を、殲滅せずにはおかない闘争なのだ。

※ ※ ※

あの戦いからD日の後...

まったくのところ、あの時の戦果はもはや遠い過去、他所の場所の出来事の様すら思われた。よく考えてみれば、先日の戦果が、敵にとって如何ほどの痛手となったのか定かではない。

敵の勢いに陰りの様なものは感じられない。

そして、猛は今日も戦っている。

「超電磁スラスタ、出力最大で前進！」

真っ直ぐ前を見据えて叫んだ。

ここから後ろに味方はいないのだ。

ヴォオオオオ...

超電磁スラスタ特有の重低音が腹に響いてくる。猛には、それが古典的楽曲、ワルキューレの騎行のように聞こえた。自分は今、深紅のオペラハウス空間にいるのだ。

※ ※ ※

もし、ここがオペラハウスだったなら、意味不明で脈絡のない狂想曲が奏でられている最中だった。そう、表現するのがふさわしかろう。

だが、誰もその曲を聴きたくはなかつたろう。何故ならば、その狂想は狂騒だった。死神の狂乱だった。

発令所。実際にそこは、戦闘オペラハウスとあだ名をつけられていた。

オペレータ達の声が間断なく飛び交い、空気を押しのけている。パネルに目を向ければ、状況の変化を示すインフォグラフィックスが一時も澱むことなく、弾ける様に点滅しては、色と形をかえていた。

インフォグラフィックスの変化は、戦闘機隊の損害と地上の被害を表していた。そして、多くの生命が失われたことも表していた。

危険を意味する紫色のエリアが広がっていた。

そのエリア間を行き来する、簡略化されたインフォグラフィックスが、味方の戦闘機隊を意味していた。そのどれもが戦力充足を示す黄緑色でなく、黄色、焦げ茶色、或いは、黒に染まっていた。

既に、我が方の戦闘機は二十七機が撃破されていた。敵に与えた損害はバトラスの健闘もあって四〇機である。

「バトラス1、エリア53に急行します。パイロットのバイタル、異常なし」

パニックになりそうな喧噪の中で、神宮寺の耳を衝いたのはその報告だった。

バトラスは既に、敵編隊を二つ屠っていた。そして、ほとんど間を置かずに新手と戦うことになった。それも単独で。

パネルに表示された地図を見ると、一つのインフォグラフィックスが、エリア53を示すゾーンに移動して、その色を水色から赤へと変化させた。

先日の交戦でハッキリした通り、防衛隊の戦闘機ラフライダーと、異星人が駆る戦闘機タルサリスとの間には、あまりにも性能に開きがあった。

タルサリスは超電磁スラスタを内蔵し、変幻自在に宙を舞うのである。

数をもって対抗するしか策は無かった。複数の戦闘機でチームを作り、一機のタルサリスに連携攻撃を仕掛けるのである。

ここで割を喰ったのがグレート・バトラスであった。

バトラスのオールラウンドベクトルシステムと被弾に対する耐久力により、単機のバトラスが多数のタルサリスと互角以上の戦いが出来る事が、これも先日の戦闘で分かったのである。事前のシミュレーターによる試験の実績すら覆したバトラスは、単機でもって一つの戦域の防護を担わされる事になったのである。まさに「数的不利を担える選手がいるから（他の地点で）数的有利を作る」（サッカー解説者山本昌邦さんの言葉）のである。

とは言え、何某かの措置が必要であった。

パネルの隅には、数個のインフォグラフィックスが映っている。これらは損害を受けた部隊の回復状況を表している。簡略化されたグラフィックスに戦力の回復が色で示され、部隊のナンバーがクロヌキで表示されていた。

神宮寺は総司令官へ再編の済んだ部隊を再発進させ、バトラスの援軍にすることを提言し受理された。

応急修理と補給の終了した機体が全て発進する。目的地はエリア53。

それと、入れ違うように急報が入る。

「エリア29 三〇九航空団、戦力五十パーセント喪失！」

オペレータの声は裏返っていた。

エリア29を見るとオレンジがレッドに変わっていた。

すべてのオペレータ達が手を止めて、幕僚達に視線を注いでいた。目の前の業務の事を完全に

忘れ去ったかの様だ。

だが、幕僚連も愕然としてしいた。

「中部方面隊からの増援はどうなっている？」

神宮寺は傍らの幕僚に尋ねた。

これはかねてから計画されていた事で、敵に数で対抗するために、各方面隊の間で部隊を融通する取り決めがなされていたのだ。

殆どのエリアで戦力が拮抗した今、この増援が到着すれば、形勢を逆転出来るであろう。唯一の頼みの綱だった。

「ダメだ、間に合わん！」

現在の情勢では、彼らの到着を待つだけの時間は無かった。だが、もう手持ちの戦力も尽き果てていた。

数的有利を作り出して対抗しても、こうなるのだった。タルサリスが如何に優れた性能を持ち、巧妙な運用をされているかが思い知らされた。防衛隊の戦闘機にとって、タルサリスが決して越える事の出来ない高く、分厚い壁の様に思え、虚無感が湧いてくる。しかし、嘆いている場合ではなかった。

対処しなくてはならないのだ。自分らの敗北は、日本の空を、邪悪な異星人リーデに明け渡すことに他ならないのだ！

しかし、誰も何も言えなかった... もはや、現実には戦える機体は存在しないのだ。

(やんぬるかな...)

そんな空気が発令所を支配した。

「オイ、本部、聞こえるか！」

突然、怒声がした。全員がハツとなって、声のした方向を、天井のスピーカを注視した。

「その問題は、俺様が解決してやる！」

「？」

「こちらに増援は要らないぜ！」

言葉遣いの悪さに眉をひそめた者もいたが、スピーカからなおも声がした。

※ ※ ※

ヘルメット内蔵のスピーカは沈黙したままだ。鈍い！

業を煮やして、猛は叫んだ。

「増援は要らないと言ったんだ。エリア53の敵は俺が一人で片付けてやる。だから、ここに向かっている部隊を急行させる」

彼はヘルメットに備え付けのマイクに叫んだ。

グレート・バトラスのコクピットで、彼は発令所のやり取りを傍受していた。そして、自分の声を発令所に聞かせるように、担当のオペレータに頼んだのだった。

「猛！」

神宮寺の声だった。

「お前は、自分の言ってる事が分かっているのか？ エリア53には一六機も敵がいるんだぞ」

それに対する返答は傍若無人にも思えるものだった。

「分かってるぜ。でもよ、それがたとえ三二機でも、俺様が、一人で片付けてやる」

神宮寺は息を飲んだ。

「絶対、大丈夫だ！」

「...」

数秒間、応答が無かった。やがて、神宮寺の声がした。

「猛、お前の提案を受け入れよう。だが、...お前の後ろには味方はいない。それを忘れるな」

「分かってらァ」

猛の声は元気いっぱいだった。

「へへへ」

猛の士気は旺盛であった。たった一つ、光明があったから...

それは実際のタルサリスの動きが、訓練のシミュレーターのそれよりも、動きがワンテンポ遅いことである。前回の初陣で分かった事であった。

「あらーむ・めっせーじ。れんじ4ニ飛行物体多数確認。」

人工知能君が告げた。エリア53はもう目の前である。

猛はキッと前を見据えた。もはや、何の違和感も持たなくなった赤い霞の中に、十六個の敵影が表示されている。

「全超電磁スラスター、ベクトル集中、出力最大！」さらに意識を集中させて叫んだ。「突貫！」

ヴォオオオオオオ...

腹の底に響く低い重低音が伝わってくる。加速と同時に体がシートに沈む。グレート・バトラスは目の前の蚊柱に突っ込んでいく。

目視確認をサクッと済ませて、例によってコンボを叩きまくる。タルサリスは散開して押し包もうとしてきた。だが、先手を取ったのは猛。たちまち、三機、撃墜する。カンが冴えているのか、敵の動きが良く見える。眼前のタルサリスに超電磁レーザーを浴びせつつも、目は視界の隅の別のタルサリスを捉えていた。

そして、複雑な機動飛行を繰り返す。コクピット内は天地無用状態。だが、猛の脳裏には、バトラスの周囲三六〇度の情景がクッキリとイメージ出来ていた。

ロクに確かめもしないで、斜め後ろに光の咆哮を放つ...

そして、見事に撃墜していた。

「ヘッ、見たか！」

気分はまさしく”君が行くなら何処へでも《everywhere you go》”だった。

※ ※ ※

各オペレータ達は目の前に任務に没頭しているように見えたが、本当はそんな気分ではなかった。皆、エリア53の戦闘の詳細が気になって、思考をかき乱されて仕方なかったはずだ。

神宮寺、他の幕僚達はエリア53の情勢に注視していた。

エリア53を示すスクリーンでは、インフォグラフィックの変化から、グレート・バトラスが

敵の戦力を確実に削り取っているのが分かった。それに比して、自らが受けた損害は軽微と言って良いレベル。

エリア29にも、インフォグラフィックが接近していて、応急修理の済んだ機体で臨時に編成した部隊が、敵に取り付こうとしている事を表していた。中部方面隊からの増援も接近しつつある。

バイオレットのエリアは、その色をオレンジに変えつつあった。

(いけるか?)

幕僚達の誰もが、そう期待しかけていた。

だが、そうはならなかった。

「CMDゾンデより警報。エリア47にて敵編隊を確認。繰り返す～」

「!!!!!!!!!!!!」

スクリーンの一部にバイオレットゾーンが生起する。

無情であった。誰が何と言おうと、無情であった。

オペレータ達も幕僚達も青ざめて凍りついていた。その場の空気も凝固したうように思えた。中には、本当に冷気を感じていた者もいた。

だが、時間だけは粛々と進み、彼らに判断と対処を迫ったのだった。

だが、少し経つと、彼らの真っ青だった顔は充血した。気が動転したのか、目眩を感じていた者もいたのだ。

皆が、顔を見合わせる。だが、発言する者、発言出来た者はいなかった。

周囲の視線を考える余裕もなくしたのか、コンソールに両の手をつく者。

天井を仰ぐ者もいた...

「ダメだ。諦めるな」

このままではモラルが崩壊する。神宮寺は叫んだ。或いは、自分自身への叱咤なのかもしれないが...

と、最高司令部の空気には似つかわしくない、穏やかな口調の声がした。

「発令所。聞こえますか？ こちら、第6ハンガー」

皆、ハッとなって、天井のスピーカへ視線を注いだ。

「こちら、キング・バトラス。遅れて申し訳ありません。発進準備完了しました」

天井から聞こえる声は、まさに天の声だった。

神宮寺だけが、最初の声で誰なのか気付くことが出来た。聞き慣れた声であった。実を言うと、彼がバトラスのパイロットの中で、最も信頼している男の声だった。

「一矢、傷はもう良いのか？」

声の主は第一章で半殺しになった吉原一矢の声であった。深手を負い現場復帰には時間がかかるものと、神宮寺は思っていた。

「はい。全快ではありませんが、行けます」

確かにその声の力強さは、瀕死の重傷者の声ではなかった。

「よし、キング・バトラス、発進だ。目標はエリア47だ」

「了解」

スクリーンが発着場の映像に切り替わった。幕僚はもちろん、オペレータ達も、タスクそっちのけでスクリーンを注視した。

そこにキング・バトラスの姿が見えた。

※ ※ ※

キング・バトラスのコクピットからは発令所のあるメインタワーが良く見えた。

吉原一矢は、淡々と発進ステージをエスカレートしていた。

「データリンクを試験」

管制官の声。

「超電磁スラスタ、1番、2番、起動。3番、4番、停止。5番、6番、7番、8番、起動」

「オールラウンドベクター」

「こんにちは。こちらバトラス」

「OK、バトラス。君のNOは7だ。フライトレコーダーをオンにしてくれ」

「出撃許可をお願いします」

「許可する。武運を祈る、バトラス7」

「K・バトラス、行きま〜す」

キング・バトラスの巨体が舞い上がった。

※ ※ ※

キング・バトラスを示すインフォグラフィックが、スクリーンの上を滑るように移動するのを見ていたら、背後に人の気配がした。

振り向くと、白衣を着た学者然とした初老のオッサンが立っていた。

その男は神宮寺が自分に気付いたと知ると、言った。

「例の計画、急いだ方が良さそうですね」

「...」

神宮寺はすぐには答えなかった。確かに急ぐべきであった。だが、素直に即答出来る類いのものでなかったのだ。小さく頷く。それからようやく、赤い地平線の向こうに、よりいっそう紅の朝日が顔を出していたのに気付いた。

※ ※ ※

太陽は高く昇っていた。紅の空も、蒼天に戻っている。

戦闘は終了したのだ。多大な犠牲と引き換えに...そして、二機のバトラスの健闘に支えられ、敵は駆逐されたのだ。

だが、横須賀基地に平穏はなかった。戦時下なのだ。

現に今も、轟くような金属音を引きずって、ラフライダーの一群が離陸していった。その下では重量感のある装甲車両が行き交っている。また、ここからは見えないが、港湾区画では、空母、フリゲート、潜水艦隊が出撃して行く。

そんな景色を眺めながらも、日差しだけは心地よかった。もう春だ。

それはそうと、人使いの荒い話で、猛と一矢は呼び出しを受けていた。帰還後、数時間の仮眠

を取っただけなのに、だ。だが、呼び出した相手は神宮寺ではなかった。

舞も呼ばれていた。久々に三人の顔が揃った。

「もう良いのか、一矢？」

「うん、すっかり回復したよ」

「ねエ、あんなに彼方此方、骨が折れて、内蔵に突き刺さったりしてたのに、本当に治ったの？」

「うん、そうだよ」

ケロリと答えた。（昔の物語ではね、どんな大ケガしても、何故か、次の回には治っちゃって
いたんだよ。それに比べて、○ユウ・ホ△イや、□波レ×の怪我のリアルなこと...）

というわけで、瀕死の重傷を負ったはずの一矢も完全に回復していた。

「ところで、たいしたもんだな。復帰早々に九機撃墜かよ」

「運良く、応援が来てくれたからだよ。兄さんこそ一人で、一六機を墜としたじゃないか」

「でも、ホントに、良かったわ。キング・バトラスが動いてくれて。もう、いっぱい、いっぱい
いだったから...」

感嘆した口調で舞は言った。だだ、顔を曇らせると...「でも、今回は良かったけど、この先、
どうなるのかしら？」と続けた。

「確かに戦力不足だね」

一矢がそう言うと、猛も肩を落とした。そして、

「バトラスがもっと、あればなあ...」とため息まじりに言った。

そのとたん、ハツとなって、三人とも、お互いを見合わせていた。そして、三人ともサッと視線
をそらしていた。

偶然にも、皆、同じことを、頭に思い浮かべたようであった。それも、だいぶ曰く因縁の、あ
りそうな事のようにであった。

「.....」

「.....」

「.....」

風がそよいだ。

「ところで、博士はまだなのか？ 自分から呼び出しておいて」

沈黙に耐えかねたのか、猛が口を開いた。

「僕、何か、嫌な予感がするなァ...」

「予感なんかしなくても、いつも厄介事ばかりなのは分かりきってるぜ。あの疫病神」

「それも、そうか」

「ちょっとオ、私のお祖父ちゃんなんがからね」

「だから、こんな、ザンネンな孫が生まれてきたんだろ？」

「言えてる」

「それ、どういう意味！」

舞の蹴りが繰り出された。

「おっとオ！」

舞の履いた赤い靴のつま先が、猛をかすめた。

ザシッ。黒い革靴を履いた足が三人の後ろで大地を踏みしめた。

話に気を取られていて、人が近づいて来ていた事に気付かなかったのだ。

「待たせたな、諸君」

背後に白衣を纏った、細身の爺さんが立っていた。頭は天辺が禿げあがり、側髪と後ろ髪は伸ばしていたが、それらは白髪であった。

ごく自然に背筋を伸ばして、キリリと立っている姿は、実年齢よりも若く見えた。

しかしながら、この人物を特徴づけているのは眼であった。モノクル越しのその眼差しは、一目見ただけで、この男危ない、と誰しもが思わされずにはいられなかった。危険、狂気を感じさせる眼であった。

この男が片貝健一郎博士、バトラスの設計者であり、開発計画の責任者でもあった。

昔はサイボーグ工学の日本における第一人者であったが、今は巨大ロボット工学の世界的権威であった。（一応、博士はいるのだ。昔のロボットアニメの定番なのだ）ちなみに彼はこのプロジェクトに孫娘を投じていた。“舞”である。舞の実の祖父でもあった。実験中に不慮の事故で死亡した、同じくロボット工学者であった舞の両親に代わり、祖母と一緒に舞の親代わりであった。（昔のロボットアニメでは、博士には孫娘がいて、孫だ、というそれだけの理由でパイロットにさせられていたんだよ）

彼の人柄を一言で言うなら、奇人変人であった。また一筋縄ではいかない食わせ者とも言われていた。

典型的な“まっとさいえんちすと”なのだ。

猛は面と向かって博士を“クソジジイ”と呼んでいた、が...

「あっ、このマッドサイエンティスト。何しに来やがった」

今日も、猛は罵倒としか思えない発言をした。一矢はそれを聞いて苦虫をつぶしたように顔をしかめた。

「今日は何の用ですか、博士？」

一矢が問うた。さっさと本筋に入りたかったのだ。待ちくたびれていた。

「なあに、2、3、バトラスのパラメーターを変更したいので、立ち会ってもらいたかったのだよ」

「なんだと！ また、いじくるつもりか？」

猛がからんだ。博士はニッと笑って平然としていた。

猛の乱暴な言葉にも痛痒を感じていないようであった。でも、それはこの人物が寛大だからではなく、いつも研究中のテーマで頭がいっぱいだからなのだ。

そんな事に、とっくに一矢は気付いていたが、更に悪い予感がした。そのテーマというものが、ロクでもないモノなのだ。この老人の昔からの性格であった。

「ところで、先日、バトラスが初陣を飾ったと聞いたが？ 何でも、猛が大戦果を上げたそうだね？」

そう問われると、三人とも表情を渋くした。

「お、おう、まあな...」

猛も口籠もっていた。

三人ともバツが悪かったのだ。なにしろ、一矢が大破。舞も半壊。猛は独房入の状態から無理矢理、出動したのだ。

かっこ悪かった。

「まあ、シミュレーターのと通りの結果と言えるね」

「エッ... それどういう意味ですか？」

「言った通りだよ。なにしろ、猛だけは特殊なシミュレーターを使っていたのだからね」

「????」

「何をかくそう、彼のシミュレーターは、敵戦闘機のパラメーターが水増ししてあったのだよ」

そう言うと、博士は“かかか”と笑った。

「どのくらい、水増ししたんですか？」

この時、一矢は心の中で震え上がっていた。

「フム、実数値にして5%だ」

「それ、兄さんには説明してあったんでしょね!!!」

くっつかかのような、質問と言うには険しい口調だった。一〇〇%、イエスという答えを要求している。そう感じさせる絶叫だった。

「いいや、何も言ってない。そんな事したら、詰まらん、ウグッ!...ではなくて、甘えが生じて隙だらけになりはしないかね？」

「!!!!!!!!!!!!」

「神宮寺司令からも、そう言われていた事でもある」

一矢と舞は震え上がった。そして、恐る恐る、猛の方へ振り返った。今度こそ、彼がキレて暴れると思ったのだ。器物損壊、傷害罪なんて事になったらどうしよう？ 二人の偽らざる本音であった。

しかし、ふり返った二人が見たものは、呆然とした猛の死んだような顔であった。

引きつった一矢と舞の顔は、猛の視界の中にはあったが、見えてはいなかった。

猛の胸には今、冷たい秋風のようなものが去来していた...

(俺、やっぱり、辞めさせてもらおうかなア...)

心が寒かった。

虚しかった。

(あの美人の少尉さんも、どこ探しても見つからないし... 山奥に逃げちまえば、追いかけてこないだろう...)

※ ※ ※

「オーイ、猛」

彼はかなりの時間、呆然としたままだっらしい。気がつくと、舞が目の前で手のひらをヒラヒラさせいた。

一方、猛が暴れないのに安心したのだろうか、一矢は博士と話し込んでいた。

「...でも、兄さんは成績が散々で悩んでたんですよ。司令も一方的に説教しかしないし」

「しかしだ、現に君と舞は半殺しにされたのではないかね」

「それはそうですけど、でも、いきなり5%なんて無茶ですよ。しかも本人には言わないなんて」

「安心したまえ。今日から全員、8%にアップしろと司令からお達しが来た」

「エエエエッ！！！」

脇で聞き入っていた舞と猛も目の色を変えた。

「待ってくれ」

「無理、無理、それ、無理だから」

だが、博士は続けた。

「8%にアップして馴し飛行した後で、速やかに10%に再調整しろとの事だ」

「消費税か！　じゃない...出来るわけないだろう！」

三人はムカついて口を尖らせた。

「そう頭ごなしに決めつけるのはどうかな」

博士はニマッと笑った。言うまでもないが、災いの前兆だった。

「現に子供達はあっさり順応したぞ」

三人はハッとなって表情を変えた。

一瞬、顔を見合わせた。

「子供達？　ジャリ共を呼んだのか？」

代表して猛が尋ねた。たった今まで、怒って強硬な抗議をしていた事を忘れたかの様だ。

博士の目がモノクルの奥で一瞬、キラリと光った。

「見たまえ」

博士はそう言って振り向くと、空の彼方へと右腕を伸ばした。博士のモノクルは、情報端末のモバイルである。

それに倣って、三人も自分のバイザーを倒した。

まさに快晴と言って良い、果てしない青空が広がっている。

...

そよ風も良い感じだ。

...

「何もないぜ」

「...」

博士は沈黙していた。

...

...

タイミングがズレたらしい。

...

...

欠伸をガマン出来なくなってきた頃、バイザーにバルーンが投映された。バルーン、あるいはフキダシのようなものである。

それらは二つ、投映されていて、アノテーションが表記されている。今は、各々の機体認識番号が映っていた。

猛には見慣れた番号であった。

プライム・バトラスだ。少し、忌々しかった。

その次に、人名らしきものが見てとれた。

一条将 村越遥とあった。

※ ※ ※

バルーンに表記されたアノテーションは、望遠スコープが捉えた映像に映っている人影が、猛達である事を教えてくれていた。

ここは全周スクリーンに囲まれたカプセルの内部の様な場所...バトラス共通のコクピットの中だ。

「ヘェ、出迎えにきてくれてるんだ」

そう言う、この空間の主の顔は、目びさし《バイザー》をかぶっているの、口元しか視認出来ない。

その口元には、まだ幼さを感じさせるものがあった。体付きも細く華奢に感じられる。

「遥、博士や、兄ちゃん達がいるよ」

隣を飛ぶ僚機から通信が来た。今は、お互いに姿が見えないが。

「チョット、挨拶しようか？」

「いいネ」

その声は、どちらも大人のモノではなかった。

「じゃ、カメレオンモードを解除しよう。いくよ」

「OK」

まだ幼さを感じさせる唇がニマッと笑った。

※ ※ ※

猛の眼が一瞬、ピクッと細められた。

空の一点が一瞬だけ揺らめいたのだ。そして、何かが姿を現した。

続いて、もう一つが姿を見せた。

「フン！」

猛は、鼻を鳴らすと、唇をへの字にゆがめた。そして、その二つを目で追いつけた。

二つは並んで近づいてくる。どンドンスピードを上げながら接近してくる。

接近するものの輪郭が見えてくる。人の姿。でも巨大。

ロボットである。だが、猛達のバトラスとは異質なデザイン。

顔は人の顔を模してはいない。目はアイマスクのような一枚のフロントガラス。

グレート・バトラスよりは小型であった。全長はおよそ、二十五メートルぐらいだろうか。

キング、クィーン、グレートの三体のバトラスの性能テストのデータを参考に開発された、量産用機体である。

顔面にまで意匠を凝らした前三機とは異なり、その頭部はフルフェイスのヘルメットのようなであった。全体的に小柄で装飾のようなものは施されていない。愛想の無い機体である。

だが、簡潔さを備えていた。

コードネームは“プライム・バトラス”

そのプライム・バトラス二機が、どんどん降下してこちらへ迫ってきた。そして、地表スレスレ、猛達の頭上を通過した。

きiiiiiiiiんん！！

轟音とともに突風を巻き上げた。髪や衣服が煽られたが、猛は微動だにせず、これを見送った。

二機は機首（頭）を引き起こして上昇にかかる。

しゅうううんん...

見事に一致した動きで、二機は水平にして、同曲率のシュプールを描いた。そして、赤い尾を曳きながら空へ昇っていく。ケロ粒子を垂れ流しだしたのだ。

二機は豆粒ほどの大きさになるまで昇ると、左右に開いた。そのままターンして斜めに降下を始めた。

二機はすれ違おうと、それぞれ高速で螺旋を描きながら降下した。蠅が飛び回っているかのような目まぐるしさで...

赤色の尾が後に続いた。飛行計画にはない勝手な行為であった。

二筋の螺旋は絡みあった。二機のバトラスはぶつかるのではないか？と思えるほどの僅差で交差していた。双方のパイロットは、自分達の操縦感覚によほどの自信があるらしい。

二重螺旋が描かれた。

二つのバトラスは、あっという間に地上スレスレに到達した。それから、弾けとんだかのように反転した。そして、素早く方向転換すると、今、描いた螺旋の渦の中へ飛び込んだ。螺旋の中心で合流し、そのまま、ピッタリくっついたようになって、螺旋の真ん中を貫くように上昇した。

そして、螺旋を突き抜けた。

続けて、青空のキャンパスに赤いペンで、特大の円弧を描いた。

途中まで来て、鋭角に折れ曲がる。上昇し、また鋭角に折れて、降下。そこから、水平飛行をすると、二人の線は繋がった。

二機は、そこで分離すると、それぞれに違う小円や、模様を描く。

そして、横須賀の空に、

巨大なバイキ○マ△の落書きが完成した！！！！

猛は、それを気にもとめずにモバイルを口元にあてて、言った。

「こら、バトラスはオモチャじゃないぞ。それにケロ粒子も無駄に使うな！！ さっさと着陸しろ！」

「売買金〜ン」という声が聞こえたが、はしゃいでいた。そして、飛び去った。

「まったく」

「でも、楽しそうだね」

一矢が言った。

確かにそうだった。

二機のバトラスは、本当に自由に空を舞っていた。自由という言葉の真の意味がそこにあるようにすら思えた。

あたかも、ボールと戯れるブラジル人の子供のようであった。

「それに、見て。綺麗なループだわ」

先ほどの曲芸飛行で描いたシュプールを見つめる舞の声はうっとりした感じだった。

改めて、見つめてみると、たしかに精密に描画されたような曲線だった。

あの二人は、本当にバトラスを自分の手足の如く扱えるのだ。ごく自然に操ることが出来るのだ。

(もうすぐ追い越されるかもな...)

などと思ったりした。

「行こう。18番格納庫だ」

博士の声で我にかえった。そして、18番格納庫へ向かった。

○インロンに背を向けて...

※ ※ ※

駐機場を何対もの目が注視している。全てはバ△キン○のせいだった。

突如、空に描かれた巨大な口イキ○マの落書きは、横須賀基地の隊員達の間には騒動を起こしていた。

作業を中断し、窓を開けて見入る者。屋上に出て来るもの。間近で見ようと、外に出て来る者もいた。もちろん、モバイルをかざす者も多くいる。

たった今、その騒動の主が着陸したのだ。

巨大なクローラーに乗って二体のバトラスが移動していた。穏やかな陽光を浴びる白色のボディに虹色の斑が揺れ動いていた。ラバロイド装甲の特長だ。

だが、初めて見るタイプであった。今日まで、ここで活動してきた三機のバトラスとは異なっている。

その事にも関心があったが、一番気になるのはパイロットは誰か？という事だった。あんなふざけた事を仕出かすのはどんなヤツなのだろうか？ということだった。

それを思うと、クローラーのゆっくりとした移動がじれったかった。

だが、それは皆の気持ちを弄ぶかの様にノソノソと動いている。

やがて...

「オー」

格納庫の手前で一端停止しただけなのだが、聴衆はどよめいた。

「！」

今度は、野次馬達はピタと黙った。息を飲んだ。後頭部のハッチがパカッと開いたのだ。両機とも。

そして、人影が出て来た。

その二つの人影は、大人と見るには細くて、背が低かった。

「？」

聴衆の疑念、探究心はますます深まった。

風が吹き抜ける。誰も気にとめない。皆、二人をジッと見つめたままだ。

人影がバイザーを脱いだ。

その顔はまぎれもなく童顔だった。女の子と男の子らしかった。あどけない顔貌にクリクリした目が可愛らしく見えた。

「エッ！ 子供ッ？」

野次馬達は、自分達の目をゴリゴリした短い線で何重にも縁取られた目にして、一瞬にして固まっていた。

二人は皆の視線に気が付いたのか、ニマツと笑うと手を振った。

いかにも、いたずら者に見えた事だった。

※ ※ ※

あのイタズラ者め。幾つになっても治らない...

猛達はぼやきながら第18格納庫に入った。

そこは大型機専用に使えられた建物で、今も巨大な機体が整備を受けていた。大型VTOL輸送機グローブマスターVである。

戦車一個小隊を搭載して、垂直に離発着し。数千キロを飛ぶことが出来た。

それだけに巨大な機体であった。

その巨体に視野をふさがれそうだったが、それでも、その向こうにプライム・バトラスの頭が見えた。それを目当てに多くの機体の間を縫うように進む。

やがて、二機のプライム・バトラスが各々、ガントリーに佇立している区画にたどり着いた。

そのガントリーの周りにも人だかりが見えた。この格納庫で作業している整備士達だ。無理にでも手を休めて、見物に来たのかもしれない。

猛達が、その場にきた時、ちょうどパイロットが降りてくるところであった。

バトラス後頭部に設置された自動巻キャプスタンに巻き付けられているファイバー索に掴まり、二人の人影がゆっくりと降りてくる...

その二人は先刻見た通り、児童だった。女の子と男の子だった。猛に言わせるとクソガキ、なのだが。

少女の方が先に飛び降りた。スタツと着地すると、背筋を伸ばし、胸を張る。

そのキリッとした身のこなしに整備士達は見とれていた。

この女の子が村越遥《むらこしはるか》。年齢十二歳で小学校6年生だ。けっこう可愛い娘ではあるが、おませで生意気な口をきくところがあった。

もう一人の男の子も、少し遅れて降り立った。この子が、一条将《いちじょうまさる》。

「こんにちは」

遥の弾んだ声の挨拶が、響く様に拡がる。将は遥の後ろでペコリとお辞儀をした。

「遥！」

元気よく挨拶した遥に、なじるような声をかけたのは舞であった。

「あっ、お姉ちゃん」

遥はテテテと駆け寄ってきた。

「あなた、なんてことするの！ 基地中、大騒ぎだわ」

「ウフフフ」

遥は澄まし顔で、唇の両端をニマッと持ち上げる。

「綺麗なループでしょ？」

悪びれた様子が全然なかった。

「エッ...」

たしかに非の打ち所がなかった。

「フン、旋回のスピードがまだ遅いぜ」

そう言って、猛が割り込んできた。

「あっ、猛お兄ちゃん」

「加速するのを怖がってるな」

「チェッ、練習したんだよオ」

ホントにガッカリしたような口調だった。それから、「何よお...自分だって、あ〜んな異星人の戦闘機に、キリキリ舞いさせられちゃってサア...」

と言って唇を尖らせた。

「？」

「ちゃ〜んと、動画見たんだからね」

「？」

「戦闘のだよ」

「ホントか？」

少女は、ニコと笑った。

「シヨボいじゃん、あんなの」

「シヨボいって、タルサリスのことか？」

「うん！」

元気の良い、力強い返事だった。

「いい加減なこと言うな！」

「だって、ホントだもん」

「お前なんかが、相手に出来るもんか」

「ブー、残念でした。出来たモン」

そう言えば、子供達はパラメーターを変更して難易度を上げたシミュレーターに簡単に順応した、という博士の言葉を思い出した。博士は無責任でいい加減な人間だが、科学や技術に関し

ては極めて厳格である。妥協しない硬骨漢だった。

と言うことは、この二人は本当に難易レベルの上がったシミュレーターに完熟したという事なのか？

「ウ〜ム」

猛は慚然として、鼻高々としている遥を見つめた。不思議だった。

そんなところに、新たに人がやって来る気配がした。

見ると、パイロットスーツを着た数人の男達がいた。

「ども」

猛は彼らに会釈した。

ラフライダー部隊のパイロット達であった。

彼らは、バトラスの訓練の相手をしていたので、その戦闘力も良く分かっていて、バトラスが大戦果をだすことにも驚いていない。猛達を頭ごなしに邪魔者扱いすることもなく、逆に色々と面倒をみてもらっていた。

そんな彼らも、最近では北極戦線に要員を引き抜かれる事が続く。

戻ってくる者は、いない。

「ねえねえ、本当に君達が操縦してたのかい？」

「幾つかの時から、バトラスに乗ってるの？」

彼らから口々に質問が出た。

遥はよどみなく答えた。

「シミュレーターは六歳の時からです。実機に乗ったのは八歳からです」(ゴーカートにはこのくらいから乗りませんか?) その頃は、墜落回避プログラムが厳しくて、あまり自由に動かさませんでした。ユル〜い旋回や上昇降下だけです。少しずつレベルを上げていったんです。でも操縦より、バトラスの構造を勉強する方が難しかったです。あと、数学とか...」

「そんなことまで教わるのか」

「英才教育されてたんだねエ」

その言葉に、飛び上がらんばかりに驚いたのは猛だった。彼にとって、あまりに非常識な発言だった。一方、舞は背後で苦笑。

「まさか、コイツらなんか、勉強サボって遊ぶことしか能のない、のび〇とカ△オの合成人間ですよ」

「ムカ」

遥は横目で猛を睨んだ。

だが、何かを言い返す前に、パイロットの側から声が掛かった。

「あのループ、綺麗だねエ。プロの曲芸飛行みたいだよ」

「そうですか！ ウワ〜イ、あんまり自信なかったんだけど、ありがとうございます」

元気の良い声だ。パッと顔も明るくなった。

そして、横目で猛を見て、

「シッシッシ」

とせせら笑った。猛は不満そうだった。

「ずいぶん練習したんだろうね」

「いや～、軽いですよォ」

とても上機嫌で、完全に極楽とんぼ状態だ。

「フン、昔は目を回してばかりだったろ」

「あなた、最初は乗るの、嫌がってたじゃない」

舞が口をはさんだ。

「あーっ、お姉ちゃんまで、ひど～い」

周囲に笑いの輪が広がった。更に話は弾んで笑いは大きくなっていく。

だが...

一人だけ、その輪に加わろうとしない男がいた。

再会に浮かれている気分ではなかったのだ。むしろ、浮かれているこの場の人々に対して、苛立ちを感じてもいた。

遥と将が来ると聞いて、彼には直感的に、ある不安が頭に浮かんでいたのだ。そして、その事を考えめぐねていたのだ。

それは兄と舞にも分っても良いはずだった。だから、二人に対して特に苛立っていた。

「あの！」

声が上がった。その語気の強さは苛立ちの故だったのかもしれないが、爆笑の嵐に負けていなかった。だから、皆が少し驚いて、その声の主の方を見た。

一矢だった。

彼は今まで、一言も無く黙っていたが、始めて、言葉を発した。

皆の視線が彼に注がれていた。だが、彼の視線の先には片貝博士しかいなかった。

二人の視線が交差する。ただならぬものが感じられた。

そして一矢は、言った。

「もしかしてコイツらを、戦闘に行かせるつもりなのですか？」

一矢は、その不安を単刀直入にぶつけた。

その言葉に周囲の空気が、急に緊張したものに変わった。あまりに深刻な内容の言葉だった。

「率直な質問だな」

表情にも、態度にも、いささかの揺るぎも感じられなかった。自分を睨み、まるで敵意でもあるかの様な一矢の視線に対して、いささかも動じていない。

そして、言葉を続けた。

「ならば、こちらも、率直に言おう...」

「待ってくれ」

言葉の途中で猛が割り込んできた。

「やっぱり、そういう話なのか？」先刻とは表情が変わっていた。

「いくらなんでも無茶過ぎるわ」舞も同じであった。

二人とも一矢と同じ事を予感はしていたらしい。

「最初に言うておくけどよ…」

今度は博士が割り込んだ。

「訓練成績は君達に見劣りしない。局所的だが、むしろ上回っている。二人の飛行時間はもう二千時間を超えている。他のパイロットは考えられんのだ」

「そういう問題じゃ無いぜ。コイツらはまだ十二歳なんだぞ！」

「神宮寺司令からも依頼が来ている」

「そんなの、建前だわ。お祖父ちゃん、本当はバトラスの力を試してみたいだけよ。」

「確かに、これでバトラスの性能が証明出来る。私の設計の正しさが示される」

「お祖父ちゃん、そんな理由で二人を戦わせるの！」

「私のエゴではない。今、戦局を挽回出来るとしたら、バトラスしかない。軍の上層部と政治家達にバトラスの力を示して見せなくてはならんのだ」

この言葉には、そこにいた整備員とパイロット達の方が言葉が無かった。

「たしかに、それは博士が仰る通りだ。俺達は力が足りなさすぎる」

パイロットの一人が、そう告白した。

周囲の無言は、追認を意味していた。

「私、反対。大反対」

舞は断固、主張した。

「俺もだ！」

「僕も！」

双子も叫んだ。

背後から声かけられた。

「戦力が足りないのは、お前達の方が分かっているはずだ」

振り返ると神宮寺がいた。

「先日の戦闘のことを考えろ。納得出来るはずだ」

「…」

「どうしても戦力が足りないのだ」

「…」

「では、この事態をどう乗り切る。二体のバトラスが加わることで、救われるかもしれない命の事をどう考える？」

理屈はその通りなのかもしれなかった。だが、三人ともその結論を受け入れることが出来な
いでいた。

そんな彼らを見て、神宮寺がまた言葉を続けた。

「これは命令だ。フォーメーション訓練が玉成しだい、二人は戦闘に参加！ 以後、第一特殊戦
闘機隊はバトラス五機体制をとるものとする」

「なんだって！」

「そんな無茶な命令、従えません」

一矢がとうとう、禁断の言葉を放った。

神宮寺との間に険悪な視線が交わされる。

「あのさあ...そんなに言うならさ、模擬戦で決着つけようよ！」

遥だ。唇を尖らせている。

「なんだって？」

猛の言葉は、驚きを意味していたが、口調は怒りの口調だった。

「だから、実際やってみればいいじゃん。それで判断してよ」

「お前、本気か。俺達に勝てるつもりでいるのか」

「うん」

「あのなあ」

「いっぱい練習したモン。パラメーターを上げてもらって、もう慣れたよ。gだってガマンできるし。て言うか、あんなカトンボみたいなタルサリス相手に手こずってるんじゃ、お兄ちゃん達だって大したことないじゃんか」

「お前なあ」

「空の上で白黒ハッキリさせようよ」

「...」

「私達二人で、兄ちゃん達三人、相手にしてみせるよ」

と言って、遥は振り向いて将を見る。将は無反応だったが、否定しない事で了解したものと、遥は認識した。

だが、その言葉に猛の情緒は臨界点を突破した。

「良く言った。上等だ。こっちこそ、俺一人でお前ら二人を叩きのめしてやる。さあ、空に出ようぜ」

「FREETA-DOOOOOP」

「!!!!!!」

激昂したところに、警報が鳴ったので余計にびっくりした。

アナウンスが続いた。

「CMDゾンデより入電。鹿島灘東方に敵影確認。繰り返す...」

諍いは中断した。

※ ※ ※

「グレート・バトラス、発進するぞ」

キング、クィーンに続き、猛の乗るグレートが飛び立った。

さすがに、と言うか当然なのかもしれないが、ジャリン子達には待機命令が出た。

誘導電波に乗せて進路を設定する。

だが、味方と編隊を組もうとして、猛は驚いた。

横須賀基地から出撃したのは、バトラス三機の他は、ラフライダー四機だけである。

「...」

おそらく、それが精一杯なのだろう。一瞬、脳裏にプライム・バトラスのことが思い浮かんだが、戦力はここにあるだけでは無いと、自分に言い聞かせ、慌てて打ち消そうとした。だが、

心許ない感情が頭の中から消えなかった。

※ ※ ※

不安はこの男の場合、重圧と化していた。

発令所の大パネルに表示されたインフォグラフィックスの色や形の変化を見つめながら、神宮寺は自分の決断に迷っていた。

索敵情報によると、敵機は例によってタルサリス。その数は六〇機。

これに対して、我が方の戦力は四〇機のラフライダーとバトラス三機であった。敵の新手が他所の方面に現れる事(その確率は大きい)を考慮すれば、最初に動かす戦力は、これが限度であった。

戦力差を補うためにはバトラスの能力を当て込むしかなかった。

この戦力の査定は、自分の決断の正しさを後押ししているように思えた。でも、合理性だけで自分の決断に確信は持てなかった。いや、合理性だけで可否を判定するべきではないと思った。

だが、そんな迷いも発令所内の喧噪の前では、こだわってはいられなかった。

パネル上のインフォグラフィックスは、目まぐるしいが、それはコンピューターに統御されたものである。

その時、全てのインフォグラフィックスが消えた。発令所が暗闇になった。オペレータ達がどよめく。

次の瞬間、今度は一斉に点滅を始めていた。

激しく点滅し、形状そのものが目まぐるしく切り替わる。発令所の全景が暗闇に染められては、眩しすぎるほど眩しく照らし出される。その絶え間ない繰り返し...

「！」

神宮寺は直感的に察知していた。その点滅が通常の情報処理に基づくものではないことを。それは無秩序なパターンの点滅だった。

答えは一つしかなかった。

「コードブルー！ サイバージャックです」

訓練が行き届いているのか、オペレータ達も、たちまち現状を理解して、対応する。確かに予見されていた事態ではあった。

光と闇がコンマ一秒間隔のコスチュームプレイを演じている...

...

しばしの沈黙の後で、オペレータが告げた。

「GCHQより、予備回線で通達...」

GCHQ、サイバー攻撃対応の主幹部局である。

※ ※ ※

混乱はここも同じだった。グレート・バトラスのコクピットで猛は目をパチクリしていた。

「CYBER warfare が始動シマシタ。GCHQノ指示ニヨリ、本機ヲねっとわーくヨリ遮断シマス」

「どうなってるんだ？」

突然、スクリーンに投影されていた情報諸元が一斉に狂った。そして今、自分は軍用ネットワークより切り離されてしまった。

どうやら、かねてから言われていたサイバースペースで何事かがあったらしい。そう考えて納得するしかなかった。以前、訓練で教わっていた。とはいえ、訓練である。今は戦略コンピューターとネットワークが現実にはトラブルしているのだ。そんな事が... 戦略コンピューターがハッキングされたっていいのか！敵にはそれが可能なのだ。自分はそんな連中と戦っているのだ。

そんな事よりも、だ。自分は、今、オフラインで飛行しているのだ。

オフライン！ オフライン！ オフラインなんだぞ！！！！

本当にこんな体験をする事になるとは... 生まれて初めてだ。神がいるなら恨めしい。

なんと心許ないのだろう。なにか、自分の心に大きな欠落が出来てしまった感じがした。根無し草...宙を漂っているような不安感に襲われた。孤独、寂寥、何て言えば良いのだろうか？ 本当に当て所も無い。

この時代に生きる人々が、如何にいつも繋がった状態が当然過ぎる社会で生きてきたのか、という事でもある。

とはいえ、やはり想定されていたことで、マニュアルはあった。自慢ではないが、猛は暗唱できた。

というわけで、人工知能君（彼は無事らしい）に命じて、アナログ無線を作動させた。

ガーガーピーピーピーガー

原始的な雑音。まさにノイズだ。

「聞こえてますか？ 誰か、応答して下さい...」

一矢の声だった。

「こちら、グレート・バトラス」

猛も発信した。

「良かった。こちら、クィーン・バトラス」

ホッとした口調で舞の声が聞こえた。

「皆、無事だね...」

三人は通信を続けた。

※ ※ ※

交信の結果、ラフライダー隊ともはぐれてしまったことが分かった。

どうしたものか...

とにかく、当初の戦闘予定空域へ向かうべきだ。だが、オフライン状態で自力で到達できるだろうか？

と、考え込んだ時...

「応答して下さい。こちら、プライム・バトラス。村越遥、一条将です」

という通信が飛び込んできた。

(エッ?)

慌てて、通話する。

「遥、将、こちら猛だ。聞こえるか？」

「アッ。お兄ちゃん。良かったア」

「お前達、来てたのか？ 何でだ？」

「司令が念のために付いて行けて」

「司令が？ なし崩しに事を進める気か？ 大人め... それで今、何処に居るんだ？」

「だいたいエリア29のあたりだよ」

「エリア29か 随分と後ろだな。まあ、安全てことか」

気楽なもんだった。

※ ※ ※

もっと後方の発令所では、復旧作業が進んでいた。

神宮寺はもちろん、気楽どころではない。

「GCHQが防壁を構築中。ネットワーク、一部が回復するようです」

オペレータの声と同時に、鬱陶しい点滅が収まった。

パネルには徐々に情報が戻る。順調に水色のエリアが広がっていく。皆の緊張が解けた。

しかし、突然、オペレータの声が響く！

「CMDゾンデより入電。敵編隊感知。エリア28！」

同時に敵機を示す紫紺のインフォグラフィックスが現れた。だが、そこは...

「！！！」

そこは関東ブロック幕張副都心の寸前であった。

「一番、近くにいる部隊はどれだ？」

「まだ、情報が入りません」

「とにかく、警報をだせ」

「ダメです。まだ、ネットワークが半分しか回復していません」

「どの部隊とも通信出来ないのか？」

「む、無理です。現状ではアナログ無線でのテレグラフ通信なら可能です」

「最大出力で送信しろ！」

(だれか受信してくれ...)

自分が神にすぎるとしかない事に、神宮寺は神を恨めしく思った。

※ ※ ※

苦々しさは、時間の経過とともに苛立ちと息苦しさに変化していく。

実際は、1分にも満たない時間だったのだが、神宮寺には数時間とも思える時が経過した。

「GCHQより伝達。アカマルウェアの検出成功。ネットワークは順次、回復します」

味方の位置が判明していく。

そして...

「エリア34にバトラス三機。エリア29にプライム・バトラスが二機、滞空しています」

「呼び出せ！」

「こちらから呼びかけることは、まだ無理です。でも、通信が傍受出来ました」

神宮寺もオペレータも激昂していた。

言われるまでもなく、その通信がオープンになった。

そちらの通信の主達も激昂していた。

「さっきのテレグラフを見ただろう！ 無理は承知だ。遥と将はエリア29のすぐ隣にいるんだぞ」

猛の声だ。

「ダメよ！ 絶対ダメ！」

舞である。

「俺達の後ろには、もっと大勢の十二歳や、それより幼い子供達がいるんだ」

「そんな理屈！」

「他に、どうしようもないんだ！ 大勢の人が死んじまうんだ！」

「あなた、正気なの？ 自分の言ってる事が分かってるの？」

「司令に言われてるじゃないか。俺達に負けや失敗はゆるされない。どうしても勝たなくちゃあいけないんだ」

「だからって、二人が犠牲になっても良いって言うの」

今度は一矢が語りかけた。

「舞、舞、落ち着いて聞いてくれ。分かってるよ。理屈じゃないんだって。でも、他に誰もいないんだ。本当にいないんだ。だったら、たとえ民間人だろうと十二歳だろうと、やる時はやるしかないだろう」

「...」

舞の返事は無かった。

だが、しばしの沈黙の後、

「遥、将、よく聞いて」と呼びかけてきた。

そして続けた。

「皆の命が危ないの。今、助けられるのは貴方達だけなの。シミュレーターでやった事を思い出して、そこでやった事をやればいいの。決して自分から敵の中に飛び込まないこと」

神宮寺は舞が泣いていることに気付いた。嗚咽をこらえながら必死に声を振り絞っているのだ、と分かった。

舞の言葉は続いた。

「バトラスのヒットポイントは高いから、被弾しても慌てないこと。どんな時も二対一で戦って、一人は必ず後をカバーするの... 私達が着くまで、時間を稼いでくれれば、それで良いの...」

そこまで喋ると、舞は気力を使い果たしかのようだった。

だが、すぐに続けた。

「行きなさい！ 遥、将！」

そして、最後の一言を言い放った。

「空を、空を、守りなさい！」

「ラジャー！ 行くよ、お姉ちゃん」

「大丈夫だよ、お姉ちゃん。僕達出来るから」

意外だが、二人の声に気負いはなかった。

(.....)

神宮寺は操作員に、猛達がエリア28に到着するための所要時間を尋ねた。

「十七分です」

そう答えが返ってきた。

※ ※ ※

十七分に躍起になっていた...

「全超電磁スラスター、ベクトル集中、出力最大。前進！！」

猛、一矢、舞は同時に叫んだ。

凄まじい加速gに体がシートに押しつけられた。だが、かまっている場合ではなかった。

三体の不可視的巨人は赤霞の中を突き進む。霞が後方へ流れ出し、やがて紅の奔流となった。

ネットワークはどんどん回復し、スクリーンにはインフォグラフィックスが群で姿を現してくる。でも、エリア28近傍は依然、不明瞭だった。

「十七分、持ちこたえてくれ」

猛は念じた。

とにかく全力だ。ありったけを発揮するのだ。

※ ※ ※

同時刻、発令所...

「ありったけの戦力を、エリア28に急行させろ。最大速度でだ！！」

神宮寺が指示を出していた。

オペレータ達は大わらわで、その命令を伝達していく。

パネル上では、たくさんのインフォグラフィックスがエリア28に群がるようであった。

今、航空防衛隊関東方面隊の全戦力の半数がエリア28に殺到しようとしている。

※ ※ ※

「これから、エリア28に進入するよ。第2戦闘速度です」

雑音混じりに、そんな声が聞き取られた。

遥と将はケロ粒子を戦闘濃度に散布した。一緒にカメレオンモードも作動させる。

「目標、確認したよ」

どうやら、上手く人工知能君が敵を把握したらしい。だが、リンクが切れているので、詳細なことは分からない。

「加速するよ」

二人が何か喋る度に、猛も一矢も通信を傍受している者全て、そして、誰よりも舞が、心臓がビクンと跳ねていた。

「前進」

ガーピーガーガー...

急に何も聞き取れなくなった。

※ ※ ※

「聞こえないわ。何も聞こえないわ。遙一ッ！ 将一ッ！」

「クソったれえ！」

舞の錯乱した声を聞きながら、猛は二人に攻撃指示を出した事を後悔していた。

実を言えば、戦いになってヤバそうだったら、何でもいいから逃げろと命令するつもりだったのだ。まさか、こんなにあっさりと通信が途絶えるとは思ってもみなかった。

「舞、兄さんも、落ち着くんだ。ネットワークはドンドン回復しているよ。インフォグラフィックスを見て。こんなにたくさん味方が来てくれたんだよ」

確かにパネルを見ると、インフォグラフィックスが群れをなして、こちらに向かっていた。

※ ※ ※

そのインフォグラフィックスの中で、最先頭にいるのは猛達バトラスの部隊だった。たった三機だ...

交信が途絶したまま、十七分が経過していた。接近するうちに、猛達三人も互いに交信出来なくなっていた。だが、もうエリア28に進入しているはずだった。

粒子フィルターが機能して、周辺空域を解析していく...

スクリーンに紫色をした光点が浮かび上がる。

飛行物体だ。ポツ、ポツと少しずつ出て来る。

猛は、思わず、身を乗り出した。だが、これが、何なのか、まだ、具体的な特定は出来ない。

接近するにつれて、光点の数は、加速的に増えていき、やがて蚊柱を形成した。

これは全部、タルサリスなのか？

(手遅れなのかッ！)

猛は我知らずのうちに歯をキツく噛みしめていた。歯ぎしりしかかっていた。そのまま噛みしめ続けていたら、奥歯が砕けていたかもしれない。

だが、そうはならなかった。

映像が徐々に鮮明化する。蚊柱の様子が、少しは、細かく、観察出来る様になる。

よく見ると、意外な光景だった。

紫色の光点の、蚊柱のような群れが、かき回されているように見えた。そして、その渦の中心に、蝶の様に舞う、二つの光点があった。その二つが、紫色の蚊柱をかき回していた。引きずり回していた。そして、紫色の点は、力尽きたかの様にその灯を途絶えてさせて、蚊柱は眼に見えて減退していく。

「接近だ。もっと、接近しろ！」

猛は叫んだ。もう、最大速度で飛行しているのだが、それを忘れて叫んだ。もう少しで、粒子フィルターの解析画像が目視判別出来る距離になるのだ。

猛は蚊柱の突入寸前まで、近づいた。

ベルトよチギれる、と言わんばかりに身を乗り出す。そして、目を凝らした。

鮮明とはいえないが、その二つの光点の機影が見えた。

ぼやけている。

でも、それは人の姿をしていた。間違いない。頭と胴体。そして、二本の手足を備えている。猛は宣言した。

「目視確認。友軍機と認定だ！」

その二つの点は、緑色の灯火に変わった。味方を表す色。宝石の様にすら思えた。

「遥、将、無事だったか」

歓喜して、安堵して、体中から力が抜けた。（この時、歓喜の声を上げたのは、発令所も同じだった）

ガーガー、ピーガーピー

途中から沈黙してしまったスピーカが、眠りから覚めたかのように音を発しだした。

「ゴロニャ〜ン！」

「ニャ〜ゴォ！」

スピーカから出て来たのは、間の抜けた声であった。

「??？」

意味不明だ。だが、遥と将の声だ。それは間違いない。

だが、考え込む必要はなかった。このタイミングでスクリーンに、ズラリとインフォグラフィックスが浮かび上がった。ネットワークが復活したのだ。

あらゆる情報諸元が明確になる。

猛は気を逸らせながら、プライム・バトラスにリンクを繋いだ。

プライム・バトラスの動きが良く分かった。

「ニャオ〜ン」

猫真似した声と共に、二機のプライム・バトラスは、その身を振り一回転半《ファイブフォーティ》させた。その様は猫捻りに酷似、いや、猫捻りそのものであった。巨大人型ロボットが、異星人との先頭の真っ只中で、猫捻りをしているのだ。そして、両の手の超電磁レーザーを掃射して、薙ぎはらうかのようにタルサリスを撃破していたのだった。

「良かった。二人とも無事なのね...」

「どうなってんだ？ 敵の数はもっと多いはずじゃないか」

ネットワークが回復、舞と一矢の言葉が聞こえた。

当初想定していたより、敵の数はとても少なかった。だが、最初の想定に大きな誤差は無いはずである。むしろ、少なく見積もっていたと言ってもハズレでは無いはずだ。

だが...

「まさか、あなた達だけで」

「フニャ〜オ」

舞に疑問を差し挟む間を与えず、じゃりん子二人は荒れ狂っていた。猫と化して...

敵はドンドン撃ち落とされた。

※ ※ ※

敵は逃走した。

じゃりん子二人は約15分間に二〇機のタルサリスを撃墜したことになる。初陣にして、信じ

がたいレコードだった。

だが、そうなのだから、仕方が無い。

「なんか、心に膝カクンされた気分だな」

「案ずるより産むが易しか」

逃げる敵を遠くに眺め、猛と一矢は偽らざる感想を述べた。まさに、この一言に尽きた。

「私、メソメソ泣いて、バカみたい」

二人の身を案じていた事が、間抜けに思えた。

「だから、言ったジャンか」

「散々、シミュレーターやったんだよ。すぐ、慣れたけどネ」

遥と将は、興奮するでもなく、胸を張って言った。何事も無かったかのような顔をしていた。

「恐れ入りました」

二人が偉く見えた。

...と、遥が無線で話しかけてきた。

「お願いがあるの」

...ということだった。まずは着陸しようと言うのだった。

眼下には平穏を取り戻した町並みがあった。

※ ※ ※

民衆は、退避命令が解除され、三々五々、臨時の避難所から外に出て来た。

「アッ」

外に出て来た者は、次々に声を上げ、目を見張った。

彼らが目撃したのは、虹色の斑をした、五体の巨大ロボットの佇立する姿であった。

「...」

その光景に誰もが我を忘れて、見入っていた。我が家の事も忘れてしまっていた。

これこそ、勇姿というものであろう。○ル ラ兄弟勢揃いみたいに思った人もいたけど...

「市民の皆さん」

ロボットから声が聞こえてきた。声からすると女の子。

「勝ち鬨をするので、ご一緒をお願いします」

民衆はキョトンとなったが、発言は終わらなかった。

「せえーのおー！！」

そして、五人が一斉に

「ぶううあああとるうああああす、ふうわあああああいぶううううううう！！！！」

と叫んだ。

同時に、

右腕をジャキーン！！と天へ突き上げた。それから、二本の指を突き立て、Vサインを掲げた。

「うおおおおおー」

民衆はどよめいた。そして、

「バトラスファイブ」と叫んだ。

「バトラスファイブ！バトラスファイブ！バトラスファイブ！」

叫び続けた。

バトラスV。伝説のエイセス部隊の誕生の瞬間であった。そして、村越遥、彼女の名前は命名者として永く記憶されることになるのだった。

民衆は歓喜していた。

※ ※ ※

「ニヤハハハ」

猛達もスクリーンに捉えたたくさんの笑顔に笑みをこぼしていた。バトラスのパイロットになって良かったと思えた。

「イエ～イイイイ」

舞や一矢も浮かれていた。皆、いい気になってはしゃいだ。

だが、彼らは知らなかったのだ。五人揃って、こんなことが出来る機会はそれほど多くはないのだ、ということ...

第3章

第3章 散華

その夜、

“ぶわああああとるうううあああす、ふうわあああああああいぶ！”

テレビのスピーカーから大音量で絶叫が轟いた。画面いっぱいにはバトラスが映っていた。昼間の戦闘場面だった。

この日の騒ぎは全地球的に”ぱんでみっく”した。

なにしろ、巨大ロボットが五体も現れ、意味不明のパフォーマンスまでしでかしたのだ。これには同日、午前横須賀港付近の空に描かれた、バイオンマとの関連も疑われた。

多くの画像やコメントがWEBに乱舞した。地球の裏でもフィーバーした。あのパフォーマンスには、サンバのスピリッツに通じるものがあると、書き込んだブラジル人がいたりもした。

マスコミは首都圏での防空戦に関する報道で終始した。誰もが、その報道に釘付けになった。特に視聴者の眼を惹いたものは、突如、姿を現した虹色をした五体の巨大ロボットの映像であった。

民間TV局、スカイコンプリーテレビが、偶然にもバトラスの最初の戦闘の様子を至近で撮影する事に成功していた。（一矢は、あの時、戦闘空域真っ只中をオートジャイロが一機、飛んでいたことを指摘している）

赤いミストの中で、爆発音が轟き、そこ、ここで火花が飛び散る。そして虚空から半壊したタルサリスが出現し、炎上しながら墜落していく。その光景に人々は息を飲んだ！なおいっそう、その映像を食い入るように見詰めていた。単なる好奇心からではなかった、関東の空を守った英雄として、である。だから、そのパイロットたちは“ヒーロー”であった。

皆、熱狂した。

誰もが、その正体を憶測し、政府に対しマスコミが押し寄せた。だが、これに対する行政側の措置は、素っ気ないものであった。国防庁からは、特殊作戦部隊所属の新兵器とのみ公表され、詳細は機密とされた。

だが、そんな事を台無しにする所業をしでかした者がいた。

※ ※ ※

「オイっ、これ見てよ」

一矢が皆を呼んだ。いつも冷静な彼らしくない、慌てた声だった。

戦闘当日の夜。五人は各々、くつろいでいた。一矢はタブレットで暇つぶし（本人曰く、リフレッシュ）にインターネットをサーフィンしていた。そこで、ポーカーフェイスブックが、凄い噂で赤熱化していたのを発見したのだった。

そうして、彼はあるサイトにアクセスした。

それはウェブリークスだった。朝氏と名乗るハッカーが、不正に取得した情報を掲載している海賊サイトだ。

朝氏はこれまでも、重大な政治スキャンダルをばら蒔き、政治を混乱、停滞させていた。それ故に、彼をテロリスト呼ばわりする者もいた。

そこには、こうあった。

バトラスVパイロットは全部で五人。

吉原猛

吉原一矢

片貝舞

村越遥

一条将

...である。彼らは、全員未成年であり、正規の防衛隊員ではない。特に、この五人の中には、十二歳の児童が二人含まれている。

彼らの顔写真までもが掲載されていた。

この記述に対して、既にネットでは書き込みが溢れんばかりの有様。

怖くて、クリック出来なかった

※ ※ ※

配信されているニュース番組では、どこも、五人の事を取り上げていた。五人を写真付きで紹介していた。

自分の顔がテレビに映るといのは、奇妙な感じで落ち着かなかった。

“子供じゃないですか”

特に遥と将が紹介されると、番組司会者やコメンテーターは一様に驚きの声をあげた。どの配信もこんな調子だった。

「悪かったな」

余計なお世話というものだ。画面に向かって抗議すると猛は、一矢にサイトを切り替えさせた。

公共放送局のサイトになった。

ちょうど、官房長官の記者会見を放映していた。

「小学生もいますが、この二人も戦闘に出るんですか」

記者から質問が出た。

「昨日の戦闘には出撃しました。既に、実戦を経験しています。これは事実ですから認めるしかないのかな、と考えるのでございます」

「今後はどうなるんですか？」

「なんといっても、まだ法的には児童、生徒であるわけですから、彼らには保護される権利があるのかな、と考えるのでございます。決して彼らが戦う事が、いかにも正常な状態とは考えてはございません」

「戦いには出さないという事ですか？」

「しかしながら、彼らが、我が自衛隊の最新鋭機を使いこなし、多大なる戦果をあげた事、これもまた事実かな、と思うのであります。児童であってもこの様な潜在的能力を秘めている事を、

無視するのは如何なものか、と考えるのでございます」

この答えにどよめきが起こった。

「では、このまま任務につかせるのですか？」

「先ほど申し上げたとうり、この子たちが戦うことは正常な状態ではなく、遺憾な事柄であると考えおります」

「でも、将来は、やはりパイロットとなり、その為の訓練を今から受けている事にかわりはありませんよね？」

「児童でも、このような可能性を秘めており、我々、凡俗の大人より有能かもしれないとう事は無視できないのかな、とも考えるのでございます」

「私が聞きたいのは、この子たちの人権はどのように尊重されるのかという事なんですが」

「まことに遺憾ながら、戦局は予断を許さず、やはり、ここは小国民の皆さんであっても、頑張ってもらうしかないのかな、と結論付けるのであります...」

「しかし、仮にこの十二歳の二人が戦闘行為に参加していたことが事実なら、十七歳未満の人間の軍事行動参加を禁止した、ジュネーブ条約に違反することになりますよね？」

インタビュアーは詰め寄った。

だが、官房長官は平然としていた。

「御存知の通り、ジュネーブ条約は、紛争時に於いて人権保護のために締結された条約であります。これにつきましては、内閣法制局で慎重、かつ細心に検討した結果、異星人との戦闘に本条約は適用されない、との解釈に達したのであります。ジュネーブ条約は、加盟国間同士で果たさなければならない義務であります。ですから、非加盟との武力衝突に際しては適用外となります。まして、異星人との諍いとなれば、もはや、あらゆる義務は存在しないと考えて当然と言えるのであります。また、そもそも異星人との現在の衝突は武力行使とみなせるのか？ 異星人の生態によっては、紛争とは呼べないものになるであろう可能性も考慮されるべきである、と考えるのであります」

※ ※ ※

「将と遥の事はやっぱり、突っ込まれたね」

「冗談抜きで、異星人相手の戦争なのでジュネーブ条約は適用されません、ですって」

「フン！ 胸糞わりィ」

「けど、やっぱり問題だよ、二人のことは」

「まあな」

「あっ、ちょっと、ヤダァ、なによ、これエ」

画面を切り替えた舞が、悲鳴に近い声をあげた。

そこには、片貝博士が映っていた。

「あのロボットを彼らが操縦しているんですか。本当に彼らがパイロットなんですか」

アナウンサーが博士に質問した。

「そうです。...バトラスの操縦は複雑で前例の無い方式となっています。従来のいかなる乗り物の操縦技術も応用できません。私は専門の訓練を、まだ何の技能を持たない人間に、受けさせる

べきであると考えました。すなわち精神的には未熟でも、なんの先入観も固定観念も持たない人間ですな。それ故、まだ未成年の彼らを抜擢したのです。彼ら五人は、幼少の頃より訓練に励み、今日に至ったのであります。彼らがバトラスを自在に操れるのは、実に幼き日からの訓練の賜物なのです」

更に話題がバトラスの構造的な事に及ぶと片貝博士の独断場となった。番組は、博士の“まっとうさいえんちすと”ぶりとあいまって、明るく白けたものになった。博士は滔々と喋りまくったが、その内容を理解出来た者は少なかったであろう。にも関わらず、博士の弁はますます盛り上がり収まる様子が無かった。

「...ま〜、そんなわけで、地球の平和はこの、アースブロッカーズ・バトラスVが命を賭けて守り抜きますので、ご安心のほどを」

片貝博士が勇ましい声で宣言した。

「あーすぶろっかーず・ばとらすふあいぶう？」

五人は目を引ん剥いて、啞然となった。バトラスVという呼び方は、ひとり歩きをしていた。

「なんだ、こりゃ〜！ あのジジイ、勝手なこと言いやがって」

「遥、アンタが適当なこと言うからよ」

「お姉ちゃんだって、イエ〜イとか言ってたじゃない」

「よく考えたら、安易なネーミングだね」

最後の将の声は冷たかった。しかし、博士の猛弁はまだ続いた。

「パイロットの五名は不惜身命、命を捨てて地球を守る覚悟で日々、研鑽に励んでおります」

...五人はずっこけた。

※ ※ ※

しかし、すぐに起き上がらねばならなかった。敵襲は続き、戦わねばならなかった。

スコアは伸びた。

※ ※ ※

三月某日。この日も房総沿岸で迎撃任務を完了していた。もちろん、撃墜スコアは、戦う度に大更新。

「それでは皆さん、ご一緒に〜 せえーのおー！！」

「ぶううあああとるうあああす、ふうわあああああいぶううううううう！！！！」

バトラスVを取り巻く民衆は、一斉に叫んだ。九十九里浜の青空に、猛達と東金市民の声が響き渡る。

そして、民衆もバトラスも右腕をジャキーン！！と天へ突き上げ、Vサインを掲げたのだった。

最早、三回目の勝ち鬨であった。この勝ち鬨は、敵撃退後の恒例の行事となっていた。

民衆にとっては、日本の空は守られている、という象徴となっていた。

「イエ〜イ」

皆、浮かれていた。

「いや〜、気分良いね」

コクピットの中で、猛は上機嫌だった。

「ホント、ホント」

冷静な一矢も実に楽しそうだった。

バトラスVは意気揚々と帰還した。

赤いミストが晴れると、日差しは柔らかかった。

3月...ではなく、4月になっていた。

* * *

「ねエ、この服、ブカブカだよ。袖なんて指しか出ないよ。足もダボダボ」

「私もオ、ちょっと大きすぎるウ」

「いいんだよ、すぐに、きつくなってくるから」

「僕達のお古にしては上出来だよ。良く似合ってるよ」

「悪いところは無さそうね。ごめんね、物資不足で新品が手に入らなくて」

新聞、ニュースの騒ぎをよそに、遥と将が中学校の制服の試着をしていた。とは言っても舞の言葉の通り、戦争による物資の不足で、二人の制服は、猛達が学生時代に使用していた物であった。でも、古着とは言え丁寧にクリーニングされ、皺も無く糊がきき、新品同様に見えた。また、ブカブカなところが、いかにも新中学生といった感じだった。

「もう一週間で入学式かア」

「思い出すよな、俺達の頃」

「たしかに、あの頃の私達にそっくりね」

制服姿の遥と将に三人は感慨深げだった。

「ねエ、中学生になったら、新しいケータイ買ってよ」

将が言った。

「ウン、私も欲しい。だいたい、クアッドコア（この時代では、チョー古いか？）のケータイ使ってたのって、私達だけジャン。笑い者だったわ。後、腕時計も」

遥も同調した。

「僕、モーフがいいなア」

「毛布？」

「MORPHだよ。知らないの？ 最新式だよ」

「そんなの、あなた達には早過ぎます。それに戦争からこっち、電波妨害がひどくて電話なんてつながらないでしょう」

舞がたしなめた。

「校舎の中なら使えるよう」

「そんな近くにいるんなら、直に話しなさい」

遥は、なおも食い下がりさり

「だってエ、みんな持っててさア、メールとかやってんだよ」

とか、言った。

「電話なら、お前らだって、もっと良い物持ってるジャン」

猛が言った。

「やだよお、あんな防衛隊の無線なんて。煉瓦みたいにデッカくて。これ、スクランブルの呼び出し用じゃん。だいたい、これは使えるのに、なんで電話は通じないの？」

「防衛隊は通信にニュートリノを使ってるんだよ。これなら、地球の裏とも簡単に通信出来る」

「そんなこと、どーでもいいの！」

遥が大きな声で言った。

「とにかく、時計も携帯電話も、まだ早過ぎます！」

舞も大きな声を出した。彼女は頑として受け付けなかった。彼女は羨けには、妙に厳しいところがあった。

「じゃ、いいよ。ところで、今日はこれから出掛けるからね。二人で中学校を見に行きたいの。バスの時間に間に合わないよ」

「チャンと外出許可ももらってあるんだからね」

「フ〜ン、下見か。いいぜ、行ってきな」

「お昼までには帰るのよ、写真撮るから」

「なんの写真？」

「防衛隊の隊員募集のポスターですって。早速、広報からお呼びがきたわ」

「ウワアア、すごおおい アイドルみたい」

「じゃ、行ってくるよ」

遥と将はそそくさと部屋を出て行き、後には三人が残された。

「いよいよ入学か」

一矢の声はどことなく虚ろだった。

「まともに通えるのかな。上の連中どうする気だ」

「ま、私達の時みたいになるんじゃない。昼は学校、終われば基地に直行」

舞が言った。当時はそうだったのだ。博士の言葉は嘘ではないのだ。

「部活は帰宅部か」

猛の口調はどこか投げやりの感があった。

「違う、違う、巨大ロボット操縦部、もしくは地球防衛部ってところね」

「救われねエ話だな」

「そんなに悩まなくても大丈夫だと思うよ。だいたい、バトラスといっても五機だけの、しかも試験部隊だよ。本気で主力にはなんないさ」

「一矢の言うことが一番、理屈に合ってるんだけど。なーんか不安ね」

舞はそう言うと、何気なく窓の外に目をやった。

※ ※ ※

窓外の風景が基地の周りの港湾施設のそれから、次第に家々の立ち並ぶ郊外のそれへと変わってゆく。

一条将は、サボる口実が出来た事で、内心、ニマニマしていた。遊び大好きっ子で、それ以外の事柄に時間を取られる事は、大嫌い、であった。

二人はバスの座席に並んで座っていた。将はブルゾンにGパン。遥はスカートを身に付けて

いる。どこから見ても普通の小学生に見えた。（もちろん、バイザーは必須アイテムだ）

寒さが緩んで気持ちいい。

もうすぐ春なんだ、バス（おそらく無人運転）の座席に揺られながら、将はそう思った。

将にとって、いろんな意味で、季節の変わり目だ。進学する事。友達と離れ離れになる事。そして、バトラスに乗って現実に戦った事。

隣の遙を見ると、なにやら音楽を聴いていた。

「ねえ、遙？」

将が声をかけると、遙はすぐにこっちを向いた。

「この前の出撃の事だけど...」

「？」

「遙は、怖くないの？」

「エッ？」

将の質問に不機嫌そうな顔をなつた。イヤフォーンを外す。

「平気なの？」

「アンタ、何言ってるの！」

明らかに起こらせてしまったようだった。

「だ、だってサア...」

将は、彼女の反応を予想していた。まさに、思った通りの反応だった。

彼女は自信タツプリなのだと、改めて思った。もし自分が、出撃の時にけっこう緊張して、心臓をバクバクさせていると知ったら、どうなるだろう？

だって、そうなのだ。隠しているが実は、そうなのだ。遙が強気な発言をするから調子を合わせていた。言い出せないでいた。むしろ、余裕ぶって見せていた。大口をたたいていた。だが、本当は、とても怖いと思っていたのだ。ゴロニャ〜ンなんて、良くやったものだ。

もし、将がもう少し幼ければ、素直に泣き出していただろう。たとえ、遙に嘲笑されても。でも、今の彼は未熟ながらも、分別というものを持ち合わせていた（それは遙も同様だったのだが...）

「あんなの、シミュレーターで同じで、チョロかったじゃない。大した事無いわ」将を睨んでそう言った。それから「そうよ、大した事無いわ...」と付け加えた。将から視線を逸らして... 将はその事の意味に気づかない...

彼女はシミュレーターをやって、チョロいと考えているようだが、あくまでも、シミュレーションだ。現実の戦いは、当たれば、本当にバトラスが壊れるのだ。そして、そこに乗っている自分は死ぬのだ。

「ごめんよ、変な事言って。気にしないで」

そう言って、話を切り上げた。意味の無い質問だったと思った。

だが、もし将が、もう少しだけ注意深かったら、遙の怒気は、動揺を隠そうとしたものだったと気付けたかもしれない。いきなり凶星を衝く質問にうろたえていたのだと分かったかもしれない。実は、あの時、将がゴロニャ〜ンに調子を合わせてくるので、ノリが良いので、後に引け

なくなったのだ。将は動揺していない、そう思うと、ムキにならざるを得なかったのだ。

だが、この時の将は、遥の怒りを静める事しか考えられなかった。

二人は、別々の窓から外に目を向けた。

バスが止まった。

「着いたわ」

いつの間にか目的のバス停に着いていたのだ。

足早の彼女を追いかける様にして、降車した。

リニアモノレールに乗り換え、数分で横須賀郊外の第7副都心に到着した。ちなみに、将と遥には分かりきった事なのだが、リニアは直接、副都心の内部に乗り入れている。だから、駅のエリアを出ると、すぐにショッピングモールが展開していた。

平日だが、正午も間近なこの時間、雑踏が流れていた。人がウジャウジャしている。

(この中を突っ切るのは嫌だなァ...)

などと将が考えていたら、

「なんか、殺風景」

遥が独り言っぽく呟いたのが聞こえた。

「エッ、どうしたの？」

彼女はバイザーを上げ、横顔をみせたままで、

「アノテーションが無いと、殺風景に見えるの」

と素っ気なく言った。

「ヘッ」

将はキョトンとしつつも、バイザー（無色透明だよ）を下げてみた。

彼女の言った意味が分かった。

行き交う人々の頭上や肩に、個々人の情報を、本人の任意の枠内で開示したアノテーションを表示しているバルーンが、なかった。バルーンは将に限らず、この時代を生きる人々には、当たり前過ぎるものだった。

だが、今回の異星人の襲来により、サイバースペースもその攻撃を受け、現在、民間でのインターネットの使用は、とても大きく制限（要するに作者の都合で使えたり、使えなかったりするという事だ）されてしまっていた。

今、二人が見つめている雑踏は、二〇世紀末に生きている人間なら、普通に混雑している光景なのだが、この時代の人間（今から五〇年後の人類が、インターネットから切り離されたらどうなるの？ やっぱり発狂する人もいるのか？）には、この人の群れにアノテーションが伴って、はじめて雑踏と認識出来るものだった。

よくよく考えると、初めての場所を訪ねるというシチュエーションの時に必ず登場する、ARコンシェルジュも、今は休業中だった。

※ ※ ※

そんな感慨を心に残しつつ、二人はシャトルエレベーターの乗り場に向かった。

シャトルエレベーターは一〇階毎に停止する高速のエレベーターで、分刻みの運行スケジュール

ルで運営されていた。別名、垂直路線バス（座席もあるのだ）と呼ばれていた。地上二四〇階、地下五〇階の巨大な構造物の内部では、欠かせないシステムである。

空気に鼓膜をパンチされながらも、あっさりとした階層に着いた。この階で普通のエレベーターに乗り換える。

そして目当ての中学校がある階にたどり着いた。

※ ※ ※

この建物内のある学校は、どれも同じだが、5層をブチ抜いた造りになっていた。

南面が全てガラス張り。そのガラスを通して、日光が差し込んでいる。眩しかった。暖かいというより、熱を感じた。

校庭は外周を木々で囲まれており、そこに運動（部活らしい）している生徒達が見えた。青いジャージを着用している。走っていた。ただ、走っているだけだった。制服姿の人影も見えた。そして、なにやら話し込んでいる。表情は見えないけど、多分、笑っていると思った。

「ウワァ...良いなァ」

遥が、感嘆の息をついた。

遥には、それらの、どれも、これもが眩しい... グラウンドの土の色までが眩しいのだった。実は憧れていた景色なのだ。

そして、そんな光景や、遥の表情を、将はキョトンと見ているだけだった。

「オーイ」

「あっ」

それは小学校での同級生だった。晃、良太、直子だ。

「何してんだよ、将」

野球帽をかぶった男の子が言った。

「中学校、見に来たんだ」

「ねえ、テレビ、見たわよ。スゴイねエ」

一緒にいた女の子が言った。

こうして、五人はひとしきり話しこんでいた。

「また、一緒だな」

晃は将と遥が、自分と同じ学校に進学すると聞いて喜んでくれた。

「俺は、隣のブロックの学校だ。でも、草野とかと、一緒だ」

良太が言った。

この後、彼らはコンビニで駄菓子を買って食ってから別れた。

※ ※ ※

リニアモノレールに乗り、副都心を離れた。

将が後ろを見やると、自分達が今まで、その内部を動き回っていたモノの姿が見えてきた。

だが、その全貌、リニアが少し遠ざからなくては、望見出来ない。

ピラミッドも、一〇万トンタンカーも及ばない、大パノラマだった。

それは全高一〇〇〇メートル、幅一五〇〇メートルの巨大な建物がそびえる光景だった。そ

して、この巨大な建造物、一棟に一〇万人以上の人間が生活しているのだ。

通称、メガコンドミニウム。この巨大な建造物こそが、副都心の中核、副都心そのものであった。将達が住んでいるのは、横浜に続く、神奈川第二のメガコンドミニウムである。

そのメガコンドミニウムが、今は薄い桃色に染まっている。この建物の壁面には、カメレオンモードが施されているので、色を随意に変更出来て、冬は暖色系の色に染まるのである。

南面は四〇度ほど傾斜して、ほぼ全面に、透明セラミックスが施されている。居住性は良かった。

それにしても、どのようなコンセプトに基づいて、このような巨大な物が築かれたのかは不明である。インターネットの発展により浸透したユビキタス志向に対する反発であるとか、人口減少に対応するために、人を一箇所に集め、少ない資源を有効に使おうとしたからだと言われている。

ただ、一つ分かっている事は、この巨大構造物が、驚くほどの技術革新のおかげで、驚くほど低コストで造ることが出来たという事だけである。

そして、いつ見ても、たとえ深夜であっても、嵐の直中であっても、壮大なパノラマを見せてくれた。

「楽しみだね」

振り向くと、遙がニマニマしていた。遙は本当に嬉しいのだと将は思った。

こうして、将と遙の外出は終わった。これが二人でいく最後の外出になるとは将には知る由もなかった。この時の遙の笑顔は将にとって終生、忘れられないものとなった。

※ ※ ※

北米大陸失陥以後、日本列島は空襲に晒されるようになっていた。日本について、敵の攻撃目標としての優先度が上昇したようであった。計画と訓練のみで終始していた部隊展開と市民の避難計画が、現実にして日常的なものになるようとしていた。また、日本への攻撃は空襲のみならず海外からの船舶輸送の遮断、封鎖にも及んでいた。開戦後、北米大陸の失陥と同時に混乱をきたしていた国内経済は、市民の軍需生産のみならず、日常生活の面でも逼迫しつつあった。

東南アジアからの南西ルートと、豪州からの北東ルートの二本が現在、日本への資源供給の為のシーレーンであった。

このルートを守るため今日も海上護衛戦が展開されている。

「スクランブルだ。CMDゾンデが敵編隊を発見した。近くに味方輸送機の編隊が飛行中とのことだ。出撃して輸送機をエスコートする」

神宮寺の指令に五人は頷いた。

バトラス隊も護衛任務に投入されていた。たった今、待機中だったところに、発進命令が出た。

数分後、五機のバトラスが緊急展開をし、大空を飛翔していた。目的空域はマーカス島南西である。

伊豆半島沖を南下していたバトラスVは輸送機からの通信を受けた。

「こちらディンゴ1、応答願います。ウフフ、パイロットが女だったなんて思ってなかったでし

よう」

そんな事は無かった。モニターに映った顔は、よく知る女性の顔であった。

「あつ！ 小早川少尉♥」

あの初空襲の夜以来、ず〜っと捜していた女性が、ここにいるではないか！

「あら、バトラスのお兄さん。急な任務でごめんなさい。敵のハンターキラ一部隊に捉まっちゃって」

彼女の方は、猛の気持ちも知らずに飄々としていた。

小早川の隣席に座しているコパイの女性士官が顔をのぞかせた。彼女も美人だ。

「もしかして、あなた達が巷で噂のバトラスVなの」

「はい、そうです。僕達がバトラスVです」

ちなみに、この行儀正しい猛のしゃべり方に、一矢や舞は失笑していた。

「ヘエ、感激だわ。最新鋭戦闘機隊に助けてもらえるなんて」

「あ、あの、少尉。今までどちらに...」

「ところで、そちらの状況を教えてください」

猛が、喋ろうとしたが、一矢が、いち早く、失笑から抜け出して割り込んだ。

「管制センターの指示でコースを変更したわ。現在、敵に対し回避運動を実行中。すぐ、追いつかれるわね。あなた達との合流が間に合うか、微妙なところね」

「了解です。こちらは最大速度で飛行してます。とにかく、合流ポイントを目指します」

「了解。バトラスV。上手くいったら、一杯おごらせてもらうわ。あつ、未成年だっけ、ゴメンね。通信以上」

「本隊トでいんご1ノ合流推定時間、五三〇秒。でいんご1ト敵ノ接触推定時間、五三〇秒」

人工知能君が報告する。

「えっ、際どい。どちらが速いか、神のみぞ知るって感じね。それにしても太平洋は敵の庭先って感じね。侵入され放題だわ」

舞が言った。

「そんな心配は偉い人たちにしてもらえ。俺たちは目の前の敵を倒す事が全てだ」

「あら、カッコイイ。今日は真面目ジャン。ディンゴ1のパイロットが女の人だからかしら」

「バカ、いいかげんにしろ。実戦中なんだぜ。な、一矢」

「フフ... まあね」

猛から話を振られた一矢はおかしそうに答えた。

「何だよ、お前まで」

「頑張ってる、良いところ見せようねッ、お兄ちゃん」

「小早川少尉は美人だもんね」

遥と将が通信に割りこんできた。

「お前らなァ...はしゃいでないで、さっさとカメレオンモードをオンにしろ」

口ではボヤきつつも、猛は皆が意外と落ち着き、緊張してはいないことを知り安堵していた。

彼らの足下では海面がのたうっていた。それは、平静と変わらない様に見えた。

※ ※ ※

「粒子フィルターニ感知アリ。敵味方識別反応有リ。でいんご1ト確認... あら一むめっせーじ。れんじ8ニける帯域ヲ確認。識別信号反応ナシ」

向こうのほうが早い。マズい状況だ。

「ディンゴ1よりバトラスVへ、聞こえますか」

「こちらバトラス。そちらの機影を捉えた。うっとうしいオマケもな」

「急いで。敵機は一二機でV字形編隊を組んで接近中」

「そのまま全速でコースを維持して下さい」

猛はディンゴ1に応答する。次に一矢に連絡をした。

「このままじゃ、ディンゴ1が敵の破壊力線の射程内に入っちゃう。この距離じゃ撃墜は出来ないが、敵の注意をそらす。俺とお前で威嚇射撃だ。ひづる、将、遥、お前達はディンゴ1との合流を急げ」

「了解」

四人がそろって返信する。

「いくぞ、一矢」

グレート・バトラスとキング・バトラスは大きく機体をひるがえし他の三機と分離した。そのまま横へ展開する。射角を取るのだ。

猛は粒子フィルターを前半球に集中させ、最高感度にした。敵編隊の画像が不鮮明ながら確認できた。敵だ！

「熱弾反応」

人工知能君がアラームを訴えた。

数本の光条がグレートの機体をかすめるようにして、飛び去る。タルサリス独特の武装、破壊力線だ。

猛は慌てて、レティクルを合わせると両腕の超電磁レーザーを発射した。敵は複雑な軌跡を描いて回避する。猛は目まぐるしく照準を修正し、立て続けにトリガーを引いて乱射した。一方、画面傍らから敵へと向けて光の矢が走り抜けた。キング・バトラスの砲火だ。

「猛、ディンゴ1が煙を出してるわ」

舞の悲鳴に似た声がスピーカーから飛び出してくる。

「チッ」

「こちらディンゴ1、旋回します。その隙を突いて」

その声を聞きながら猛はディンゴ1と自分、敵の相互の位置を確認した。ディンゴ1は彼の正面の位置から大きく旋回していた。敵がさらに小さい半径で旋回すると、ディンゴ1は敵にふところに入りこまれる。しかし、その刹那、敵は猛たちに側面を曝すことになる。

(なるほど)

危険が迫る中、冷静にうつべき方策を考えつくのだから、たいしたものだ。

(後はオレと一矢が先に敵を片付けられるかどうかだ)

猛は口の中で、そう嘯くと超電磁スラスタを過負荷にまで加速した。

「FREETA—DOOOOOP!!!」

人工知能君が、悲鳴をあげたが、無視した。横目でスクリーンを見やるとキング・バトラスが併行して飛行している。一矢も言わずもがなで同様の判断と行動をしていた。

「さすが」

猛はニッと笑ってそう思った。

この間、敵も手をこまねてはいなかった。一二機編隊が分離し、半分の六機が転進して彼らに迫ろうとしていた。両者は真正面から極超音速の相対速度で接近をした。目視確認をするや否や、双方は互いの射程距離内に侵入していた。猛は必死に照準を合わせ、幾度も引き金を引いた。幾筋もの光条が走る。しかし、正面から相対する射撃位置では、意外とヒットは容易ではない。もっとも敵もそれは同様だった。互いに命中弾のないまま、互いの距離はせまり、一瞬の轟音とともにすれ違った。ほとんど反射的に猛は機体を反転ロールさせた。gで体が締めつけられるが、気にしてはいられない。絶好の射撃位置が得られるのは、すれ違った直後、反転した刹那である。一連の動作を猛と一矢は訓練で叩きこまれていた。機体をロールターンさせ直後に照準に入る。だが、敵も反転を終了し六機の禍禍しい機影がこちらを向いていた。

「なむさん」

猛は二本のジョイスティックの先端の十字キーを小刻みに動かした。左右同時にやった。一度に二機に照準をあわせたのだ。そしてトリガーを引いた。二本の光の矢は空を走り、今度は命中した。敵は微塵に破碎され爆光がきらめく。

しかし、やったと思った瞬間だった。衝撃に見舞われた。相手とて黙って標的になっていたわけではない。敵の放った一弾がバトラスの右腕を直撃していた。グレート・バトラスは右腕の肘から先を打ち砕かれていた。

「ヒットポイント、一二〇〇点、喪失」

「チッ」

猛は舌打ちした。損傷を確認しているひまは無かった。左腕の超電磁メーザーの照準を敵に合わせる。スクリーンには、敵機を示す揺らめきが三つ映っていた。一矢が一機、撃墜したらしい。だが、残る三機は全機がグレート・バトラスに突っ込んできた。その攻撃は全てがグレートめがけて放たれるだろう。これではディンゴ1の援護どころではない。

「クッ」

猛はコンボを叩き込んで、バトラスを落下させるような勢いで降下させ、回避行動をとりつつ、敵の一機に照準をつけた。即座に引き金を引く。撃破した。しかし、そのスキに残る二機が猛の真正面に迫っていた。この時、スクリーンでは、敵機を示す臆気な揺らめきが、自分に銃口を向けている様が見えたように思えた。脳裏では、その様な光景が、まざまざと思い浮かんでいた。

「FRA—DWEEEEEEET」

(やられる！)

猛は観念した。敵がもう照準をこちらに合わせ終えていることが直感で分かった。

その時だった。残る敵が立て続きに爆発、四散していた。

キング・バトラスの攻撃だった。

「大丈夫？ 兄さん」

キング・バトラスが接近してきた。彼の機体は右肩に被弾の跡があった。

「助かったよ、一矢。でも、寿命が縮むってのはこの事だな」

猛はさすがに気が抜けたようになっていた。

「兄さん、まだ敵は残ってるよ。急ごう」

「そうだった」

一矢の言葉に猛は気を取りなおし僚機と残る敵機を探した。

黒煙を吐きながらのたうちまわる輸送機と、それに群がる敵を発見するのに、手間はかからなかった。輸送機ディンゴ1は幸いな事に健在であった。さらに舞たち、三人が合流を果たし、敵を相手に奮戦していた。この時、確認された機影は二機であった。消えた四機のうち二機は遥の撃墜スコアであった。とはいえ、猛たちが合流するまで形勢は有利とは言えない状況であった。遥も将も、ディンゴ1の盾となりながら戦うので、自由にイメージーションを生かした飛行が出来なかったのだ。だから、バトラスも全機が被弾をし、何らかの損害を被っていた。味方機を護りながら迎撃することは難しかった、と言うか、初めてのシチュエーションだったのだ。

だが、猛、一矢がこれに合流しディンゴ1の直衛を引き受けたことで、ジャリン子達は行動の自由を得た。それから、残敵を殲滅するのに、ものの二分と要しなかった。遥と将が「ゴロニャ〜ン」と攻撃して、叩きのめしたのである。

「サンキュー、バトラスVの皆さん。おかげで命拾いしたニャ〜ン」

敵の全滅の確認後、ディンゴ1より感謝の通信がはいった。

「あ、また、お会いできて...」

また、猛の言葉に一矢が割り込んだ。

「でも、だいぶ、やられました。適切な救援をしたと言えませんよ」

「まさか、上出来よ。それにバトラスの性能をよく見せてもらえたわ」

「あ、あの、いいですか。でも凄いですね」

舞が通信に入ってきた。

「？」

猛も一矢も聞き返した。

「凄いのよオ。機体を蛇行させて自分の出してる煙を煙幕にしちゃったのよ。それで敵の索敵能力を攪乱しちゃったわけ。あの判断が無かったら私達だけじゃ防ぎきれなかったわ」

「へえー」

猛と一矢が感嘆の声をもらす。

「まァ、いいじゃない。窮すれば通ずよ」

小早川は少し照れている様に見えた。

「それでは、皆さん、例のヤツイきましょう」

この時、猛も他の誰も気付いてはいなかった、深海から緑色の視線が彼らに注がれていた事を

「あ～、あの有名な...私達もやるの？」

「ぜひお願いします」

「それでは、せーのお」

その瞬間だった...

遥の機体、プライム・バトラス二号機が轟音とともに爆発、四散していた。

誰もが呆然となり声も出なかった。黒煙を曳き、のたうちまわりながら落下する、もとはバトラスだった火の玉を見つめていた。

誰も、眼前の光景を心に受け入れることが出来なかった。

「イヤアアアアアッ！」

舞が錯乱してしまった。

「FREETA—DOOOOOP」

「FRA—DWEEEEEEET」

各バトラスの人工知能の兄弟君達も混乱した。

次に、突然、将が声をあげた。

「ねえ、これどうなってるのォ、バトラスが緑色に光ってるよォ！」

猛はその声到我にかえると、将の機体に目をやった。

将の機体は彼の言うとおりに緑色に光っていた。より詳しく観察すれば、下から緑色の、まっすぐ伸びたサーチライトの様な光に照らし出されていた。赤いミストの中なので、いっそう色が際立っていた。

そのライトの中央に将の機体があった。

猛はキッと目をむいて、そのライトを目でたどった。海面の一カ所だけ、色が周囲と異なっていた。青緑に輝いていた。まるで海面下より強烈な光源が照らし出している様だった。そこから、将めがけて緑の光線が伸びているのだ。

“ロックオンされている”

直感だ。

「こいつだ、こいつがやったんだ。離れろ、急げ！」

猛は血相を変えたような口調で叫んだ。その緑色の光は今や不気味さを帯びた不吉なものに感じられていた。

「将、急げ！」

猛がさらに急きたてた。

「う、うん」

心もとなさそうな返事をして将は機体を旋回させた。だが、緑の光はまといつく様に将の機体から離れない。

「FREETA—DOOOOOP」

「ついて来るよォ...」

将は狼狽した声を上げる。さらに機体を旋回させ加速するが、逃れる事は出来なかった。

「た、助けてェ！」

将は半狂乱になって悲鳴を上げていた。

「切り返せ！」

猛が叫ぶ。

「！」

その時、黒い影が一瞬、猛の視界をよぎった。何かが海面から飛び出して来た。それは黒い矢となって一瞬で急上昇した。その先には将のプライム・バトラスがあった。

「F R A - D W E E E E E E E T」

「ウワアアアアアアア！」

将の悲鳴がスピーカーから耳に突き刺さってきた。そして、黒い矢は轟音とともに炸裂し、将の機体、プライム・バトラス一号機は爆煙に包まれていた。

「将、将ッ」

舞が錯乱したような悲鳴を上げる。猛も一矢も、またも呆然となった。

しかし、である。黒い爆煙から銀色の大きな塊が飛び出して来た。それは被弾した将の機体であった。機体右半身が大きく損なわれていた。おそらく直撃ではなく、機体近傍で炸裂したのだろう。猛の切り返せという声が奏効したのだ。

「怖いヨォ〜」

将の情けない泣き声が聞こえた。だが、とにかく生きていた。

「全機、退避、急速退避」

ディンゴ1から通信が入る。

「クッソオオオオオオーッ」

猛がヒステリックな怒声をあげ、海面へ突っ込もうとする。

「やめなさい。吉原空曹長！ バトラスが水中で何が出来るの。それより、すぐこの場を離れるのよ。言うとおりにして」

「兄さん、危険だ。兄さん」

ディンゴ1に同調した一矢が呼びかける。だが猛の突進は止まらなかった。

「遥の仇！」

血走った猛の眼前を光条が横切った。グレート・バトラスにブレーキが掛かる。猛が射線の方を振り返る。そこにキング・バトラスが浮揚していた。威嚇射撃である。

「兄さん、撤退だ」

キング・バトラスのコクピットでは一矢が冷徹な声をふりしぼっていた。たった一言に消耗した。

彼らはディンゴ1を囲む様に編隊を組み撤退をした。

皆が呆然としていた。あまりに突然の出来事だった。

村越遥空士長、戦死。バトラスVにおける初めての犠牲者であった。

敵は、オレンジの髪を持つ、リーデと名乗る地球外生命体は、緑色光ライダー、すなわち緑色の波長の可視光を用いたレーザーレーダーと呼ばれる水中でも使用可能な探知機を実用化しているようであった。（こういうものを研究している人がいるらしい）さらに、水中発射可能な対空

魚雷をも実用化していることも確かな様であった。それも、発射直後には速力は音速をゆうに越え、海面を離脱する時には超音速となり空中の目標を捕捉撃滅する性能をもっているのだ。使用された武器は地球ではテスト段階の、超電磁キャビテーション魚雷と推測された。あるいは電磁誘導式機構を持つ“リニアガン”と通称される兵器である可能性も否定できなかった。

以上はディンゴ1機長、小早川少尉の報告書によるものであるが、そんな説明を受けても、バトラスVの面々には遠い事にしか感じられなかった。

第4章

第4章 国葬

遥の戦死の報はたちまち報道各局の知るところとなり、その夜も、TVの画面はバトラスに対する放送で埋め尽くされていた。

「マズイですなァ、総理。本当にマズイですぞ。国会では野党が、得たりとばかりに、騒ぎ立てるでしょうなァ」

幹事長が言った。老練なベテラン議員だった。

「戦時補正予算も組まなければならないというのに、まったく」

大蔵大臣が言った。どっしりした男である。

この夜、総理大臣官邸には内閣の主要な閣僚と政権与党の幹部が集合し、村越遥戦死の事後について相談していた。

「しかし、五人もいるのに、なんでよりもよって…」

「それを言っても、なんにもならんよ」

官房長官、防衛長官は黙しているままだ。

「野党も大事だが、問題なのはマスコミだ。異星人相手の戦争だというのに、客観的報道などとぼざいておる」

「マスコミといえば、なんでこの話しが、あっさりリークしてしまったんだ。まったく、どこもかしこも…」

「弱りましたなァ」

「まったくだ。困ったものだなァ…」

「ここは、私の引責辞任という事で… これで事態を収束させましょう」

防衛長官が気弱な声で言った。

「それでラチがあげば苦労はせんよ。野党もマスコミも、今やただのアジテーターと化しておる。戦時下だというのに、気がしれんな。ヤツら自身、落とし処なんぞ分からんで、騒いでおるのよ」

傭兵隊長と渾名される幹事長は言った。

「でも、他にどうしろと」

「やはり、腹をくくるべきかもしれんゾ」

「選挙に打って出ると？ 勝ち目なんかありますまいよ」

「ちがう、ちがう、選挙なんかではない」

その場の空気を二呼吸の間、沈黙が支配した。

「まさか、内閣総辞職を…」

一同はいろめきだった。

「やむを得んだろ。政権だけは手放すわけにはいかん」

そう言われると、誰も反論出来なかった。政権維持は至上命題である。

場の空気がそちらに流れかけた時だった。

「待って下さい。私に考えがあります」

そう切り出した人物がいた。通産大臣だった。この場にいる中で最年少であった。将来の総理と目されているニューリーダーだ。

一同は沈黙をもって、彼を促した。

「彼女の戦死を大々的に前面に押し出すのです。国葬を行い、戦局が急を告げている事を訴えるのです。我々は素人までも動員しなければならない、彼女はその魁であると。彼女を英雄に祭り上げてしまえば、誰も反論出来ないはずです」

「なるほど、この危機を逆用するわけか...」

一同は唸った。通産大臣は更に喋り続けた。

「とにかく、まず盛大な国葬です。これを全世界に配信するのです。いったん世間の同情を集めれば、後は我々の思うままです。国債の償還免除、増税にも反対する者はいないでしょう。徴兵、徴用も国民は受け入れざるを得ないはずです。そして一気に戒厳令施行法を国会に提案するのです」

「この機に乗じて独裁権を奪取するわけか」

幹事長も瞠目していた。

ここで、一同は座の中心にいる人物に視線を集中した。その男は皆が口論している時、一言も発せずずっと瞑目し続けていた。

彼が政権与党総裁にして、総理大臣であった。

ゆっくりと目を開いた。ドングリまなこであった。

彼は短く、一言だけ喋った

「そうせい」

衆議は決した。

※ ※ ※

理性がいくら訴えても感情がそれを拒否した。感情が理性を叩きのめしたかの様だった。

「守れなかった、遥を」

「どうして一緒に連れて行こうなんて考えちゃったんだ」

ようやく、事実を現実と認識した時から、猛や舞の胸を去来するのはこの思いばかりであった。

自分達に見せていた、彼女の元気なふるまいは虚勢だったのではないか、彼女は本当は戦闘を恐怖していたのではないか？ そんな事まで思ったりしていた。その遥をいともあっさりと失ってしまったのだ。

猛たちは悔恨の思いにとらわれたまま、仮祭壇の空っぽの棺の前で夜を過ごした。

遥は死後昇進し、少尉とされた。そして、彼女の葬儀は国葬とされた。PKOで死者がでた時も、こんな事はなかった。猛達の関与しない所で事態はどんどん動いていた。東京の帝国大ホールにて葬儀はとり行われる事になった。おそらく、盛大な葬儀だろう。だが、残された四人にはかえって、遥が遠くへ連れていかれた様に感じられた。

やがて、空はしらみ、夜は明けてきた。人が死のうとも、生きようとも自然の営みは滞ることは無い。

猛、一矢、舞の三人は防衛隊の礼服に身を包んだ。だが、三人ともそのまま虚ろに私室で窓外を眺めていた。

「あ、あの、そろそろ時間だよ」

学生服に身を固めた将がやってきて告げた。

将の声に彼らはゆっくりと立ちあがった。いつもの、きびきびとした躍動感や生気は感じられなかった。ただ歩を進め、送迎用のオートジャイロに乗り組んだ。

大ホールに到着し、オートジャイロから降り立った時、まず、彼らを出迎えたのはマスコミであった。しかし、ストロボの嵐も矢継ぎ早の質問も無視して猛達は葬場へと進んだ。

その行く手で四人を敬礼して待っている一団があった。その中央には礼服をきた若い女性士官がいる。ディンゴ1の機長、小早川少尉とその部下達であった。皆、端正な顔立ちをした美しい女性だった。

猛たちも敬礼をかえした。

「私達の為にこんなことになってしまって... どうか、気を落とさないでください。それと、私達にも村越空尉を送らせて下さい」

小早川は、階級でも年齢でも下になる彼らに対し、丁寧な言葉で話しかけた。

答えたのは舞だった。

「あの子の死をそんな風に、お思いにならないで下さい。あの子が死んだのは、出撃を許可した私たちのミスなんです」

そう答えると舞は唇をかみ締めて俯いた。そんな彼女の様子を小早川は見逃さなかった。

「自分を責めるのは良くないわ。それに村越少尉はあなた達に負けないほど立派に戦っていたわ」

「あ、有難うございます。あの子への何よりの手向けです」

それ以上、話す言葉も見つからず、彼らは儀場へと向かった。

葬儀場の祭壇に日章旗に包まれた棺が安置されていた。その背後に花に囲まれた遥の遺影が飾られていた。無論、遥の遺体は収容出来ていなかった。そこにあるのは空の棺であった。

葬儀には防衛隊上層部の面々や防衛長官、それに総理大臣をはじめとする内閣閣僚も参集していた。さらには政財界の要人に多くの国会議員有志たちがいた。このため、唯一の親族ともいえる舞や猛たちの席は、脇に追いやられていた。まだ若い彼らだが、この葬儀の意図する事を嫌でも気付かずにはいられなかった。今、ここにいる大人達にとって、今日の葬儀はかっこうの宣伝の場なのだ。ショーでしかないのだ。

“何故、子供を戦わせたのか？”という論調の報道は無かった。全てが尊い犠牲を無駄にするなど声高に主張していた。

それにしても、よく一晩でここまで設えられたと思えるほどの葬儀場であった。全てが昨夜のうちに決定され、準備された事なのだ。そして、その全てが報道関係者に公開されていた。そこかしこに、報道関係者らしき人影が動き回っているのが目に付いた。複数のカメラが彼らが席に

付くまでを、そして着席してからも、捉え続けていた。

やがて、礼服をまとった仕官が祭壇脇のマイクに歩み寄り、厳かに式の始まりを告げた。軍楽隊が葬送の曲を奏で始めた。

防衛長官らしき人物が弔辞を読み始めた。だが、それは弔いではなく演説であった。戦意高揚を謳った...

「...こうして村越少尉は若干、十二歳にして、祖国と全地球の防衛という崇高な任務に命を捧げたのであります。死をもいとわず果敢に戦い、その命を散らしたのであります。責任感ある者なら、誇り高い我が民族の自覚ある者なら、彼女の志、使命感を無には出来ないハズですッ！

我々は彼女の、この気高い志を引き継ぎ、無法で非道で残虐な異星人リーデを徹頭徹尾、断固として粉碎するまで戦う覚悟を新たにしなければならぬのであります」

こうして演説が最高潮に達しようとした時だった。

「やめて、やめて下さいッ！」

怒声とも悲鳴ともつかない叫び声が演説を中断させていた。衆目の目がその声の主に注がれた。演説当事者の不快げな視線も。

舞であった。彼女が目を泣きはらし、立ち尽くしていた。ざわめきが起こり、周囲の視線が集中しているが、彼女は意に介してはいなかった。

「やめて下さいッ。もうたくさんです。遥は、そんな立派な死に方したんじゃないじゃありません！ あんな、空っぽの棺を飾って、バカにしないで！ 遥は、あの子は地球を守る為に戦ったんじゃないじゃありませんッ」

ヒステリックになってさらに舞は言い放った。

「あの子は何も知らずにバトラスに乗せられていたんです。私達、大人がそうさせたんです。だから、あの子を殺したのは私なんです。私が出撃を許可しなければよかったんです。私が、私が...」

そこから先は、絶叫の様な嗚咽で声にならなかった。舞は床に座り込むと大声で泣き出していた。

猛と一矢には舞かける言葉がなかった。なにより、彼らの心は彼女と同じだったから。

儀場は静まり返ったが、大人たちは不快げな視線が舞に注がれていた。この光景が今、全国にTV中継されているのだ。

そんな泣きじゃくる舞は、ふと両肩に優しく振れるものを感じて顔をあげた。小早川だった。そっと近寄ってきていた。小早川が優しく舞の顔をのぞきこんでいた。静かな声で舞に語りかける。

「あなたの気持ちは皆に伝わったと思うわ。だからもう泣かないで。遥ちゃんも悲しむわ。それに、彼女の死を本当に悲しんでいる人もいるはずよ」

その時、舞の脳裡にバトラスの整備員や、管制オペレーターの女性士官といった横須賀基地の面々の姿が映った。皆、遥の死を悲しんでいるだろう。遥を可愛がってくれた人達だったから。

「あなた達が見送らなくて、誰が見送るの？ 力を落とさないで、彼女を送り出してあげまし

よう」

穏やかで柔らかい声だった。舞はうなずいて立ち上がったが涙が止まる事は無かった。

何事も無かったかのように式は再開した。

やがて、出棺となった。数名の儀仗兵姿の隊員が棺を担ぎ、厳粛な顔付きで歩を進める。その歩調は機械のように見事に一致していた。

舞も少しは落ち着きを取り戻したらしく、黙ってこの様子を見守っていた。或いは、空っぽの棺なんかに興味が無かっただけかもしれない。

この時、将が席を立った。紙袋を脇に抱えている。

「すみません、待って下さい」

将はそう言い残すと、棺を運ぶ一団のほうへ走り出していた。

「あ、あの、すみません」

将は棺を担いでいる儀仗兵姿の隊員の声かけた。出棺の歩が留まる。

「あ、あの、これをその棺に入れてもらえないでしょうか」

そう言うと将は紙袋の中から何かを取り出した。それは女子用の学生服一式だった。

「遥はもうすぐ、僕と一緒に中学に行くはずだったんです。でも、一度、試しに着ただけで死んじゃったんです」

儀仗兵たちは一瞬、目を見合わせた。

「や、やっぱり、無理でしょうか」

将が不安そうに言った。

一拍の間をおいて相手は答えた。

「大丈夫ですよ」

そういうと彼らは棺を一旦、地面に下ろした。そして、棺を包む旗をほどき始めた。これは実のところ、この儀仗兵たちの独断であった。だが、先刻の舞の叫びを聞き、彼らは心情的に近いものがあったのだ。制服を納め彼らはたちまち、棺を旗で包みなおし復元した。

「あ、有難うございます」

礼を述べ敬礼する将に見送られ、再び彼らは棺を運び始めた。誰からともなく拍手が起こり、やがてその波は全体に広がった。びっくりした将は、舞や猛が微かに笑顔を浮かべて自分をみている事に気づき安堵した。

あらためて運び出される棺を見ながら将は思った。遥は中学校に一度も通うこと無く逝ってしまったのだと。以前、一度だけ制服に袖をとおした時の遥の姿を思い出して、初めて将は目が熱くなるのを感じた。もう会えないのだ。話も出来ないのだ。ようやく、本当に遥が死んでしまったのだと分かった気がした。無性に泣きたかった。いや、もう泣いていた。涙が止まらなかった...

※ ※ ※

時の流れも、止まっただけではなかった、敵にも味方にも。

葬儀が終わり基地に帰還したかと思うと、いきなり警戒警報が流れスクランブル命令が出された。

さて、出撃の事である。

「敵戦闘機の一群が関東エリアに侵入しつつあります。バトラスVは緊急発進し、相模湾上空で防衛線を形成するよとの命令です。すでにラフライダー隊は先行して進出しています」

パイロット待機室に発令所のオペレーターから指令が皆に伝えられた。

「指令へ伝えてくれ。一条空士長の事だけど、待機させておくって」

猛がオペレーターへ言った。

「そんなァ」

将が声をあげた。

「それが当然だろ。連れて行くわけにはいかないな」

一矢がきっぱりと言うと、舞も首肯した。

「待ってよ！」

大声を上げて将は割って入った。

「僕も出動させてよ。待ってるなんてやだよ。プライム・バトラスだって、整備班の人たちが徹夜で修理してくれて、飛べる様になってるんだ」

「あなたにまで何かあったら、どうするの。だいたい、小学生を戦わせるのがナンセンスだったのよ」

舞が決めつけた。

「もう中学生だいッ」

「そういうのを屁理屈と言うんだ」

猛が言った。

「でも、僕だって戦えるよ。この前だってディンゴ1を皆で守ったじゃないか」

「生意気を言うな！ お前なんて足手まといなだけだ」

猛が怒鳴った。

「兄ちゃん…」

将が呆然として猛を見る。

「行くぞ。もう時間が無い」

猛はそう言うと、将など眼中にないかのように歩き出した。一矢と舞も後に続く。

「危険なんだ」

一瞬だけ将の方を見て、猛はそう言った。

だが、将は納得してはいなかった。彼は素早く入り口に回り込んで、立ち塞がった。そして、泣きながら叫んだ。

「お願いだよオオオ！ おいていかないでヨオオオオ！」

三人は将の言葉に驚いたような表情を見せていた。

“おいていかないで”の一言、は意外であった。将がその様に感じていたとは思ってもしなかった。遥も、そうだったのだろうか？ 二人が何を求めていたのか、本当に二人の視点で考えていたのだろうか？

「みんなが帰って来なかったら、僕、一人ぼっちになっちゃうヨオ、行くところが無くなっちゃう

うヨオ」

将は更に訴えた。

「戦うのが怖くはないの？ 死ぬかもしれないのよ。現に、あなたも危なかったのよ！」

舞が問いかけた。

「怖いよ、怖いけど、でも、おいて行かれるのはもっと嫌なんだよ…」

三人は顔を見合わせた。

やがて、猛が口を開いた。

「分かったよ、将。一緒に来い」

とても静かな声だった。

「何があってもオレがコイツを守ってやる。だから連れて行こう」

猛は舞と一矢に言った。

「そうだな、四人、一緒だ」

「そうね、死ぬ時は一緒か」

一矢と舞が言った。

「ようし、バトラスV、発進だ」

四人は部屋を飛び出し格納庫へと急いだ。

奇妙なことだが、将はこの時、実に安堵したような微笑みを浮かべていた。

「プライム・バトラスがいるわね。どういう事なの」

格納庫には小早川がいた。彼女、ディンゴ1はバトラスの発進を待ってから、警戒任務につく手はずであった。彼女は四人揃った編成のバトラスVを見て意外そうな声をあげた。

「一条空将は一人前に戦えますよ。それに私たち死ぬ時は一緒だって約束したんです」

平静で凜とした声で答えたのは舞だった。だが、その言葉は、小早川より見ればセンチメンタル以外の何ものでもなかった。

「戦いはそんな甘いものじゃないのよ。何かあってから後悔したって遅いのよ」

彼女の声は冷たかった。

「そんなに頭ッから決めつけなくてもいいだろう。やって見なくちゃわかるかよ」

かなりぞんざいな口ぶりで猛が反論した。

「あ、あの、ボク頑張りますから。何とかよろしくお願いします」

将が懇願した。

「今からでも遅くないから考え直しなさい。あなたには危険だわ」

「彼は足手まといいには成りませんよ。この前、ご自分でも腕前をごらんになってるはずですよ」

一矢が言った。

小早川は数秒間、考え込んでから言った。

「一条将君だったわね、いいでしょう。これ以上、話しをしている時間はないわ。その代わり戦場では誰も特別扱いはしてくれないわよ」

「ヘン、あたりまえだろ、そんなの」

猛が言った

「君、上官への口のきき方に注意しなさい。」

「了解であります。ディンゴ1」

「では、どうぞお先に発進してください。バトラスV。先行部隊が待ってるわ。幸運を」

「了解！」

弾むような声で四人が一斉に答えた。

彼らは発進し、敵を殲滅し、帰還した。

※ ※ ※

彼らの思い、決意に関わらず、事態は大局を動かそうとしていた。

「年少者はどこまで戦力として有用なのか？ モルモットというわけですか？」

神宮寺の言葉にも、その男達はせせら笑うだけだった。

「児童虐待だと？ かまうものかよ。彼らは、貴重な標本。いや、実験台だ。全く新しい可能性が開けるよ」

「確かに技術部が言う通り、バトラスは年少者に操縦させた方が、習得が速やかに進むだろう」

「あの博士は、よほど自分の発明の正しさ、と優秀さを証明、いや誇示したいらしいな」

「多額の予算を投入したからねエ。失敗では済まされないさ」

日本国の奥の院、日米合同委員会は決定を下した。バトラスだけで編成される部隊を創設し、最前線での任務を与えよと...

「彼らは、大祖国防衛戦争の魁であり、シンボルなのだ。いいか！彼らを最激地区に派遣しろ。特に、この十二歳の少年をだッ！」

第四七独立中隊が、正式に誕生した。

第5章

第五章 蒼天の下で

城塞の様なブリッジを聳えさせたイージス艦が、かき消された様に見えなくなった。同時にバルーンも消えた...

将は無表情のまま、当然視していた。

横須賀基地の港湾区画。

休憩、非番、その他、時間の取れた時には、此処に来て、何もせずにぼんやりと流れ行く景色を見送っていた。

遥がいなくなってから...

時折、埠頭に打ち寄せる波の音や潮水の香りが、五感というフィルターに引っかかる。だが、それらの知覚は流れ去るに任せた。

ただ、時間が過ぎ去る事だけを待っていた。

ぼっちなら、他に誰もいない事も苦にならない。

猛達と一緒にいると辛かった。心に欠落した部分がある事を、強烈に意識させられてしまうのだ。それは胸を圧迫されているかの様な息苦しさを感じさせる。発狂して喚き出したくらいだった。

二度と、取り返す事の出来ないものへの悔恨。

ここにいると、その狂おしい感情が温和くなるようであった。

空を見上げてみれば、太陽が輝き、雲が漂っていた。

吹き抜ける風。寄せては返す波。波間に浮かんでは弾け飛ぶ泡。

遥の死ぬ前も後も、何の変りも無いはずなのに、太陽も、風のそよめきも、波の音も、何気なかったものがそうではなくなっていた。

何もかもが淋しかった。心が痛かった。それらが、そこに存在しているだけで、儚く、淋しく、そう感じてしまうようになっていた。

違う、違う、何もかも違う。

世界は、もう自分の知っている世界ではなくなってしまうていた。昨日までと、同じものを見ているはずなのに...

何もかもが急速に流れ去って行く... 自分一人が取り残されている。

自分はこれからも、“人の生き死に”を見せつけられていくのだろうか？ それが大人になるという事なのだろうか？

空気がかき混ぜられて風が吹く様に、水が逆巻いて泡立つ様に、命も、宇宙がかき乱されて、時間が一瞬揺らめく狭間に生まれ出てくるだけに過ぎないのではないか？

それならば、水がかき混ぜられる事に何の意味も無い様に、命が生まれる事にも意味など無いのではないか？

そして、死ぬ事にも...

人の一生も、単なる物理現象で、その程度のものでしかないのではないか？ だったら、何も

悲しむべきものは無いのかもしれない。

ボンヤリとした脳裏にそんな意識が漂っていた。

だが、人間は、感情という重い鎧を纏わせられて、そこに何かを見出そうとして、もがく事を余儀なくされている。太陽は何故そこにあるのだろうか？ 何の為に輝いているのだろうか？

日光が暖かい事。空気が透明な事。風がそよぎ、波が打ち寄せる音。自分の五感に入ってくる情報には、何の意味があるのだろうか？

何故、人間は、自分の行い、自分の人生に意義や価値を見出したがるのだろうか？ そこには、本当に意味があるのだろうか？

それが真実だと証明する事など、不可能だろうに...

「何の為に、戦うんだろ？」

砂が数粒こぼれた様な眩きだった。喋った当人も気付いていない、そんな眩きだった。

十二歳の少年には過酷なはずだ。こんな子供が軍事基地にいる事自体、異常なのだ。

猛達も、とりわけ舞は打ちのめされているのに、ましてや、将の胸中ではどういう事が起こっているのか、自分には想像すら出来まいと、神宮司には思えた。

将の行動の変化には注視していた。だから、将が頻繁にここに来るようになった事にはすぐ気が付いた。

最初は、最悪の事態を憂慮したが、そうはならなかった。

将は、唯、そこで、何事かを感じているらしかった。それが十二歳の少年には、深刻過ぎる、残酷とすらいえるものであろう事だけは認識出来た。だが、自分が彼に何をケア出来るのか、皆目見当がつかなかった。

日に日に、追い詰められていく戦況、防衛隊という組織自体が、瓦解しかかっている。

ただ、一つだけハッキリしていた。

「もう、誰も死なさない」

それだけは...

そう言うと、神宮寺は海の彼方を見やった...

※ ※ ※

その対岸に京葉コンビナートがある。東京湾内房総半島沿岸部が広がった日本有数の工業地帯である。北米大陸失陥後、日本が極東の兵器廠となった今、極めて戦略的重要性の高い地域となっていた。

まるで精密測定したかの様に鋭いストレートの海岸線が、海と陸地をくっきりさせている。海の碧さとコンクリートのグレイの地が互いを際立たせている。その海岸線に内陸から溢れ出るかの如く、多くの工業プラントがせめぎ合っていた。

こんな光景が、東京湾に沿って続く。

「今日の予定は何とかなりそうですね」

「空襲さえ無ければ、どうって事無いのにな」

今、このプラントでは、そんな会話がされていた。

ここで生産されているボールベアリングは、防衛隊の装備の部品として使われる事になって

いた。当然、それは戦場で使用されるのである。それも日本だけではなく、海外の同盟国へも供給される事になっていた。日本が国連の兵器廠と言われる所以である。

そして、今、国連軍に於いて、ボールベアリングの需要は逼迫していた。どこの国の軍隊も装備の劣悪を嘆く事は贅沢で、頭数すら揃っていないのである。

だから、生産計画の未達は断じて許されないのであって、
従業員達は

「必ず、計画は達成する」

固く決意して事に当たっていた。エンジニアとしての矜持であったろう。

とは言っても、休憩は必要であった。彼らは少数のグループに分かれて休んでいた。

屋上では、風が吹き抜けて心地よい。

それにここは展望が良い。空、海、そして海の彼方に京浜コンビナートが霞んでいた。

ここで、憩いを取る者が多い。

プシュッ！ 缶コーヒーのリングプルを外す。そして、口へ運びながら目を海へ向けた。

その作業員は何気なく海面を見つめていたが、ピクッと身を硬くして目を見開いていた。そのまま海を凝視し続けた。

海面が盛り上がっていた... そんな沖合ではない。近く所で。

海面はドンドン盛り上がり、小山ぐらいの大きさになった。

一瞬の出来事なのに、何故か鮮明に映像を捉えていた。

その隆起はある高さで臨界点に達し、海水が雪崩落ちた。

その頂きを突き破って、何かが姿を現した。

「！！！」

「！！！」

屋上にいた作業員達は、皆、立ち竦んでいた。

今、彼らの眼前には、円盤の様な胴体に節足生物のような脚を八本揃えた巨大な歩行機が佇立していた。

発令所の巨大スクリーンにもその光景が映されていた。

北米大陸の戦闘でアメリカ軍以下の国連軍地上部隊を叩きのめした歩行戦車。

そのコードネームは

”バージェス”

「陸上防衛隊、一個小隊が付近にいます」

「習志野基地より、攻撃ヘリが発進しました」

「工場の作業員に避難指示」

オペレーター達の報告が飛び交う。

「！」

映像に変化があった。

バージェスから緑色の光条が数本照射されたのだ。それらは一見すると緑色のサーチライトを思わせる。

正確にはレーザー光であった。

レーダーについて、電波の代わりにレーザー光線を使用する探知機をライダーと呼ぶ。遥が狙撃された時にも使用され、海中でも使用可能な探知機であった。

バージェスは、そのライダーを搭載していたのだ。

幾本もの緑の棒が空に踊り、地表を舐めるかの様に這い回っていた。

カメレオンモードで飛行していても、よく目を凝らせば蜃気楼の様な揺らめきが視認出来る。

そのような揺らめきが十二個バージェスへ接近していく。

二手に別れて高度を下げ、地を這う様に迫っていく。至近距離まで近づいてミサイルを叩き込むのだ。

バージェスの放つ緑のレーザーの一本が揺らめきに触れた。その瞬間にバージェスは、緑の光が指し示す方向へ強力な閃光を放っていた。そして、その揺らめきは吹き飛んだ。

他のへりも緑色の光に絡め取られると、バージェスの放つ破壊力線によって次々と撃墜され、全滅した。

一瞬の事であった。

カメレオンモード下であっても、物体が存在しレーザーが触れると緑色の光が反射される。バージェスはその反射光を感知して敵の位置を割り出し、より強力な破壊光線を発射。撃ち落とすのである。

粒子フィルターを使っているには出来ない技である。

北米大陸の地上戦でも、この凶悪な武器に国連軍は圧倒されたのである。

ともかく...

空からの攻撃は失敗した。

キュラ、キュラ、キュラ...

甲虫の様な戦車の一群が、工業プラントの間を縫う様に走り抜けていく。

発令所の巨大スクリーンにもその映像が送られている。

真っ直ぐ進んで右折。更に進んで左折。プラントの間を縫う様に右折と左折を繰り返す。

やがて、戦車のスコープはプラントの間からバージェスを捉えた。

すぐさま

「照準ヨシ」

の音がした。

「発射！」

照準ヨシの声に間髪おらずに命令がでた。

ドォォオンン！ 轟音で画面も震えた。

だが、誰もそんな振動の事は意識していなかった。全員がバージェスに集中していた。

優化プルトニウム芯の徹甲弾が、マッハ七で空を裂く。命中した。バージェスの脇腹に爆煙が発生した。

だが、煙が晴れるとバージェスの装甲が現れた。

何の変わりもない。

戦車隊には撤退が命令された。

戦車の火力では、非力なのだ。

続いて、動員されたのは二十八糎カノン砲だった。

戦車の砲弾よりも破壊力があつた。この時代の技術力で作られたそれには、戦艦大和の四十六糎砲より威力があつた。

だが、これも無駄であつた。

バージェスを中心とした球面上にいくつもの爆発が上がる。まるでバージェスが透明な球殻に覆われているかのようであつた。

バージェスは発射された砲弾を撃ち落とした。それも、複数の砲弾を一瞬に、である。バージェスの緑色光ライダーはカノン砲を捕捉したのだ。そして、即座に破壊力線が作動する。

物理法則に則って単純な放物線を描くだけの物体など撃ち墜とすのは容易なのである。

バージェスにとっての当面の障害は、排除された。

全体的バランスからすると細身の脚が小刻みに動き出す。振動も少なく軽快な動きだ。

「バージェス、移動を開始」

オペレーターが報告する。

その狙いはベアリング工場だと思われていた。だが、人工知能君は異なる見解をだした。幕僚達はそれを聞いて恐怖した。

”第八潮力発電所”

京葉コンビナートに電力を供給する大発電所である。

「止めろ！ なんとしても止めろッ！」

基地の総司令が紅潮した顔面で叫んだ。

「総司令！」

神宮寺は思い切って意見具申する事にした。

「バトラス隊の陸上戦投入の許可をお願いします」

総司令は逡巡したようだった。

今、バトラス隊はタルサリスを相手に空中戦の最中にある。（これとは別に、約四十四分前にスクランブルしていたのだ）バトラス隊を引き抜く事は航空戦力の大幅なダウンを意味していた。

しかし、総司令は決断した。

「分かった」

そう言っただけだった。

この選択の成否は問われるべきではあるまい。苦しみもがきながら”決めた”のだ。その事が大事なのだ。

すぐさま、指令が飛ぶ。

空へと！

空は赤一色で他には見えるものは無かつた。

超電磁メーザーの青白い光が、何も存在してはいないと思われる空中から発射され、何も存在

してはいないと思われる空中で何かに命中した。すると、突如そこに物体が出現して爆発四散した。

タルサリスの最後の一機だった。

今日、二度目の迎撃戦であった。二度の戦闘の両方ともバトラスの貢献は大であった。戦果の半分は四機のバトラスによってもたらされたのだ。

「ざまァ見ろ」

「やったネ」

パイロットの四人は、快哉を叫んでいた。

遥を失ってから、四人はコンビネーションの質を大幅にアップさせていたようであった。

だがいつまでもそうしてはいられなかった。他にも戦闘はあるのだ。

「次は何処だ？」

「隣のエリアでタルサリスが一八機」

猛が問う。舞が答える。

「よし！」

勇んで次の戦場へ向かおうとした時であった。

スクリーンにウィンドウが開き、神宮寺が姿を現した。

「バトラスは全機、木更津の工業エリアへ向かえ。大至急だ」

と言われた。

今、空中戦から抜ける事に不安があった。だが神宮寺の口調と表情が疑問を口にする事を出来なくしていた。

バトラスVは転進した。そして、初めての陸上戦を経験する事になる。

「陸上戦だ」

リンクから配信された情報諸元を見て、猛は確かめる様にそう言った。

「優化プルトニウム弾も、二十八糎カノン砲も効かないんだ」

「となると、残るは超電磁レーザーしかないってわけね」

「バトラスなら地上から撃てるよ。それにラフライダーのよりは出力大きいもんね」

「あまり、時間がない」

配信された映像でおよその事は分かった。

バトラス隊は各自分散し東西南北の四方向から攻撃する手はずである。

指定されたルートを通れば、工業プラントの死角に隠れて、バージェスに一五〇〇メートルの距離まで接近出来る

狙撃点に着いたら、タイミングを合わせ四人同時に超電磁レーザーを発射。

発射後、速やかに仰臥する、というのがキモだ。敵には即座的な反撃力があるのだから。

以上が作戦の概要である。

スクリーンに目をやると、拡大されたウィンドウに、バージェスが幾本もの緑色レーザー光を振り回している姿が映っている。

カメレオンモードは使用していない、と言うより備わっていないのだろう。カメレオンモード

を捨ててまでその装甲を選んだからには、異星人にはよほどの自信があるのかもしれない。

「フン」

猛は鼻を鳴らした。

確かに危険な作戦だった。だが、ベアリング工場も潮力発電所も断固として守らなくてはならなかった。

「見てろ！ やってやるぜ」

着陸地点に急いだ。

アノテーションが記載されたバルーンが、四人各々に着陸地点を教えてくれた。スクリーンに映る周囲の光景は、最新工場がぎっしりと並んだ眺めだ。

そこに着陸すると、次のバルーンが現れ行き先を教えてくれる。

だが、その前にやる事があった。

チャチャチャッとコンボを入力すると、軽い落下感。スクリーンの映像が軽やかに上に流れていった。バトラスの視点が下がったのだ。要するに外から見ていると、バトラスがその巨体からは信じられないほど軽やかにしゃがむのを見ただろう（未来の科学でOKということで...）

しゃがんで背を丸める、これがバトラスの地上行動体型である。

バトラスはその格好で三メートルの高さに浮遊すると、意外なほど騒音振動も無く滑らかに前進を開始した。超電磁スラスタの優れた特性である。道路にしても、バトラスの巨体の為にルートは無さそうに思えたが、大型トレーラーの通行も想定して敷設された道路であり（けっこう、幅が広い）バトラスが思いのほか小回りの効く性能を有している事も相まって、無難に移動出来た。人工知能君がバルーンを表示して誘導してくれるので尚更簡単だった。

配信されたマップがスクリーンに映し出されている。工業プラントの配置と道路網が、簡略化されたインフォグラフィックスで表現されていた。

画面の上では、建物の隙間を四つの光点が移動していた。緑が自分で辿るべき経路が一目瞭然だった。他の三つは黄緑色で、一矢達の位置が分かる。

視線を前方戻すと、左右に広がるプラントがどんどん後ろへと流れていた。時折、プラントとプラントの合間にチラリと円盤の様な要塞が見える。

バージェスだ。緑色のレーザーをさかんに振り回して周囲をスキャンしていた。（フェーズドアレイ・レーダーの電波が目に見えたら、こんな感じなのか？ もっと目まぐるしいのか？）あの光に舐められたら、即オダブツだ、と自分に言い聞かせたりもした。

ふと目をやると空が青かった。粒子フィルターを使わないとは滅多に無いシチュエーションだった。

「見てろよ」

猛は小さい声で呟いた。それは敵へ向けられたと言うよりも、自身を鼓舞する為のものだったのかもしれない。

狙撃ポイントは目前だった。

「全バトラス、狙撃ポイントに配置されました」

オペレーターの報告と併行して、神宮寺はスクリーンのインフォグラフィックスを見てそれを

確認した。

緑色の四個のインフォグラフィックスが菱形を形成している。その中心には紫色をしたインフォグラフィックスが点灯している。

今、バトラスがでっかいブロックか蒲鉾の様な建物の影で、息を潜めているのだ。その向こうにバージェスがいた。今は停止している。

距離が一五〇〇メートル。

バトラスに装備されている超電磁レーザー砲は、額に一門、両手首に二門。今は、両腕のレーザーにエネルギーを全て集中する。その時の威力は通常のレーザー砲の比では無い。

「いいか、各自発射と同時に退避行動に入れ。元来た道を逆に辿れ！」

「了解」

「方位修正」

肉眼による照準ではなく、別地点の友軍が測定した値に基づいて狙いを定める。GPS衛星は破壊されたが、地上に設置されたニュートリノ発信機群で代用できた。そのデータがバトラスの人工知能君に配信され、ロックオンしてくれる。

バトラスは両腕を伸ばす。ビミヨーに揺れた。

「照準よし」

「秒読み開始」

神宮寺の指令で人工知能君がカウントを始めた。

「十...九...八...七...」

心臓がバクバクとした。パイロットは辛い。

「三...二...一...」

「！」

「ゼロ」

「テェー」

「了解！」

トリガーを握る強張った指に、無理矢理力を入れた。

バトラス四機は一斉に上昇した。ビルの屋上から半身を晒す。そして、二筋の青白い光芒を放つ。すかさず身を沈めた。この間、一〇秒とかからなかった。

だが、バトラスはこの数秒間に緑の光に舐められていた。

バージェスは即応した。破壊力線が照射されて、辺り一帯が薙ぎ払うように焼き尽くされた。

「FREETA-DOOOOP」

全機破損した。

最も不幸なのは猛のグレート・バトラスであった。バージェスの破壊力線が盾にした建物を貫いて被弾した。

「クソッタレ！」

自らの爆発光で眩いスクリーンの光に照らされながら猛は悪態をついた。

右腕が消失していた。

一方バージェスは無傷であった。バトラスの放った超電磁レーザーが命中した事は味方観測員により確認されていた。だが、傷一つ付ける事は出来なかったのだ。

バトラスは遠巻きにバージェスを窺うしか無かった。超電磁レーザーはバトラスの唯一の武器であった。

「超電磁レーザーが全く通じない」

発令所では、総司令以下の全幕僚が動揺を隠せないでいた。

「総司令。こうなったらバトラス隊を突撃させましょう」

陸上防衛隊の幕僚が提言した。

「バトラスの対被弾性なら見込みがあります」

とも付け加えた。

「待って下さい」

神宮寺は色を変えた。

だが、その幕僚は言った。

「貴様の考えは分かる。しかし、ベアリング工場どころか、潮力発電所も危ないのだぞ」

「いや、戦果は期待出来ない。搭乗員達が無駄死にするだけだ」

「可能性はゼロではない。もっと接近すれば撃破出来るはずだ。それに賭けるしかない。四機あれば、そのうち一機だけでも肉迫出来る」

「無茶だ！」

「いや、これしかない！」

両者の議論は完全に噛み合わなくなっていた。

これを制したのは、総司令であった。

確かに一人ぐらいは敵に近接出来るかもしれなかった。バトラスをよりバージェスに肉迫させ、超電磁レーザーを叩き込むというのが確実なのかもしれない。

だが、そんな無謀な攻撃を部下に命令する事は耐え難い事だった。それは彼らの死を意味していた。そんな事は絶対に避けなければならない。

情緒抜きに考えても、バトラスのパイロットは貴重なのだ。貴重過ぎていた。

総司令は最後の手段に打って出た。もし、これが失敗すれば、今度こそバトラス隊の強行突入ということになるだろう。他に手段は無いのだから。

最終手段とは、飽和攻撃である。

先刻の二十八糎砲の攻撃は、砲弾が目標に到達する遙か手前で撃ち落とされていた。敵の高度な迎撃能力ゆえの賜物だが、これにも限界があるはず...であった。一度に大量の弾丸を叩き込めば、どうなるか？

飽和攻撃とは、異次元の金融緩和の如く、大量のミサイル弾丸を叩き込み、敵を対処不能の状態に追い込もうという戦術であった。

有り限の弾薬を撃ち尽くすので、本当に最後の一手である。

砲撃された辺りは一面、焼け野原と化す。それはベアリング工場の破壊を意味していたが、全てを承知の上での決断であった。

そのような決断を下せる事も、一種の胆力と言えたかもしれない。

そう思うので神宮寺も異議を唱えなかった。

だが、彼には一つ危惧している事があった。

それはバトラスの高出力超電磁レーザーの攻撃を撥ね除けたバージェスの装甲に、従来の徹甲弾や対地ミサイルが通用するのだろうか？という事だ。

しかし、飽和攻撃だけが今の防衛隊に残された唯一の手段なのだ。

そして、神宮寺の胸中には、もう一つだけ策が秘められていた。

再度のバトラスによる超電磁レーザーの攻撃であった。ただし、今度は至近距離まで肉迫してレーザーを叩き込むのである。

(それしかない)

正直、心中では、そう思っている。だが、一つだけ難点があった。

バトラスを如何にして安全に敵の至近距離まで接近させるのか？という一点である。しばらく考えあぐねていたが、

「！」

不意の一つだけ、ある方法を着想していた。だが、その内容に動揺せざるを得なかった。

「作戦開始」の声を聞き逃しそうになった。

行動を開始するのは遠方の部隊からだ。着弾時間を同調させるためである。

東京湾に展開するイージス艦がミサイルを全弾射出した。四列四段に並んだ垂直のミサイルセルがミサイルを吐き出していく。

次に、上空にいるラフライダーの一群である。彼らはグライダー爆弾を搭載すると急遽展開した。そして、規定の時刻〈ゼロアワー〉に、全機がグライダー爆弾を投下した。

爆弾の雨が、目標へと滑空していく。

「コードブルー。緊急待避」

「これって？」

「飽和攻撃だ！」

「ゲッ！」

「工場はどうなるのよう？」

「兎に角、逃げよう」

バトラス隊の四人は、全速でその場を離れた。

陸上防衛隊の車輛も、逃げ出し行く。

京葉コンビナート地区を管轄する、関東方面隊の第五旅団も行動を開始した。

多連装ロケット砲戦車と二十八糎カノン砲部隊が、三〇両以上が整列している。〈ゼロアワー〉と同時に、彼らも全弾を発射した。

轟音の直後は爆煙で、その辺り一帯は何も見えなくなっていた。

「凄い」

安全地帯に辿り着き、振り返って空を仰いだ猛達は愕然とした。震え上がっていた。

流星が空を埋め尽くしているような光景だった。それらは東西南北のあらゆる方向から殺到し

、一点へと収束していく。

一瞬の間もおかずに閃光が空を満たした。太陽すら一瞬見えなくなってしまう程だった。

続けて轟音がして、地面がガクガクと揺れた。

火山が噴火したかの様に煙が天へ昇っていく。

猛は興奮に息を荒くしていた。一矢達もそうであったであろう。

だが、次の瞬間には、四人は...いやこの飽和攻撃に加わった全員が意識を切り替えていた。ある一点に集中していた。

被害も投入した物量も甚大であった。だが、目的を果たせば帳尻は合う。

発令所の中央スクリーンには、ドローンから撮影された映像が映っている。

デジタル模様の中央に佇立しているものがあつた。

そこにいる誰もが間違いだと思った。あり得ないと思った。

だが、それは現実だった。

バージェスは生存していた。

工業プラント群は跡形も無くなっていた。地面は黒く焼け焦げていた。

そして、

その中央にバージェスが鎮座していた。

「ば、バカなッ！」

そう言うと、皆、立ち竦んでしまった。

神宮寺の姿が消えた事に気付いた者はいなかった...

バトラスのコクピット内で、猛達も呆然となっていた。

一矢を除いて...

彼は、彼だけはこうした事態の想定が出来ていたのかもしれない。

彼は人工知能君に尋ねた。

「バージェスの緑色のレーザーを解析出来るか」

と...

人工知能君は無機的な声で回答した。既にデータは採取してあると。

「その光をカメレオンモードで再現出来るか？ 同じ光を発光出来るか？」

と訊くと、

「可能」

との返答があつた。

一矢は凜とした表情で前方を睨んだ。その目には堅い決意の意思が窺えた。

覚悟を決めた。後は自分の思惑を兄に告げ、そして実行あるのみであった。

だが、一矢がインカムで呼びかけようとした時、人工知能君がインフォメーションを告げた。

「後方ニ飛行物体ヲ確認。識別信号応答アリ ラフライダー」

「映せ」

とんだ邪魔に苛立ちながら言った。

スクリーンにウィンドウが開くと、その光景が映つた。

「！」

それは、味方機と言いながら、見た事がない姿をしていた。何故なら、目も眩むような緑色の閃光に彩られていたからだ。

さながら、緑の閃光（フレア）であった。

「これ以上、もう誰も死なさん！」

そのラフライダーのパイロットは凄まじい形相で前方を睨みながら、その事だけを念じていた。

神宮寺は今、バトラスを敵に安全に接近させる唯一の方法を実行しようとしていた。それはラフライダーのカメレオンモードで敵の緑色レーザーと同波長の光を放ち、バージェスのセンサーを混乱させる事だった。

バージェスは緑色のレーザーを発信し、物体に当たった時の反射光をセンサーでキャッチして敵を認識する。

つまり、バージェスのセンサーは緑色の波長の光に反応するように作られている。

もし、同じ光を強烈に発光させている存在があったなら、バージェスのセンサーは全てがその光に反応してしまって、それ以外の存在を見失うであろう。その際にバトラスを投入させるのだ。

こうして神宮寺の駆るラフライダーは強烈な緑の光を発し、緑の閃光（フレア）と化してバージェス目がけて突っ込んで行った。

その緑色のフレアを見た瞬間、反応出来た者は皆無であった。猛、舞、将も固まっていた。

しかし、一人だけアクションを起こした者がいた。

一矢だ。

一矢には啓示のようなものがあった。この緑のフレアが何を意図してのものなのかという事を、そしてパイロットが神宮寺であろう事を彼だけが一瞬で洞察していた。

それは一矢が神宮寺と同じ事を考え、実行しようとしていたからなのかもしれない。それ故に、神宮寺の身に何が降りかかるのかまで予期し得たからなのかもしれない。神宮寺の決意を無駄にする事は断固出来ない！

思惑通り、バージェスのセンサーは悉く突然出現した強力な反応に直面した。その反応はあまりにも強力過ぎて、前方のセンサーがそれのみに集中してしまい、それ以外の反応はかき消されてしまった。そして、バージェス搭載の人工知能君は反応の大きさから、それが巨大で強固な存在であろうと類推していた。

それは、バージェスの全破壊力線が、これのみに向けられる事を意味していた。

「超電磁スラスタ、出力最大！」

一矢の乗るキング・バトラスは、建物の陰から踊り出た。姿を晒す事を意に介してはいなかった。そのまま突進して、一気にバージェスとの距離を詰めた。

肉迫した。接近出来た。

実にあっさりと...

「喰らえエエエ！」

超電磁メーザーを叩き込んだ。

一矢は自分を呪った。あっさり行動した自分を冷酷だと思った。

こんな重いトリガーを、こんなにあっさり引く自分を鬼畜だと思った。

極めて至近から放たれたメーザーは、今度こそバージェスの装甲を貫いていた。

一矢は一撃すると素早く後退した。

バージェスの内部の機構は破壊された。その内部で爆発が起こり次々と誘爆した。

今度はバージェスのその強力な装甲が爆発を内部に封じ込めた。行き場のないエネルギーが内部で荒れ狂う。更なる誘爆が起きた。そして、装甲等の結合部から炎が這い出てきた。

遂には装甲そのものに亀裂が入り、赤い炎が奔流と化して噴き出す。

最後には大爆発した。バージェスは墜座した。

一矢は、冷静な彼にしては似つかわしくない興奮をしていた。顔は強ばり、目を見開いてスクリーンを凝視していた。肩で大きく、荒い呼吸を繰り返していた。

そんな状態だったが、突然にハッと何かに思い当たったようだった。

そして、スクリーンを振り向いて、先刻の緑のフレアが飛行していた辺りを見つめた。

何も無かった。見えなかった...

大量に集中したバージェスの破壊力線は、神宮寺の乗ったラフライダーを完全に蒸発させていた。

だから、何も残っていなかった。一片も残っていなかった。

こうして、戦闘は終了した。戦いは終了したのだ。工業区画が一区画、完全に破壊された。しかも、それは人類自らの行為によるものだった。ここに世界最先端の技術を誇る工場があったとは思えなかった。兵器生産の要となるベアリング工場は跡形も無かった。あるのは黒く焼け焦げた瓦礫の散乱した荒野であった。

だが、戦いはここだけではなかった。その頭上に広がる空間でも殺戮はあった。毒の蚊と猛禽の凄烈な死闘が繰り広げられていた。多くの猛禽達が散っていった。バトラスという巨人の不在が痛手だった。

防衛隊は残された戦力を集中して防戦した。辛うじて撃退したが、味方機の損害は甚大であった。

首脳部に於いても有能な幕僚を失っていた。防空作戦では要と言える存在だった。バトラスの導入計画にも支障が予想された。

関東エリアの航空戦力は...壊滅した。

四人は呆然となって帰還した。一矢以外は皆、あの機体に神宮寺が搭乗していたとは信じようとしなかった。だが、基地に戻ってから正式な発表を聞かされると、受け入れざるを得ない様子であった。

現に、神宮寺は何処にもいなかったのだから。

だが、一つだけ遺されたものがあった。

「ねえ、これ見て」

舞がタブレットの画面を指し示した。一通だけ受信していた。送り主は神宮寺。

それを見て、三人も自分のタブレットを開く。

同じメッセージを受信していた。

ファイルを開くと音声 flowed。

「お前達がこの声を聞く頃には、自分はもうこの世にいないだろう。まず、遥の死について謝罪しておきたい。全ては俺のミスだ。俺の読みの甘さ、俺の油断だ。だが、もうこれ以上、誰一人として死なせはしない。俺の命と引き替えにしてもだ。だから、敵を倒すために唯一可能な作戦を実行する。最後にこれだけは言うておく、死ぬな。どんな事をしてても死ぬな。お前達はまだ若い。いや、若いとすらいえない。十分に生きたとは言えないのだから。未来に大きな可能性を持つのだから。

さらばだ」

受信時間は、戦闘の真っ最中だった。

「最後の最後まで...」

それ以上は言葉にならなかった。激しくこみ上げる悲しみが声帯を麻痺させた。四人は泣いた。声を忍ばせて泣いた。

その日は、もう食事も摂らず、泣いていた。

第6章

第6章 ハヤテの如く

時間は止まらない... 例によって、追憶も感傷も押し流していく。

徴兵制施行。戒厳令発動。国債償還完全免除。

むしろ、加速して大きく動き出したようであった。猛達のミクロな局面でも変動があった。

“第二四四戦闘航空団 第〇四七独立中隊二配属ヲ命ズ”

横須賀基地航空隊は壊滅していた。その戦力の中核であるラフライダー隊を失い、有能な指揮官まで戦死したのである。唯一、残存した有力な戦力である第一特殊戦闘機隊バトラスVには転属命令が出た。

行き先は航空防衛隊木更津基地。

彼らだけではない。整備員や司令部要員にも転属命令がだされた。現在の横須賀基地航空隊は事実上、解体された。その再建は、後任として配属されるであろう隊員達に託されることになる。

最後に総司令からの訓示があった。

「各員、辞令の通り、本横須賀基地航空隊隊員は、本日付で第二四四戦闘航空団に転属となる。この転属は、以前から検討されていたもので、関東方面の防空態勢の強化を目的としている。第二四四戦闘航空団はその為に新たに編成された部隊であり、諸君がその一翼を担うことになる。市民が君達に期待するものは大である。なお、短い間であったが、諸君の奮闘と献身には心から感謝したい。ありがとう。そして、新しい部隊での活躍を信じる」

「これ、どうしたら良いんだ？」

待機ポッドへ戻る道すがら、タブレットに表示された電子書類の辞令を見ながら、猛が皆に訊いた。

「だめよ、デリっちゃ」

舞が注意喚起する。

「とにかく、お引越しの準備だよ。まあ、荷物なんて無いけどさ」

一矢は気楽そうだった。

「僕、あるよ。学用品。それと、四月から通う中学校はどうなるの？ 転校するの？」

将が言った。

「そう言えば、木更津に異動だもんな。転校だな、やっぱり」

「バトラスで木更津から横須賀へ通えば良いのよ。三〇分もしないで着くわ」

「エッ、良いの？」

「嘘よ。嘘。冗談よ」

「人事課へ訊いてみるか。場合によっては区役所へ直行だな」

「兄さん、僕達は待機中なんだよ。何時、敵が来るか分かんないんだから...」

「FREETA—DOOOOOP！」

その時、電子語で警報が告げられた。続いて緊急出撃の命令が出る。敵がこちらの都合を考慮

してくれるはずない。だが...

間の悪い事ではあった。

更に悪い事に、横須賀基地から出撃可能な戦力は四機のバトラスだけであった。これまでの戦いで戦力は枯渇していた。余所の基地からのラフライダー隊と合流し、どうにか態勢を整えた。それから、味方管制機の誘導で敵へと接近する。

スクリーンを視ると紫色の光点の雲。

今、表示されている敵の位置情報は大型の粒子フィルターを備えた哨戒管制機によるもので、バトラスに搭載された小サイズの粒子フィルターの性能では出来ない事である。

敵もタルサリスに搭載された粒子フィルターではこちらを認識出来ていないはずだ。

臨時に編隊指揮官となった、入間基地の航空隊のリーダーが指示をだす。

「敵はまだ、こちらには気付いていない。上昇して上に回り込み一気に攻撃する」と言った。

「ようし、いくぜ」

コクピットの中、猛はジョイスティックでコンボを入力する。

バトラスは機首？ 顔面？ 鼻先？ を上に向けてグンと上昇した。

赤い綿菓子のような雲を突き抜ける。

バトラスは雲の表面スレスレに滑るように飛行する。赤い雪原でスキーをしている気分だ。

雲はどんどん後ろへ流れていく。

敵は近い。

「全機、降下！」

気迫のこもった声で隊長が言った。

一瞬の間も置かずに全ての機体が雲に突っ込む。

「あらーむめっせーじ。れんじ4ニ飛行物体多数。識別信号応答無シ」

ダイブと同時に人工知能君が叫んだ。

雲を突き抜ければ陸地が広がるはずだった。だが、そんな事は明後日の事になっていた。

当方に気付いていないはずのタルサリスが、こちら目がけて上昇してきていた。真一文字に空を駆け上がってくる。

(ど、どうしてだ?)

猛は動揺した。敵はよほど優秀な粒子フィルターを装備しているにちがいない。

「全機、このまま突っ込め！」

隊長は動じる事なく指示を出す。こういう時は旋回したりして脇腹を晒したら撃たれるのだ。

バシッ！と叩きつけるような音がして双方はすれ違った。

「クソツタレ」

悪態をついた。だが、次の動作に入ることも忘れてはいない。

「全機、旋回」

指示されるより早く、猛は旋回の動作を始めていた。機体をロールターンで半回転させて一気に手足を伸ばす。

猛は反転したが、敵も反転を終了していた。両者は再度、向き合った。

「俺と一矢は前。舞と将は後方で援護しろ」

「了解」

一斉に三人の返事か来た。

猛のグレート・バトラスと一矢のキング・バトラスは併行して、加速して敵に迫る。舞のクイーン・バトラスと将のプライム・バトラスは後方に展開し、2トップの後ろをダブルボランチが固める、というボックス型のフォーメーション。

敵もこちらに進んでくる。まっしぐらに進んでくる。

「目視確認宜シ。行くぞ！ 一矢」

「了解」

一矢の声は落ち着き払って聞こえた。無愛想にも思える。

(お前って、いつも冷静だよな)

恐怖を感じないのだろうか？ こっちも負けてはいられない。

グレートとキングは同時に超電磁レーザーという光の矢を放つ。命中しなかった。とは言え、敵の破壊力線の方もかすめただけだった。

正面から撃ち合う時はいつも命中しない。空中戦の七不思議の一つだ。

バン！

その直後には、双方、交叉していた。その時の衝撃が機体を叩く。

すぐさま、反転した。

過酷な遠心力が発生し、猛は呻きそうになった。幾度となく経験していることだが、それでも猛烈な圧迫感を感じずにはいられなかった。

一矢もそうなのだろうか？

(ア、イ、ツ、は、タ、フ、だ、か、ら、な...)

一瞬でスクリーンに映る外の景色が大きく回転して天地が入れ替わる。

こうして、バトラスは反転し、すれ違ったタルサリスの後ろ姿が確認出来る...はず...であった

。

だが、猛が目撃したのは、既に反転を終えたタルサリスの姿であった。

出会い頭に光の矢がかすめた。

先を越された。

こちらも撃ち返す。命中...のはずだった。

(.....)

敵はこちらが撃つ寸前に滑るように真横にスライドし、攻撃はかわされた。

いつもなら、撃墜出来るのに。でも、悔しがっている隙はない。

とにかく、敵の後に喰らいつくのだ。

旋回に旋回を繰り返す。敵もこちらの背後を突こうと旋回する。

バシッ！

またも、両者はすれ違う。そして、即座に反転をする。これが繰り返された。どちらかが撃墜

されるまで、この動作が延々と繰り返されるのだ。その度に猛の体は強烈なgに晒される事になる。骨が軋み、内蔵が圧迫された。

それでもなお、猛は旋回を続行した。だが、攻撃は悉く躲かれた。そして、敵の攻撃は幾度も猛を脅かし、こちらはヒットポイントを失っていった。

「チクショウ！ コイツら、人間かよ」

gに脳みそを踏んづけられながら、猛は悪態をついた。

敵の動作に追従出来なくなっている事を認めざるを得なくなっていた。一矢を顧みる余裕も無い。一方、タルサリスの機動性は鈍ることが無かった。これだけ負荷のかかる機動を繰り返しているのに、消耗した様子がいささかも見て取れない（無人機なんです）

なんとタフな敵なのだろう。それでも今は、この死のタンゴを続けるしかなかった。体力と気力の限界まで...

更に双方が旋回を繰り返し、両者の飛行の軌跡が絡み合って二重螺旋を描く。或いは、樽の内側を擦っている様にも見えたかもしれない。

グレート・バトラスの描く軌跡が、徐々にその半径を大きくしていた。猛の精魂が尽き果て、反応と動作が鈍り出してきたのだ。それに伴い旋回に要する時間が微妙に増加する。

〇・一秒にも満たない、微少のタイムロスが発生する。この、一瞬の差が命取りになるのだ。何回目かの旋回が終了した時...

バシュウン！

炸裂音がしてグレート・バトラスの機体が激しく震えた。

肩に被弾していた。致命傷ではない。が、装甲が半分吹っ飛んだ。

「ちがう、ちがうぞ。コイツらは、今までのタルサリスとは違う」

これまでの戦いで、タルサリス相手にこれほど手こずった事は無かった。速度、旋回性能、火力、どれを取っても猛の記憶の中のタルサリスを凌駕している。

だが、この感慨、驚愕が決定的なタイムロスを生んだ。

この間に敵は猛の後方に位置を取った。いや、取られた。与えてしまったのだ。

「しまった！」

猛は撃墜される事を覚悟した。

「切り返して、猛」

スピーカーから聞こえたのは舞の声だった。

彼女の位置が不明だったが、猛は右ボタンを押した後、左ボタンを二回連打した。端から見ると指が痙攣しただけの様に見える。一瞬で、ストロークも僅かな動作だ。

上方から幾つもの光条が降り注いだ。

タルサリスは四散した。

続いて、上から二つの黒い影が矢のような速さで降下して来たかと思うと、猛の眼前を縦に過ぎた。

舞のクイーン・バトラスと将のプライム・バトラスであった。二人が一撃離脱攻撃を試みたのだ。モビリティ溢れる行動で、まさに二列目からの予期せぬ飛び出しであり、果敢なりス

クチャレンジだった。

そして、それは成功した。残った敵は戦場から離脱していく。

一矢も健在だった。

「助かった...」

月並みだが、でも本心だった。

四人は集結した。

「それにしても、タフな敵ね。あれだけ格闘戦を繰り返して、全然、疲労の様子が見えないなんて」

舞が言った。

「見てくれは同じでも、改良型なのかもしれないな」

一矢が答えた。彼の機体もずいぶんと被弾している。

猛も同感だった。

「ねえ、隊長と連絡が取れないよ」

将が注意を促した。

完全な乱戦をなる中で部隊は散々になり、四人は本隊とはぐれたようであった。無線に応答も無い。

孤立していた。

「このまま、真っ直ぐ行くか」

どうしようもなくなり猛が提案した時、不意に通信が飛び込んできた。

「こちらディンゴ1。やみくもに動くな。敵は近くにいますぞ」

そのコードネームと声には聞き覚えがあった。

「小早川少尉♥」

四人は歓声を上げた。（♥は猛）

「通信波を絞りなさい」

言われた通りにする。小早川少尉と通信出来た。

「あなた達の位置はモニターしていたわ」

「何処にいるんです。こっちからは見えないぜ」

「こっちはハッキリと見えているわ。なにしろキャッツアイなのよ」

空中哨戒管制機P7-C 通称をキャッツアイと言った。

警戒任務用に大型のレーダーと粒子フィルターを併せ備えている。言わば、空飛ぶレーダー基地である。

「ちょうど良かった。早く敵の位置を教えてくれ」

「それより、急いでそこを離れなさい。逃げるのよ」

「逃げる？ どういうことですか？」

「そこは危険よ。敵がどんどん集結中よ。CMDゾンデから次々に情報が入ってきてるわ。新手が続々と出てきているみたいね」

小早川の通信を聴きながら、猛は後どれほどの敵が現れるのだろうかと考えた。

小早川の報告は続いた。

「現在分かっているだけで、敵の出撃回数は三〇〇ソーティを超えたわ」

「三〇〇だって！！！！」

「もうすぐあなた達にも見えてくるはずよ」

その言葉を裏付けるかの様に人工知能君が声を上げた。

「あらーむめっせーじ。れんじ4に飛行物体。識別信号応答無シ」

スクリーンには無数の光点が群がるように映っていた。

「あらーむめっせーじ。れんじ7に飛行物体。識別信号応答無シ」

これも凄い数であった。

「クソツタレ。俺にも見えたぞ」

最大望遠でスクリーンにタルサリスの大編隊が投影されていた。一〇〇機はいた。

「早く退避するのよ。バトラスV」

小早川が促した。

「逃げろだって。そんな事したら、後はどうなるんだ？」

「いいから、退避しなさい」

「待って下さい。隊長達とも連絡を…」

「無駄よ…」

「？」

「ハッキリ言うわ。全滅したわ。今、そこにいるのは、バトラスV、あなた達だけよ」

「そんなバカな。いくら何でもあれだけあったラフライダーが全部、やられちゃったのか？」

「もう、この空域にはあなた達しかいなわ。だから早く逃げなさい」

小早川の声には焦燥と苛立ちが感じられた。

「どうしよう、兄さん」

「ねえ、どうするの？」

一矢と舞が縋るように猛に尋ねた。

言われるまでも無く猛は自問していた。考えが堂々巡りをしていた。

約一〇〇機の敵が接近してくる。しかも、改造されたタルサリスだ。たった四機のバトラスでは、どんな抵抗も螻蛄の斧だ。

しかし、自分達の後ろには無防備の都市があるのだ。自分達がいなくなったら、そこに住む人たちはどうなる？

だが、こちらはたった四機だ。何が出来る？

しかしだ、ここで逃げたら街はどうなる？だけど、だけど…

(ドチクショーッ！)

猛は意を決して叫んだ。

「俺は撤退なんてしないぜ。敵主力のいる座標を教えてくれ」

「何を言い出すの。ダメよ、逃げなくては。敵は大群で押し寄せてくるのよ」

「いいや。やる！俺は戦うぞ」

「たった四機で戦おうなんて、敵の餌食だわ」

「バトラスなら出来る！ 必ず出来ます」

そうだ、自分達が乗っているのはバトラスだ。いままで多くの苦難を乗り越えてきた、最新鋭の兵器なのだ。いや、戦友だ！

「待ちなさい。バトラスV！」

しかし、その時、

「FREETA—DOOOOOP！」

人工知能君が絶叫した。

敵は目前だった。シャレになんないほど接近しているのだ。

猛はスクリーンに映った群がる光点を見やった。

「やる！ やるぞ！」

厳しい口調だった。本当は叱咤激唯されたい。そう思いながら自分自身を叱咤した。後には引けないのだ。自分達の背後には、人口多数の都市が点在しているのだ。

「うん」

「了解」

「僕だって」

一矢、舞、将が口々に応答した。

粒子フィルターの反応は極大にまで大きくなっていった。敵だとはっきり選別出来た。

「突貫！」

猛が叫んだ。

赤い霞の中で、四本の矢が、蚊柱に突っ込んでいった。

以下の会話文は、行間に効果音とBGMを脳内で補完しながら読んで下さい。

「止まるな、動け！」

「FREETA—DOOOOOP！」

「兄さん、後ろだ」

「あなたもよ、一矢」

「お姉ちゃん、後ろ」

「お前もだ、将」

「だから、後ろ危ないよ、兄さん」

「だから、危ないのはあなたなの...って、私達、どうなってんの??」（実際にこういう事があるらしいです。ホントは笑い事ではない）

「敵がドンドン出てくるよ」

「きりが無いわ」

「FREETA—DOOOOOP！」

「そっちに、回り込んだぞ」

「右腕が吹っ飛んだ」

「指がしびれるよう...」

「FREETA—DOOOOOP！」

「喚くなァアアアア！」

二〇分後...

そこにタルサリスの姿は無かった。戦場になお留まっていたのは四機のバトラスであった。彼らは勝利したのである。たった四機で約一〇〇機のタルサリスを撃破。または退散させたのである。

しかし、四機のバトラスも無残な姿へと変わり果てていた。どの機体も手足の一本は失い、ラバロイド装甲も半分が欠落しカメレオンモードは機能しなくなっている。

これ以上戦えば、良的になるだけである。

パイロット達も意識が朦朧としていた。

しかしながら、戦闘はこれで終了したわけではなかった。

「退避なさい。今度こそ無謀だわ」

小早川が諭すように言った。

敵の新手が迫っていた。先刻の戦闘で敵が退散したのも、援軍との合流を想定したからなのかもしれない。

「ダメだ！ 撤退は出来ないぜ！」

猛が言い放った。

「うん！」

残りの三人も口を揃えて同意した。

「何を言っているの！ ダメよ、逃げなくては。今の状態では、この半分の敵にだってかないっこないわ。今度こそ無駄死によ」

「街を見捨てて逃げるなんて出来るか！ 一機でも多くの敵を道連れにして死んでやる。逃げてたまるか！」

既にスクリーンには、先ほどよりも巨大で濃い蚊柱が映っていた。

「これは命令よ！ 撤退なさい！」

「嫌だ。俺は戦うぞ。戦って死ぬんだ！死ぬまで戦うんだ！」

猛は錯乱状態にあった（のか？）

「なんて駄々っ子なの！ いい加減になさい！」

小早川も、苛立ちを隠せなくなっていた。

そして、

「FREETA—DOOOOOP！」

皆、訳が分からなくなったその時、全員のスピーカーから聞き覚えのない声で通信が来た。

「聞こえるか？ バトラスV。撤退の必要は無い。現状で待機しろ」

静かで穏やかな口調だった。だが、何か鋼の芯のようなものが感じられた。

「だ、誰だ？ 何処にいる？」

「ちょっと待って、今、識別信号をキャッチしたわ。でも、高度五〇〇〇〇メートル。速度、マッハ7。弾道飛行でもしてきたっていうの？」

小早川も混乱していた。

そうしている間にも敵が接近していた。約一五〇機のタルサリスは左右両サイドに展開しワイドアタックの態勢をとっていた。

(来るッ！)

心臓が見えない豪腕で握りしめられたように感じ、全身が硬直した。

(逃げろ)

猛はそう叫びそうになった。

その刹那。

目前に迫っていたタルサリスの群れが一斉に爆発、四散していた。そして、猛が何が起きたのか認識するより早く、天の彼方から空を引き裂くような超音速の矢が何本、何十本となく降ってきて、猛の眼前を過ぎて行った。雪崩の様な轟音と共に...

一撃離脱攻撃なのだが、猛の知る如何なるそれよりも壮大で鮮やかだった。この攻撃でタルサリスの半数が撃墜されていた。

急降下していった鏃の群れは、グンと反転すると駆け上がってくる。

それから、ブンと唸るように一瞬震えると、左右の縁が腕を開くように広がりだした。それは左右一对の翼なのが分かる。

さらにその翼が剥がれるように上下に二分された。

その姿はエンテ式複葉機だった(某有名SF映画に出てくるアレです。ちなみにタルサリスのモデルも、同じ映画に出てくる悪の側の戦闘機)

「無線封鎖解除。全梯団、散開。敵機確認のうえ、各小隊毎に各個撃破」

先刻の謎の声が、鋭く命令した。

そうしたら、一斉に

「Ypaaaaaa！！」

の声が応えた。

「????？」

猛は一瞬、気絶した。

「いんふおめーしょんめっせーじ。識別信号応答アリ。味方機ト確認」

人工知能君が報告してきた。彼も落ち着いたようだった。

スクリーンを見ると友軍であることを示す緑色の光で埋め尽くされていた。

「あの連中、強いのか？」

何気なく言ったら

「聞こえるか、バトラスV？」

謎の声の主から、再度、通信がきた。名指ししている。

「.....」

聞こえちゃったのか。猛はビビった。

「応答しろ！」

こうなれば、答えるしかない。

「は、はい。こちらグレート・バトラスです」

「よく聞け。最後まで持ち場を守ろうとしたことは褒めてやる。だが、貴様も防衛隊の隊員なら、銃後に守るべき者がいるのなら、軽々しく死ぬなどという言葉は口にするな！」

「！」

更にこう続いた。

「死んでしまえば、もう誰一人も守ることは出来ないぞ。どんな時でも冷静さを失うな」

落ち着き払ったその声は自信に満ち溢れており、聞く者に拒絶することを許さない威厳を兼ね備えていた。

だが、この状況をどう打開するのだろうか？と猛は思った。勿論、口には出さなかった。

エンテ式複葉機の集団は、真正面からタルサリスの中に突っ込んでいった。

両者は互いに火力の応酬をしながら、チキンレースの如く接近し、サッとすれ違う。その直後、タルサリスは間髪入れずに反転した。エンテ式複葉機の方も遅れてはいなかった。機首を上げ、どんどん上向き、真上を越えて倒れつつ、機体をひねる、という一連の動作をバレリーナのダンスのように軽やかに為していた。うっとり見蕩れてしまいそうだ。

そして、タルサリスより一瞬早く、エンテ式複葉機から光条が迸り、タルサリスに叩き込まれる。タルサリスは、あっという間に四散した。

「早エエ…」

他に表現の仕方が無かった。

そこ、ここで、タルサリスが撃墜されていた。エンテ式複葉機達は手を休めることをせず、すぐに次の標的を探し当てていた。

やはり、正面からの撃ち合いになる。

この時、エンテ式複葉機は信じられない動きをした。斜め右下方向にスライドした。旋回ではない。機首は真ん前を向いたままだ（通常、航空機は、進行方向と機首の向く方向は一致している）

エンテ式複葉機は、巧みに上に、下に、斜めにスライドして敵の攻撃を躲し、そうし続けるうちに、横合いから味方機が攻撃をしてしとめた。

「凄いぞォ！」

あのエンテ式複葉機は、とんでもない性能を秘めているようだった。

猛は慌てて人工知能君にデータリンクをサーチさせた。

スクリーンの片隅にウィンドウが開き、情報諸元が表示された。

“四式攻撃戦闘機。通称、疾風 {ハヤテ} 従来の有翼機には不可能な運動性能を有する。その優れたスマルカメント性能から、オールラウンドベクターシステムに対する、航空力学の側からの逆襲と評されている。

武装は、戦闘型は二〇耗リニアカノンを二門。初速は秒速三六〇〇メートル。弾丸は優化プルトリウム弾を使用。攻撃型は誘導爆弾四発を胴体に収納可能”

リニアカノンを装備という項目が猛の注意を惹いた。

ビーム兵器ではなく実弾を使用している。ということは、射撃に際して、見越し角を考慮しな

くてはならない。

今、眼前で疾風は実に簡単そうに弾を命中させ、タルサリスを喰らいまくっている。あの複雑な機動飛行をするタルサリスにである。

あの疾風のパイロット達は相当の手練れだ。真のプロフェッショナルだ。

猛は興奮した。

※ ※ ※

そして、興奮している間に、この空域の戦闘は終局を迎えつつあった。敵の編隊に対し一撃離脱を敢行し、その段階で敵の半数を屠り、更に勢いに乗じ残余を掃討してしまった。こちらの損害は皆無であった。

こうして、疾風からなる部隊は第一戦を勝利した。そして、態勢を整えると、次なる敵へと向かい進軍を再開した。

ちなみにバトラスVは目立った戦果を上げていなかった。要するに新顔の戦闘機の戦い振りに魅せられていた...というより、圧倒され、エキサイトさせられてもいた。

彼らにとって、味方の優勢のうちに推移した初めての戦闘であった。

続いて接近してきた敵の第二集団は、第一集団が交戦すると同時に、こちらに急行して来たようであった。結果として第二集団は緒戦に勝利していき上がる疾風部隊と、独力で衝突する事になった。

この戦いも一方的なものであった。緑色の雲は赤い霧に接触するや一気呵成に侵食し、これを雲霧消散させてしまった。

敵の第二集団も壊滅した。猛達はまたもギャラリーのような立場で観戦していた。見蕩れていた。

残る敵の集団はこの二個部隊の敗退を感知するや退却にかかった。それを猛追した疾風部隊は敵に少なからず被害を与え、帰還の途についたのだった。

凱旋である。

「驚いたぜ」

夕暮れの中、カメレオンモードを解除した疾風の勇姿を見ながら、改めて猛は感慨をこぼした。

「たいしたもんだね」

無線から一矢の声が聞こえた。冷静でもものに同じない一矢も、いささか驚かされたようであった。自分たちは今日、三倍は優勢な敵が敗退する様を目の当たりにしたのだ。それも苦戦の連続ではなく、常に主導権を握った形で戦闘が推移したのだ。まるで魔法でも見せられた様であった。そのどれもが突如あらわれた正体不明の編隊指揮官の才覚によるものであった。

「一体、誰なんだ」

猛が編隊の先頭を進む隊長機の姿をスクリーン上で見ながら呟いた。（この集団はプロテクトが掛かっていて、アノテーションが読めないのだ）

※ ※ ※

横須賀基地の航空隊施設は久々にごった返していた。疾風の大編隊が押し寄せて来たからである。

隊長機は最後に着陸した。全機が着陸するのを見守るかの様に上空で旋回していた。もちろん、バトラスVが着陸する時も...

隊長機が着陸すると猛達は駆け寄っていった。従来の基地の要員達もこの英雄を一目見ようと集まってきた。

「.....」

コクピットから一人の男が姿を現した。

ヘルメットを取ると若く精悍な顔が見えた。

彼はゆっくりと地面に降り立った。人だかりには些かも動じていないようだった。

それでも、人々の視線に応えるかの如く告げた。

「自分は航空防衛隊〇六四戦闘航空団司令、土井垣亘だ」

と名乗った。

(!!)

全員がどよめいた。

“〇六四戦闘航空団”

皆がこの意味するところを知っていた。驚愕し呆然とすらなった。

その男、土井垣は更に告げた。

本日付で第二四四戦闘航空団司令に任命されたと...

誰も言葉が無かった。このたった一人に圧倒されていた。

「敬礼はどうしたかッ！」

土井垣はそんな周囲を一喝した。

全員が慌てて、敬礼した。

それを確認すると土井垣はサングラスを掛け悠然と歩き出した。

途中、サングラスの奥で、彼が猛達四人に目を留めたように思えたが、しかしそれも一瞬であった。

皆、歩を進めていく彼の後ろ姿を見送っていた。

「ねえ、ねえ？ あの人が僕達の新しい隊長なの？」

一人だけ何も知らない者がいた。将である。

彼は、猛の傍らでそう尋ねた。

「ああ、そうだ。そうだとも...」

猛はそう答えたが、上の空だった。そして、答えながら思った。

(どえらいことになりやがった)

...と。

第7章

第七章 子供は、お家に帰りなさい。

「兄ちゃん、兄ちゃん、僕、やったよ」

次の日、朝食の後、部屋へ戻る途中、将が興奮気味の口調で猛に話しかけてきた。

「やったって、何をだよ？」

「シミュレーターで一度に二機、敵を撃ち落としたりしたよ。この前の兄ちゃんみたいにさ」

「なんだって？ お前、いつの間にそんな事...」

「毎朝、早起きして練習してたんだ」

「いつも、朝からゴソゴソやってるとしたら、そんな事してたのか」

「今日も朝、プライムのコクピットでやってたんだよ。そしたら出来たんだ」

「ウツクな、お前。俺だって、この前の事は、マグレだと思ってるのに、お前に出来るもんか」

「じゃあ、後で画像を配信するから見てよね」

「やらせのCGだろ、それ」

「それじゃ、今度、実戦で証明してあげるよ」

「フン、忘れるなよ」

「ところでさ、質問があるんだけど」

「何だよ？」

「ソーティって何の事？」

「ああ、簡単に言うと、“延べ出撃数”って意味だな。タルサリスが一〇〇機、一度に攻めてきたら一〇〇ソーティ。五〇機で二回、攻めてきても一〇〇ソーティだ」

「じゃあ、見越し角って何？」

「動いている物体を射撃する時に考えなきゃならない事だ。例えば、クレイ射撃で、お皿が何がしかのスピードで飛んでいるとするよな。この時、お皿の真ん中に狙いをつけて撃ったら、弾がお皿の位置に到達するまでに、お皿は何がしかの距離を動くわけだ。最悪の場合、弾は外れるわけだ。なので、照準する時、お皿が今ある位置より少し前の方を狙うわけだ。こうして、照準をズらすわけだ。このズレを見越し角というわけだ。未来位置を予測するとも言うかな。レーザー光線ではこんな事、無視出来るんだけどな。なにせ秒速三〇万キロメートルだからな。見越し角はゼロと同じだ。撃つと同時に命中だぜ」

「フーン、じゃあさ、バトラスがレーザーを避けたり、躲したりするのは、インチキなんだね」

「うーん、それについてはフォロー出来ないな。ま、気にしないことだ」

「それに、本当はさ、ビームって目に見えないもんなんじゃないの？」

「いや、それについては、超電磁レーザーは空気を励起発光させるという設定で、逃げ道があるようだ」

「フーン、でも、宇宙に行ったらアウトじゃん」

「まァ、話はそこまで行かないらしいなァ」

「それと、失速寸前状態って、難しい漢字を使っているけど、何の事なの？」

「ああ、それはポストストゥール状態って意味だな」

「なるほど。それにしても、チョットばかり専門用語を仕入れたからって、アン、イーにバラまくのは迷惑だよな」

「まったくだ」

「最後の質問。第〇六四戦闘航空団って、何？」

「なんだ、そんな事も知らないのか」

猛は呆れた様子で言った。

「うん、知らないよ。読者が知らないものは僕も知らないよ」

「何だって。不便なキャラクターだな、お前は」

「知らないものは知らないよ。とにかく、皆、事情が飲みこめなくて、欲求不満がたまっているんだ。知ってるなら教えてよ」

「なにが欲求不満だ、偉そうに。じゃあ、教えてやるから、耳の穴かっぽじってよく聞けよ」

「チョット待って。耳搔きを持って来るから」

「言葉のあやだよ... 今、シベリアとベーリング海で国連軍と異星人が戦闘しているのは知っているよな」

「うん。そういえば、この本の最初の方にそんな事が書いてあったような気がするヨ」

「とにかく、シベリア、ベーリング方面はこの戦争の激戦区の一つなんだ。それでだ、日本の航空防衛隊からも部隊が派遣されて、戦っているんだよ。第〇六四戦闘航空団っていうのは、その中でも精鋭部隊として有名なんだゾ。ロシア軍やアメリカ軍にも一目置かれているんだ。航空総隊きってのエース部隊だ。ニュースサイトにも、さんざん出てるじゃないか」

「ヘー」

「なにが、ヘーだ。俺達はそのエリート部隊と一緒に部隊に編入されたんだぜ。ま、政府も首都防空任務に本腰を入れたって事だな」　そこで猛は胸をグッと反らすと、また続けた。「だから、オレ様の様な優秀な人材が、集められる事になったんだ」

すると、背後から意地の悪い声かけられた。

「フーン、猛、あんたって優秀な人材だったんだ？　初耳だわ」

「何だと」

ムツとして猛が振り向くと、いつの間にか背後に舞がいて、チシャ猫笑いをして立っていた。その隣には小早川少尉もいた。彼女もクスクスと笑っている。

「アッ... おはようございます。少尉」

猛はそれに気付くと慌てて敬礼した。将もそれに倣う。猛は何故かとても緊張していた。それから、自分をあざ笑った舞に食ってかかった。

「なんだよ！　舞、何がおかしいんだ」

「だって、あんたの口から、優秀な人材なんて言葉が出たら誰だって笑うわよ」

「なんだと。じゃあ、オレが出来ない人材だとでも言うのか」

「では、お伺いしますけど。ベーリング海ってどこにあるの？　おおよその位置を言ってみてヨ

」

「ぐっ…」

猛は言葉に詰まった。実はよく知らなかったのである。

「ウフフフ」

傍で見ていた小早川が小声で笑った。

「あ〜、少尉まで笑った」

猛が赤面し恨めしそうな声で言った。

「ごめんなさい。そんなんじゃないのよ」

「ヤーイ、笑われた。はっずかしィ」

舞が冷やかした。

「舞、憶えてろよ」

猛が言った。

「そんなに怒らないで、新隊長もきっと、あなた達には期待してるわよ。バトラスVのメインパイロットじゃない」

「あっ、その新隊長っていえば、朝、聞いたんだけど」

「また、ゴシップを仕入れてきたのか。やめろよ、少尉の前で」

舞にはおしゃべり仲間がいるらしい。

「だってエ、聞いて、聞いて。あの新隊長、着任早々、本部と何やら大ゲンカしたみたいよォ」

「何！ ケンカだって。何が原因でモメたんだ」

「ウ〜ン、それがよく分かんないのよォ。でも、兎に角、凄かったらしいわよ。最後には凄まじい見脈で怒鳴りだしたんだって。しかも、相手が誰だと思う。航空総隊の総監」

「なんだってエ、本当かよ、それ」

これには猛も驚きを隠せなかった。

「総監って偉いんでしょう」

将が訊いた。

「偉すぎだぜ」

「さっすが、エリート部隊の隊長だけの事はあるわね」

舞は興奮して鼻息荒く言った。

「だから、エリートなの？」

将が言った。そののんびりした口調は、事態をしっかりと把握していない様だった。

「感心してる場合か。やれやれ、どうやら、とんでもない人の子分にされちまったようだなァ」

トホホと消沈した感じで猛は言った。

「ウワサはウワサ、大丈夫よ。新隊長の事は私もよく知らないけど、確かに厳しい人だろうと思うわ、判断は確かなはずよ。指揮官として信頼して良いんじゃないかしら」

小早川が二人を諭す様に言った。

チャイムがなって放送が告げられた。猛、一矢、舞、そして小早川の四人に集合を命令するものだった。

「なんだァ、将の名前が無いぞ」

「ラッキー。みんな、頑張ってるエ」

「将、バトラスの整備を済ませとけよ」

猛は不服そうに将に言い残すと、舞と小早川に続いて足早に歩き出していた。

後には、将が取り残された。

「猛兄ちゃん、小早川少尉の前だと、なんだか、照れてる様に見えたぞ。笑われた時も慌ててたし。もしかして、一目惚れしてるのかなァ。アハハハハ」

猛の姿が見えなくなってから、将は一人でうそぶいた。それからまた独り言を言った。

「何で、僕だけ呼ばれなかったんだろ...」

※ ※ ※

パイロットのブリーフィングルームは、出撃前の作戦説明が行われる部屋である。関東地方の地形が書かれた透明のボードが奥にある。その正面にパイロットスーツを着た男たちが席についていた。不敵な面構えとは、こういう連中の事を指すのだろうと思った。五〇名以上いるだろうか。

一矢もその中にいた。ずいぶんと頼りなく見えて、浮いてるかな？と思った。どう考えても、自分だけ不釣り合いだ。

彼らの階級章を見て、全員が士官である事を見て取った。彼の方もチラリと見られた様だった。

全パイロットが今、この部屋に集合しているのだろう。

以前とは大違いであった。今までは、パイロットは一矢達、バトラスのパイロットを含めても、二〇名に満たなかった。

昨日の夜はベッドの中で、着任したあの男は、どの様な人物なのだろうかと考え続けていた。無駄だと分かっている頭が考えようとするのを止められなかった。精鋭部隊の隊長。空軍が誇るエースパイロット。そして、出所不明のウワサのとおりなら、航空総隊本部と大喧嘩をやらかす男でもある。部下にはどの様に接するのだろうか。

ボード横のドアが開いて二人の人物が入ってきた。そのうちの一人が土井垣司令だった。サングラスをしていた。

すぐさま全員が起立し、敬礼をした。一矢もそれに倣う。

「全員、座ってよろしい」

土井垣は軽く敬礼を返し、そう告げた。皆、着席した。

ようやく、新司令官をじっくり見ることが出来た。そうはいっても、体格が良くて身なりの良い人物としか言い様が無い。威厳がある様に見えるが、精鋭部隊の隊長と知らなければそう感じたかどうかは自信がなかった。サングラスをしているので、肝心の表情がよく分からない。

「異動の準備で忙しいかと思うが、新部隊編成にあたり挨拶をさせてもらう。自分がこの度、第二四四戦闘航空団の司令官を務める土井垣亘だ。こちらは副司令の島勝武中佐だ」

土井垣と共に入室して来た男であった。彼は短く敬礼した。

「第〇六四航空団に所属していた者達はオレの事はよく知っていると思うが、今回、第二四四航

空団の編成にあたり、第〇六四航空団の他に第一〇一中隊、第一特殊戦闘機小隊が編入された。合計した戦力は約八十四機」

一瞬、どよめきが起こった。一航空団にしては大規模である。

だが、土井垣は気にも留めずに話し続けた。

「新部隊編成の目的は首都圏一帯の防空態勢の強化である。我々の隊は首都圏の外縁に位置し、迎撃に適した場所にある。戦力も最大規模である。これだけの戦力を託されるのも、統合幕僚本部、ひいては銃後の市民の期待の現れだ。この事は肝に銘じて欲しい。そして、我々の手で関東の空を守るのだ」

続いて副隊長の島中佐から部隊編成の説明があった。

第二四四戦闘航空団

第一飛行隊、ブリーズ {そよかぜ}

第二飛行隊、ゲイル {突風}

第三飛行隊、クレセント {三日月}

第四七独立中隊、バトラスV

説明のなかで一矢達が、第一特殊戦闘機小隊から第四七独立中隊に編成替えされ、更に戦隊本部の指揮下に置かれる事が言い渡された。土井垣隊長の直属となったのである。一矢達の直属の上官が土井垣になったというわけである。また、哨戒偵察任務の為、哨戒機P7-Cキャッツアイが配属されている事も告げられ、その部隊長が小早川少尉であった。唯一の女性の隊長であったが、この任命に対して彼女に物怖じした様子は無かった。

話を聞きながら周囲をみるにつけ、一矢は自分達がとんでもないエリート部隊に編入されてしまったと思っていた。

(頭痛ッ！)

おまけに、この部隊は首都防衛のエース、最後の切り札なのだ。すごい重責を担わされているのだ。

一通りの説明が終了すると再び、土井垣司令が皆の前に立った。

「さっそくだが、今より、特別訓練を始める。吉原猛空曹長！」

凜と響く声が事もあろうに兄の名を呼んだ。

「ハッ、はい。自分であります」

兄は、たどたどしい口調で答えて起立する。敬語は使い慣れていないのだ。チラとその隣の舞を見るが、彼女も表情を硬くして前を見ている。いつもならケラケラ笑いしている事だろう。

土井垣司令は、猛を見据えて言った。

「これから模擬空戦を行ってもらう...」

兄は言われるままに頷く... 何を言われているのか分かっているのだろうか？と思う。

「相手は自分が務める」

「エッ！」

なんて事だろうと一矢は思った。

しかし...

(自分じゃなくて、ラッキー)

それが本音だった。

※ ※ ※

F A-4 戦闘機。通称、疾風は、国産四代目の戦闘攻撃機であった。エンテ式複葉機を象徴する4枚の主翼、機首にある2枚の前尾翼。この6枚が独立して遊動し、複雑な機動性を発揮する。その運動性能は昨日の戦闘の時に、一瞬だけ垣間見せていたが、ラフライダーの比ではなかった。恐らく地球製の戦闘機の中では、最高の部類に入るだろう。それにパイロットが土井垣司令本人ときたもんだ。

「空曹長。こりゃ大事だね」

駐機場で整備班長が声をかけてきた。バトラスを昨夜のうちに整備点検してくれていたらしい。

「整備ご苦労さまでした」

猛は整備主任に敬礼してから、搭乗用のハッチに向かった。キチンと礼を述べるのはパイロットのたしなみである。

「大丈夫かい、兄さん」

「ヤッホー、頑張って」

一矢は様子を見に来ている。舞は茶化しに来ている。

「うるさいぞ、舞。お前、自分が当たらなかったからって、正直に喜ぶなよ」

「いいえ、アンタが当たって、嬉しいのォ」

「畜生」

猛は悔しそうな目を見ると、バトラスのコクピットにもぐりこもうとした。

「頑張らなきゃ、ダメよォ。小早川少尉も見てるからねエ」

ハッチの閉じ際にまたもや舞の野次が入った。

「う、うるさい」

猛はそう叫んで、ボタンとハッチを閉じた。

数分後、基地の講堂に人だかりが出来ていた。大スクリーンがあるこの部屋に基地中の人間が集まっているらしかった。その中には一矢と舞の姿もあった。そりゃ、そうだ。

「吉原猛、横須賀の蒼天に死すなんてね」

舞はふざけて言った。

「真面目にやってよ、舞。これは大事な一戦だよ」

「ヘッ、何が大事なのヨ」

「まァ、見てみようよ」

この時一矢は、周囲の視線がチラチラと散発的に自分達に注がれている事に、気付いていた。その視線は敵意にあふれているわけではないが、好意があるわけでもなかった。もちろん、冷やかしかでもない。

一矢は直感的に悟っていた。噂の新兵器バトラスの操縦者としての自分達が、歴戦の勇者達の興味を惹いているのだ。これから実戦を共にし、生死の境をくぐるパートナーとして相応しいか

否か、自分達の実力を見定めてくれようとしているのだと思った。

それは敵視するでもなく、邪視するでもなく、唯々彼等の実力を推し量ろうとする冷徹な視線であった。そして、その評価の答えがこの模擬戦でだされるのだ。土井垣が猛を相手に指定したのも、そのへんが理由だろう。

「頼むよ、兄さん」

一矢は兄の健闘を祈らずにはいられなかった。

超電磁スラスタ特有の重低音を響かせてP7-Cが飛び立った。搭乗者は小早川少尉以下、四名。この戦闘の判定と記録撮影を行う。基地のスクリーンにはP7-Cからの映像が中継されてくるのだ。

続く重低音に窓の外を見やるとFA-4が離陸を行った。

「なぬッ！」

その離陸の様子に一矢は息を飲んだ。疾風はほんの十数メートル滑走したかと思うと、まさに舞い上がっていった。ほとんど垂直に上昇していった。素晴らしいSTOL機だった。そして、点のようになり視界から消えた。

ヴォヴォヴォヴォ...

続いて超電磁スラスタの重低音をひときわ大きくうならせて、銀の巨人が天へと舞って行った。グレート・バトラスである

「！！！」

周囲のベテランパイロット達が息を飲んでどよめくのを一矢は聞いた。彼にとっては見なれたバトラスだが、この人達にとっては始めて見る巨大人型ロボットなのだ。それが現実存在し、空を飛ぶとなれば、どよめきの一つも起きるだろう。

両機はP7-Cの先導で洋上へと飛行していた。訓練空域は洋上に設定されている。到達するまでの数分間はたちまち過ぎていった。

設定空域は上下高度三〇〇〇メートルから二〇〇〇〇メートル、五〇キロ四方の広大な空間で、これが闘技場である。戦闘は両機が訓練空域の端と端で向かいあった瞬間にスタートする。

既に両者は高度五〇〇〇メートルで開始位置についた様であった。やがて、P7-Cの観測員は望遠スコープで両機を捕らえた。すでに両機は加速して接近しつつあった。その様子が中継され基地の画像端末に投影された。

グレート・バトラスも疾風も、カメレオンモードで空に溶け込む。レーダーからの情報には信頼性に難があった。粒子フィルターだけが頼りだ。

もっとも、これは猛と土井垣の二人だけの話で、実際はカメレオンモードは作動していない。二人だけがヴァーチャルな映像を視ているのだ。

両機は接近を続けていた。一矢が思うに、すでに二人は互いの位置を把握しているはずであった。

映像が切り換わった。画面が左右に分割された。どうやら両機のコックピットのメインスクリーンより、各々が外部を望見した映像が映し出されているらしい。パイロット視線だ。左画面は猛の視線の映像で、右のが土井垣のようだ。

コクピットでのスクリーンには赤い靄が立ち込めている。

前述のように、彼らは実機を操りつつも、索敵情報や攻撃の効果については、コンピューター演算によるバーチャルな情報を与えられている。この赤いケロ粒子もバーチャルに再現されたものであり、実際のそこは晴天である。

互いのスクリーンのど真ん中に紫色に輝く点が見えた。粒子フィルターが捕捉した敵 {アグレッサー} だ。

どちらも相手を確認していた。

両者は真正面から向き合ったまま接近していた。どんどん距離が詰まってゆく。疾風のモニターに映るバトラスから光の糸が伸びた。超電磁レーザーを撃ってきたのだ。閃光が空を斬るように過ぎていく。

「すごい」

一矢は猛の放った超電磁レーザーが、思いのほか疾風の近くをよぎったのを見て叫んだ。相互の接近速度が速すぎて、こういう時のシュートの精度は低いものなのだ。だが、今の射撃は希に見る良い精度で狙いが付けられていた。

「ハウッ」

新規に着任したパイロット達も感嘆していた。

すれ違った二機は反転する。どちらも一瞬。これにもパイロット達は感嘆の声をあげた。バトラスの機動性が垣間見えた瞬間だ。

両者は再度、接近して行く。スクリーン上の機影を示す光点は、輝きと大きさと鮮明さを増してくる。今度は疾風がリニアガンを放った。連射した。バトラスもそれに応える様に撃ち返す。互いの銃火が相手の機体をかすめる。だが、ヒットはしない。乱射を続ける双方の姿はどんどんスクリーン上に大きく映ってきた。

「このままじゃ、衝突するぞ」

誰かが叫んだ。

一矢もそれを予測していた。先に引くような兄ではないと思う。だが、あの隊長も回避行動を取るとは思えなかった。

「危ない」

誰かが叫んだ。

左右の両画面に互いの機影が大きく映し出され、画面が覆い尽くされたと思った次の瞬間、機影は流れ去り衝撃で画面が揺れた。互いの発する衝撃波で、激しく振動したのだ。本物の衝撃... よほどニアミスをしていたのだ。

「無茶な奴だな。アイツ、隊長相手に良い度胸だぜ」

そんな声が聞こえてきた。

一矢は画面に注意を戻す。画面には、まさに旋回する機体から見た展望が写し出されていた。太陽が眼下に滑り、頭上に海が広がる異様な光景が映り、一瞬にして機体がロールして、ねじられて、元に戻る。これだけの事が瞬時になされる。そして眼前には同じく旋回を終えた相手の姿が映っている。

ほんの一瞬の動き。でも、この時のgは本物だ。

一矢は、またここで、すれ違いをして反転を繰り返しては膠着状態になるように思えた。それにしてもラフライダーを相手にした時は、旋回の速さではバトラスに分があったのに、疾風は全然ひけをとらない。凄い機体だった。

「頼むよ。兄さん」

先述したように、おそらく司令は、この一戦でバトラス部隊の評価をするだろう。そして、そのパイロットである自分達の評価も。自分達の浮沈がかかっていると思うと、兄に願わずにはいられなかった。

※ ※ ※

戦闘機のパイロットは戦闘中に速度を下げたい時、普通はブレーキを使わない。そうして減速すると、再び元のスピードに戻すのに時間と燃料を必要とするからである。

では、どうやってスピードを下げるのか？というと、上昇するのである。上昇し、重力に逆らって飛行する事で勢いを失い、スピードダウンする。

逆にスピードを上げたい時は降下する。その時は、重力に引っ張られて勢いがつき、スピードアップする。

戦闘機のパイロットはこうしてスピードと高度を両替しながら飛行する。

では、何故スピードを下げるのか？と言うと、敵機を自分の前方へ追いやるためである。敵機を自分の前方へ追いやったら、降下してスピードをアップし敵機の背後に食らいつくのである。そして、攻撃し撃墜するのだ。

空中戦では敵を攻撃する際、後ろから狙撃するのが最善とされている。敵の攻撃は受けなくて安全に攻撃出来るからだ。

ところで、上手く相手を自分の前方に追いやっても、敵が自分の真正面に位置している事は滅多にない。左右、何れかに偏っているはずだ。だから、上昇降下する時に、カーブしながら上昇降下をする事になる。こういう理由で戦闘機は戦闘中、クネクネとうねった曲線、或いは、螺旋を描いて飛行する傾向を取る。そして、敵も此方を前に追い出そうと考えるので、これもうねった飛行をする。こうして二筋の螺旋が絡み合う。

二機の飛行機が接近交差しは、遠ざかり、また交差し、遠ざかる...その繰り返しの様は鉄の開閉を連想させるかもしれない。

※ ※ ※

模擬戦は一矢の予想通り、しばし旋回の応酬が繰り返された。両機の軌跡をたどれば、絡み合う二本の螺旋が延々と描けるだろう。

だが、それも二〜三〇秒の事であった。新たな一手を講じてきたのはやはり土井垣の方であった。

土井垣は旋回運動を中止し、機体をひねり込むと急降下して離脱を試みた。加速と重力の力で一気に速度が上がる。無論、バトラスもそれを追う。

バトラスは疾風に大きく引き離されていく。バトラスはフル加速して食らいつこうとした。敵が後ろを見せたのだ。好機である。

この時、一矢は悪い予感を感じたが、自分が兄の立場でもこうするしかなかっただろう。

「アッ」

その時の画面の変化に一矢は眼を疑った。一矢が見ていたのはバトラスのモニターが中継されている方だった。猛の視点である。そこにはバトラスが食らいついた疾風の後姿が朧気に映っている。

土井垣の機体は垂直にまで傾いた。そしてスライドする様に落下した、かと思うと、かき消す様に消えた。

消えたのだ。見えなくなった！

一矢は、（おそらく、猛も）愕然となった。

だが、真に驚くのは、次の瞬間であった。

人工知能君が

「FREETA-DOOOOOP」

と悲鳴をあげる。

消失したはずの疾風がバトラスの後方にいた。真後ろにいた。

「そ、そんな...」

一矢は自覚しないまま呟いていた。

通常では考えられない現象だった。一瞬の降下の後、疾風がバトラスの背中を取ったのだ。レポートしたみたいだった。

そして、すかさず、リニアガンを斉射した。

...

「マイク、インディア」

猛の音がした。敗北を認める宣告。震えた声だった。

模擬空戦は終了した。

突如、落下より鋭い急降下をして相手の視界から逃れ、そこから一転して急上昇、相手の背後を取る！

これこそ、零戦、隼爾来の伝統の奥義“木の葉落とし”であった。

「...」

一矢は無言のまま今の一戦を振り返った。兄としてはあまり良いところが無く終わってしまった。とはいえ、バレルロールでは良く食い下がったと思えた。最後に不意をつかれた時の反応が遅れていた。コンディションが悪かったのかもしれない。

「けっこうやるなァ」

隣から声が聞こえた。パイロット達が話し込んでいた。

「司令をあそこまで、手こずらせるヤツはめったにいないぜ」

朗報だった。

この時、一矢は舞と将の二人の姿が見えない事に気付いていなかった。

「チクショウ。やられたッ！」

グレート・バトラスのコクピットで猛は呻くように言葉を吐き出した。土井垣が最後に見せた

離れ業は、猛の乏しい知識では予測不能のものであった。しかし兎に角、負けは、負けだ。

突然、疾風の機影をロストした（見失った）と思ったら背後をとられていた。恐るべきスマルカメントであった。この、ディフェンダーの死角から突如躍り出てくる、その巧妙、狡猾、そして危険な動きは、まさにペナルティエリアの暗殺者であった。気分はロナウドに出し抜かれたアジャラである。

演習は終わった。バーチャルな環境はクリアされていく。

辺りには晴天が広がった...

スクリーンには態勢を立て直し、何事も無かったかのように飛行している疾風が映っていた。あの機体の性能もさる事ながら、それを自在に使いこなす司令のテクニックもさすがであった。これぞ、ファンタジスタだ。

「だから、北の荒鷲なんだ」

言うまでもない事であった。

「グレート・バトラス、聞こえるか」

土井垣の機体から通信が入った。

「はい、聞こえます」

猛は“聞こえてるよ”と怒鳴りたい気分を我慢して平静をよそおって答えた。

「感想はどうだ」

土井垣に訊かれた。静かな口調だった。

「感想...ですか」

急には答えられない質問だった。敗北感に屈辱を感じたのは確かだが、それを答えにする事は間違っているように感じた。それとも、素直に口にすべきだろうか。

猛が答えに戸惑っていると、相手また、訊いてきた。

「では、なぜ負けたと思う」

穏やかな口調だった。とがめているようには感じられなかった。

「そ、それは...」

よく考えて見れば答えるのに難しい質問だった。不意をつかれたの一言で済む事とも思えない。

「上手く言えないか」

猛がだまっていると、また声がした。

「は、はい。申し訳ありません」

いつもの自分なら謝りはしない。だが、自然と口をついてその言葉が出ていた。

「まァ、よかろう。こういう事には正解は無い。それでも、いつも考えろ。でなければ、永遠に疾風には勝てん。バトラスを生かすも殺すもお前次第だということを忘れるな」

「は、はい」

猛は言われるまま、頷くしか無かった。しかし、妙な事に悪い気分ではなかった。今のやり取りを猛はひどく新鮮に感じていた。

「こういう人もいるんだな」

猛の素直な感想だった。

「帰投する」

土井垣の声にあわせて、キャッツアイとグレート・バトラスは疾風を追い、速度を増した。

※ ※ ※

帰投したグレート・バトラスには早速、整備員達に取り付いていく。猛が彼らにお辞儀をしてから、クルリと回れ右をして歩いて行くと、一矢の姿があった。

「おつかれ、兄さん」

猛と目が合うと、そう言いながら右手を挙げた。

「舞と将はどうしたんだ」

猛も手を挙げ返しながら問うた。

「それが、いつの間にか、いなくなっちゃったんだ」

「フン、どうせ、その辺で隠れて俺の事を笑ってやがるさ」

「多分ね」

「お前なァ」

「冗談、冗談」

ニヤニヤ笑いながら一矢は言った。

「...」

二人とも、会話に言い淀んだ。手痛い敗北だった。手も足も出せなかったのだから...

「見事にやられたネ」

一拍おくと、一矢が切り出した。

「ああ、やられた。凄いぞ、あの機体もパイロットも... タルサリスなんか目じゃねエ。お前でも一本、取られるかもな」

「きっとね」

そう言うと二人は隣の駐機場にある疾風とその主に眼をやった。機体から降り立った司令は整備員達と何やら話し込んでいた。

その時だった。背後からすごい剣幕で二人に声が掛かった。

「一矢、猛！」

驚いて振り向くと、そこには舞が立っていた。肩をいからせて、何やら凄く興奮しているようだった。

「どこ行ってたんだよ」

「チョット、一緒に来て」

猛が声をかけるのを無視して、舞は二人の腕を取ると引っ張りながら行った。

「な、なんだよ、いったい？」

だが、舞は委細かまわず二人を引っ張ってドンドン進んで行く。その行く先には土井垣司令の姿があった。

「どこ行くつもりだよ」

「いいから！」

舞はそうとう、逆上しているようだった。とにかく二人を引っ張って進んで行った。そして、土井垣が、整備員や他のスタッフと打ち合わせをしているところにラッシュした。

「司令、土井垣司令！」

舞は大声で言った。

「お、おい。舞」

猛は舞の食ってかかりそうな剣幕に、自分まで吞まれそうになった。

司令が顔をこちらに向けると舞と目が合った。舞は怖がらない。肩をいからせたまま司令を食い入るように見つめている。

「どうした」

静かな声で短く司令は言った。

「どういう事なんですか！ 一条空士長が解任なんて！ 理由を教えてください」

「解任！」

予想もしない言葉に猛と一矢が声を上げて驚いた。

「どうして、あの子が解任されるんですか」

模擬空戦の最中に将は基地の管理本部に呼び出しを受けていたのだった。舞も立会いを要請され見学の座から離れた。そして、将に言い渡されたのが解任辞令であった。舞はその場で管理本部の士官に説明を求めたが、土井垣司令の命令で至急処理せよと言われたという事しか分からなかった。だから、舞は司令のもとへと直行したのだった。

「命令に説明は無い」

土井垣は一言そう言った。その口調は冷たかった。

「納得できませんッ！」

舞は叫んだ。いまにも食ってかかりそうな勢いだ。

「彼が部隊にいる必要はない」

だが、舞は動じなかった

「自分の部隊に子供は要らないって事ですか」

舞の目は本当に険しい。

「ある意味ではそうだ」

司令は平然としていた。

「待ってくれ。将はただの子供じゃないぜ。もう充分戦える。役に立たないなんて決めつけないでくれよ」

そう言って割り込んだのは猛だった。

「あの子の技量は私達にひけをとりません。役に立たないなん事ありませんッ！」

舞は強弁した。

だが、土井垣の態度に変化は無かった。彼は短く告げた。

「これは決定事項だ。取り消しは無い」

そう言い残すと、彼はその場から去って行った。

格納庫を出て廊下で一人になったところで土井垣はつぶやいた。

「村越少尉の二の舞になってからでは遅いのだぞ」

※ ※ ※

「なんなの、あの態度」

舞が毒づいた。

「命令に説明は無いだって、何様のつもりだよ」

猛がカンカンに怒って言う。

「それよりさ、捨てられたと思うね。アイツ」

一矢がやるせなさそうに言った。

三人は将が待つ部屋へと戻った。部屋に入ると将がベッドに腰掛け、ションボリとしている姿が見えた。将は無表情に顔を上げた。自分の始末がどうなったか三人の顔を見て、一瞬で察知してしまった様だった。

「僕、もう要らないんだね」

力のない声で将は言った。悲しさのあまり自嘲気味に...微かに笑っている様に見えた。

「将。違うのよ、違うんだってば」

舞はそう言うのを引き寄せ力いっぱい抱きしめた。一矢も猛も将にかける言葉も無く、その光景を黙って見ているしかなかった。少しだけ、皆の目が赤らんでいる様に見えた。

それから、四人は将の私物の荷造りをした。誰も、何も喋らなかった。喋れば何かが噴き出して止まらなくなる、そんな気持ちだった。

荷造りはたちまち終わってしまった。猛はあらためて将の全財産の少なさにため息をついた。わずかな衣服と学用品の他にはほとんど何も無かった。たった数箱のダンボールが将の全財産なのだ。確かに惨めな話ではあった。

(でも、これからは、こんな生活とはオサラバ出来るんだぜ。将)

猛は心の中で、そんな風にも考えていた。

※ ※ ※

「これ...」

「あっ」

そう言って、舞から差し出されたのはガラケーだった。

舞が上下の端を掴んで引っ張ると、そのガラケーは粘土みたいに伸びた。

「手、出して」

将が左腕を差し出すと、その伸びたガラケーが手首に巻きつけられた。

MORPHだ。

将はMORPHをまざまざと見つめた。遥が欲しがっていた...

「遥のは私が使わせてもらうから、連絡取り合おうね」

その声の優しさが、かえって淋しさを増したようにも思えた。

時は無情に過ぎていった。猛達三人は将を見送りに基地のゲートへ来ていた。

もう日が暮れかかっていた。将にとっては、最後の夕焼けであった。

「休みが取れたら会いに行くからな」

一矢が言った。

「必ず行くからな」

念押しした。

将は元気無く頷くと今度は猛の方を向いた。だが猛は、将の方を見ていなかった。将は自然に猛の視線を追っていた。

「あっ」

そこに一人の男が立っているのを見て将は声を上げていた。それは土井垣の姿だった。

土井垣はゆっくりと歩み寄ってきた。そして、将の前で立ち止まる。猛達は敬礼したが、目は明後日の方を向いていた。

「行くのか」

そう話しかけてきた。穏やかな声だった

「は、はい」将はそう答えた。「な、なんか、ご、ご用ですか」将はひどくどもりながら言った。そして俯いてしまった。

土井垣はサングラスを外すと胸ポケットにしまった。それから喋り始めた。

「命令に説明などないのだが、勘違いされたままというの、気分が悪いのでな」

彼はそう切り出した。

「お前の戦績は良く分かっているつもりだ。優秀...過ぎるな。だから、君を解任したのは、君が役に立たないとか邪魔だと思っているからではないんだ」

ハッとなって将が顔を上げた。その目が必死になって土井垣の目を見つめた。引っ込み思案の性格の将にしては珍しい行為だった。

そして、訴えた。

「じゃあ、僕をここに置いて下さい」

「それは無理だ」

「ぼ、僕がまだ子供だっておっしゃるのでしょうか。でも、僕だって戦えます。それに...」

将はいったん言いよどんだが、一気に喋った。「それに、兄ちゃん達とは家族なんです。いままで一緒に戦ってきたんです。だから一緒に居たいんです。僕一人帰るなんて嫌です。僕をここに置いて下さい」

「それは出来ない」

「どうしてですか？」

土井垣は一瞬だけ目を逸らしたが、すぐ向き直ると言った。

「今、お前が言ったとおりだ。お前はまだ十二歳だろう。十分に生きたとは言えない」

「...」

「村越少尉も、そうだった」

「...」

「俺は、女と子どもを守る。そう思って防衛隊員に志願した。女の方は強くなったがな...」

「どうしてそう考えるのですか？」

「理由なんか関係ないさ。唯、そう思うんだ。だから、訓練にも耐えられた。実戦の恐怖にも負

けなかった。これは俺の信念。自分にたてた誓いなんだ」

「...」

「そんな俺が、まだ十二歳のお前を戦場に出せると思うか？ 突撃の命令が出せると思うのか？」

「...」

「神宮寺隊長も本当はそう思っていたはずだ。とても自分を責めていたと思う。だから、あんな無茶な事をしたんだ。確かにどうしようも無かった。だが、情勢は変わったんだ。俺達が配属された。だから、お前が闘う必要なんてないんだ」

「でも、でも...」

将はなおも食い下がろうとしたいようだった。

「それに、人間ていうのは、幼い時は大人に守られて育つものだろう」

「！」

土井垣は何の気なしに言った様だったが、将には何かが心に突き刺さった様を感じられた。

「そして、自分が大人になった時、今度は自分が幼い命、弱い命を守るんだ」

命とはこうして受け継がれていくものだ。もしそうならば、誰かが守った命とはその誰かが生きたのだという証になる。そうやって命は人が生きてきたのだという証として受け継がれていくのだ。ならばそこに携わった全ての人の人生には大きな意味がある。無駄な命はひとつもない。

将が土井垣の言葉を、この様に敷衍したのはずっと後年の事であった。

「守られて、守っていく」

将は土井垣の言葉を反芻していた。

「俺はそう思っている。だから、今のお前がやらねばならない事は戦う事ではない。今、お前に必要な事は大人になる準備をする事だ。お前なら、きっと重い物を背負う時がくる。その時こそ闘え！ お前の命を犠牲にしてもだ！」

「...」

「分かるか？」

土井垣の自分を見る目を見ると何も言えなくなっていた。険しくなどない。力強さとその裏に優しさがこめられているように将には感じられた。そう感じた時、将は抗弁する事が出来なくなっていた。抗弁する事は間違っているとすら感じたのだ。

「わ、分かりました」

将はそう答えた。だが、一抹の寂しさがあるようで言葉に力は無かった。そして、また俯いてしまった。

「少し喋り過ぎたかな。頑張れよ」

土井垣はそう言って将の肩をポンとたたき歩き去った。

背後で話を聞いていた、猛、一矢、舞の三人は、その後姿に自然と敬礼をしていた。

しかし...

一条将、除隊...

これで、バトラスⅤは三人になった。
程なくして、猛達は木更津へ、移動した。

第8章

第八章 やっぱり、僕は主人公

天気は快晴だった。訓練日和だった。だが、今日の予定は訓練スケジュール調整のミーティングだった。

なのに、集合場所は屋外で駐機場脇の舗装された区画だ。

元来、管理調整の類いは苦手な猛は面倒くさい、予定を詰め込まれるのではないのか、といった悲観的観測に陥りながら、打ち合わせ場所へ向かっていた。

将が去って一週間が、過ぎていた...

そう言えば、将とは天衣無縫、自由闊達に生きてこそ男児だと語り合ったものだった。

「おっはア」

浮かれた声で舞が背後から駆け寄ってきた。

二人で並んで歩く。

「今日さ、スケジュール調整だよね？」

そう言うと、ムフフと笑いを漏らした。押さえきれなかったらしい。

「ああ、そうだ」

無愛想に猛は返事した。

「なによ、ふて腐れた顔してサ」

「フン」

「また、スケジュールを覚えるのが面倒くさいとか、雪隠詰めの生活はやだとか、後ろ向き思考にはまってたんでしょ...ホント、管理されるのが嫌い。アバウトでござるなア」

「うるさいなあ。お前だってそうだろう」

なんで、この女の言う事はいちいち、人の凶星を突くのだろう？

とは言え、舞に会うともう一つ憂鬱な事を考えねばならなかった。これは、これで、結構気になっていたのだ。

「ところで、将とは連絡取ったのか？」

「うん」

「それがさア...もう初日から朝寝坊よ。メールの返事が無いから、お婆ちゃんに電話したら、まだ起きてこないって...呆れちゃった。こっちは心配してたのに」と言うと、一息ついて「大丈夫よ。将のことは」

と言って猛に微笑んだ。

それを受けて猛もニマとなった。そして思った。

(お前の事もな... 人をからかう元気があるなら大丈夫だな)

「急ごうよ」

舞がそう言った時だった。

「ン...」

猛はハッとなった。踏み出そうとした足がピクッとだけして止まる。

不意の出来事だった。一瞬だけ日が陰った。巨大な影が頭上を通り過ぎたのだ。だが、彼は空を見ようとはしなかった。首を激しく振って周囲を見回す。

また、日が遮られた。だが、それが彼の感じた疑問の答えをくれる。

間違いない。今、通り過ぎたのは巨大な人の形をした影だ。

そう認識した。とっさの判断だった。そんなものは一つしか考えられない。

彼は顔を上げると空を睨んだ。

澄みきった青空だった。

目を凝らす！

陽炎の揺らめきのような存在があった。列を成しゆっくりと飛行していた。

ターンした。近づいてくる。揺らぎがより激しく震えながら消えていく。代わりに七色の斑の白銀のボディが現れた！

「...」

「あ、あ、バトラス」

猛に釣られて頭上を見上げていた舞が叫んだ。目を大きく見開いて息を飲む。

確かにバトラスだった。七色の斑模様の巨人。詳しく言えばプライム・バトラスだった。

バイザーを下げる。アノテーションが表示される。防衛隊の識別ナンバーがズラズラと並ぶ。

何だか分からないが、プライム・バトラスの群は、次々と舞い降りるように着陸する。そして、パイロットスーツに身を包んだ男達の中から降り立った。機体には早くも整備員達に取りついて作業を開始している。

「けっこう、良い眺めだね。バトラスがあんなに揃うとサ」

背後で声がした。

振り返ると一矢がいた。声だけで誰なのか分かっていたが...

「なるほど」

一矢が新しいプライム・バトラスを見ながら言葉を続けた。

「どうしたんだよ。何が分かったんだ」

猛が訊いた。

「バトラスの正式導入が決まったのさ。だから、二四四航空団が編成され、土井垣隊長が着任した。僕達も編入された。全てがこの為だったのさ。上層部はバトラスを中心にした部隊を編成するつもりなのさ。どうやら、僕達も数に入っているらしいよ」

「俺達には何の説明も無いじゃないか」

「関係無いさ。僕達はただの駒なんだよ。偉い人達にはネ」

「これから、どうなるんだ、オレ達」

「戦闘、戦闘、また戦闘。ひたすら戦うだけだろうね」

「チッ、なんか気にいらねエな」

「そんな事無いさ。立派な増援が着たんだ」

「分かるもんか。まだ、出来立ての新部隊なんだろ。パイロットの腕前だってアテになるのかよ。バトラスの操縦って慣れるまで時間が必要だぜ」

到着したプライム・バトラスは十五機だった。整備員達が機体に取り付くのと入れ替わりに、パイロット達が降りてきてそのまま駐機場《ハンガー》を目指して歩き出した。

連中はしかるべき階級を持ち、年齢的にも自分達より年長であるのは考えなくても分かる。静けさを保ちながらも、プレッシャーの様な気配を放っている。先日の〇六四戦闘航空団のパイロット達といい、これぞエリートだった。

足が出なかった。

誰かが背中を突ついた。

振り返ると、一矢だった。

「なんだよ」

「早く、行きなよ」

「うるさいなあ。お前、先に行けよ」

「なんで僕が！ こういう時は兄さんだよ。兄さんの方が、僕より図太いし」

「いや、お前が行け」

「嫌だよ。僕は弟だし」

「こういう時だけ、弟と言うな」

「いや、今は兄さんだよ」

手洗の回し合いに決着をつけたのは舞だった。

「なにしてるのよ！」

そう言って先に立つとスタスタと歩き出し、肩越しに言った。

「隊長が来てるわよ」

そう言われて目を向けると、土井垣の姿が見えた。

猛と一矢は慌てて舞の後ろ姿を追いかけた。追い抜く事はしなかったが...

兎に角、舞がスタスタと歩くので、オズオズと歩く猛と一矢は、離されては小走りで追いつくという事を繰り返し、集合場所へ接近した。

そこは発進準備の整った機体が待機するハンガーと呼ばれる場所である。土井垣はパイロット達と何やら話し込んでいた。後刻聞いた事だが、このパイロット達もかつては土井の部隊にいたらしかった。

残り数歩の処まで近づくと、土井垣以下、皆が三人に気が付いた。

猛は益々、ビビった。

「お待たせしました」

ビシッ

という音はしなかったが、舞はピタッ足を止めるとそう言って、キビキビと敬礼した。猛と一矢は一呼吸分遅れて敬礼した。慌てた、辿々しい動作だった。

ヒュ～

風が吹き抜けた。下生えの草が揺れた。

ビシッ！

空を切る音が聞こえてきそうな鋭い動作で、新着の面々が敬礼を返した。

猛はビビった。

続いてバイザーで十五人のアノテーションを見て更にビビった。本当に腰が抜けそうになった！

全員が北極戦線で戦果を上げたエースパイロットではないか！ 土井垣の元部下であり、飛行隊の隊長になっても可笑しくないくらいだった。

だが、土井垣はこんな経歴の持ち主達の前で、猛達に対しとんでもない発言をした。

「この十五人が、お前達の生徒だ」

ガチョーン！！！！

脳内でこの言葉が意識を揺さぶった。

「せ、せ、せ、生徒って、な、な、何を、お教えするんでしょうか??？」

ワナワナとなりながら、辛うじて猛は質問を口にした。

「そんなのバトラスの操縦に決まってるでしょう！ ポケ」

答えたのは舞だった。勘が良い、いや猛が鈍い。

「貴女がリーダーなんですね？」

そんな質問がでた。

「エ、エ、エッ... 違いますよう」

猛と一矢を後ろに従えた様に立っているのだから、そんな質問がされたのだ。

「コイツです。コイツ」

今度は舞が猛の影に隠れた。

笑いの花が咲いて緊張がほぐれた。

自己紹介を交わすうちに和やかな雰囲気にも包まれた。

だが、

「この3人のバトラスでの飛行時間は、お前達の有翼機時代より一〇倍はあるぞ」

の一言で、全員の顔付きが、変わった。

早速、訓練開始となった。（ミーティングの内容は、さっさと飛べだった）

だが、猛はほくそ笑んでいた。

（ここにも美人が... 運が向いてきたか。ヌフフフ）

実は、猛は一方的に圧倒されていたワケではなかった。

こっそりと、この来訪者達を検分していたのだ。そして、十五名のうち四人が女性だったのだ

。

しかも、美人だった！

バシッ！

いきなり後頭部に衝撃が走った。

「痛エな」

振り返ると舞がいた。タブレットで叩いたらしい。

「何すんだよ」

「今、凄く下らない妄想してたでしょ？」

「何の事だ？」

「美人が多いとか、暇な曜日とメルアドを教えて欲しいとか」

「そんな事、考えてねえよ」

「フン、どうだか」

「何で分かるんだよ！」

「あなたの思考パターンがアン、イー過ぎるのよ」

「俺がそんなアン、イーな人間に見えるのか」

「勿論」

「ふざけるな！」

その時、一矢が割って入ってきた。

「兄さんは小早川少尉一筋だもんね」

「そう、それだ！」

「どうだか」

舞はそっぽを向くと、格納庫へ足早に先行した。

(…)

ふと見ると、一矢が新着のプライム・バトラスを見上げて立ち尽くしていた。

一矢は語った。

これまでの訓練は自分達がバトラスに習熟する為のものであったが、今、この時から、訓練は新規に配属された量産型バトラス部隊の訓練が主な目的となったのだと。

※ ※ ※

バトラスの量産は現行四種類のバトラスの中で軽量小型のプライム・バトラスが採用されていた。最初に設計されたグレート・バトラスが全長三〇メートルである事に対し、プライム・バトラスは二五メートルと一回り小さかった。プライム・バトラスは四種のバトラスの中でも最後に設計された機体であり、その際、先行生産されたグレート、キング、クィーン等、三機種の実用試験の結果を勘案し、更に量産を考慮した小型化、簡易化が設計に折り込まれていた。

プライム・バトラスの量産機選定は規定の方針であった。

今回、新たに配属されたプライム・バトラスは十五機、パイロット達は皆、シミュレーター等の訓練である程度まで慣熟をしていた。これはバトラスが元来、コンボコマンドを入力して動かすメカであり、ある程度まで作業が人工知能により自律的に為されるというところにより可能となったのだ。木更津まで飛行して来たが、単に飛行するだけなら無人で事足りる部分もあるのであった。だが、この様にバトラスの動作を標準化し人工知能による自律的行動を可能せしめたのは、初期に行われたバトラス五機による度重なる動作試験とデータ集積の賜物であり、その点では将や遥も立派な貢献をしていた。

※ ※ ※

房総半島沖の海上で飛行訓練が開始された。最初は、猛、一矢、舞による模範飛行。続いて新参のパイロット達による実習が始まる。

最初は直進飛行、続いて機体の姿勢変更と旋回を繰り返す。各パイロットのイメージと実際の

動きが一致するまで、何度も繰り返す。彼らは地上でシミュレーターによる訓練を受けており、操作そのものは習得していた。しかし、当然の事ながら現場で実際に機体を動かすと、シミュレーターの合成画像上で操縦する様にはいかないのであった。まして、彼らが慣れ親しんだ従来の戦闘機とは飛行原理も操縦感覚も異なるのである。有翼機での操縦感覚が身に染み込んだ彼らには、余計、難しかったかもしれない。

「FREETA-DOOOOP！」

訓練中に安全装置が作動し、自動で姿勢制御が為され、人工智能のお世話になる者が続出した。

「ま、オレ達もそうだったよな」

猛はそんな光景を見ながら思った。

※ ※ ※

訓練はラフライダーを仮想敵とした模擬空戦に移って行った。十五名のパイロット達の機体操作は、まだ滑らかさに欠けたぎこちないものであったが、何とか各々の意図したようにバトラスを操ることが出来る様になっていた。安全装置のお世話になる者は皆無ではなかったが、装置はオフにされた。正確には教官たる猛達三名に起動の判断が任されたのである。状況を見て、遠隔操作で安全装置をオンするのだ。

一番機が空戦に突入した。猛達は遠くに位置して監視を行う。バトラスは上空六〇〇〇メートルを飛行し、仮想敵たるラフライダーは三〇〇〇メートルの低空を飛行しバトラスに迫った。

開始が宣言されてから数秒のうちにバトラスは降下を開始していた。敵を見つけたのだ。

「さすが」

スクリーンで見守りながら猛はつぶやいた。内心、驚いてさえいた。この技能に関しては、自分は彼らには及ばないと思えた。索敵は戦闘の重要な過程の一つである。と言うか、基本だ。彼らのこれまでの経験が発揮されていた。この事だけでも、自分は付け焼刃のパイロットに過ぎないという思いがした。

バトラスは獲物めがけて、まっしぐらに降下していた。ラフライダーの方は最大加速で上昇を開始した。両者は互いにメーザーを放ったが、相対速度が高く命中にはいたらなかった。だが、威嚇に過ぎないことはどちらも分かってやっているのであろう。

両機は交叉すると、どちらも反転を行った。ラフライダーは反転急降下を、バトラスは特有のロールターンで方向を変える。そして正面から向き合い、また交叉し、方向転換をする。これが繰り返される。空中戦の典型的なパターンだ。猛も経験がある。訓練でも実戦でも。

両機の航跡が二本の糸となり、樽の内面をこする様な螺旋を描きながら絡み合う。

この状況で、バトラスが敵を撃墜できないのは問題である。バトラスのロールターンはラフライダーの反転飛行より一呼吸は早く終了するはずなのだ。その性能を見込んだからこそ、主力戦闘機バトラスのはずだ。

「攻守の切り換えが遅いんだよな」

もっとも、だからこそ訓練をしているわけだ。猛はしばらく見守る事にした。一矢と舞にも動きは無い。この課題をクリアできなければバトラスの性能を一〇〇パーセント、引き出すことは

出来ないのだ。

なおも二本の螺旋が絡み合っ蒼天に模様を描いて行く。何度目の交叉だろうか、プライム・バトラスはまた、敵を捉えそこなった。

両者は再び正面から対峙した。そこでラフライダーがメーザーを放った。おそらく正確な照準はされていなかったのであろうが、バトラスにヒットした。胴体に命中し、光が反射した。まぐれ当たりだ。だが、命中であった。

「マイクアルファ！」

ラフライダーのパイロットが宣告したが、その声は戸惑い気味だった。バトラスの勝ったのだから。滅多に無い経験だった。

訓練は続行された。他の新規搭乗員達も、内容は最初の一機と同レベルであり、芳しいとは言えなかった。ラフライダーに撃墜されるバトラスが相次いだ。一方、バトラスの戦果はゼロであった。

今日の訓練は終了した。

パイロット待機室、窓から整備場の様子が見えた。急増したバトラス各機に整備員達が取りつき点検、調整の作業を行っている。

帰投後、猛はそんな光景をボンヤリと見つめていた。

「何、考えてるの？」

入り口に目をやると、小早川中尉が立っていた。

「あっ」

猛は彼女のスラリとした立ち姿に一瞬、見とれる... 細身で背が高く、背筋をまっすぐに伸ばした姿は眩しい...

「な、何も考えてないですよ。休んでただけです」

自分の今の動揺が気付かれない事を願って、適当な返事をする。全くのウソではない。

彼女は口元に笑みを浮かべた。彼に微笑んでくれたのか、あるいは嘲笑したのかも、猛にはどちらとも取れた。ともかくも、彼女は言った。

「将君のこと、考えてたんでしょ」

「え、ええ、そんなところですよ」

「いなければ、いないで、気になるものよね。今ごろ、何してるのかしらね、将君」

「そろそろ、中学の入学式があるはずですよ」

「そう言えば、そうね。でも...」

彼女はそこで言葉を切るとクククッと小さく笑った。

「な、何ですか。何がおかしいんです」

「だって、彼が中学生で、あなたは今や立派な教官じゃない」

「教官なんてガラじゃないですよ。だいたい、今日だってロクになにも教えたわけじゃないし。相手はベテランのパイロットだ。オレが指導する事なんて、そんなにないですよ」

「それは違うと思うわ。確かに彼らはベテランだけど、それは有翼機のベテランであるだけよ。バトラスでは初心者だわ」

「でも、オレはロクになにも教えてないですよ。アドバイスの一つも出来ないし」

「そんな事、気にしなくて言いと思う。ただ、色々な事をやって見せればそれで十分よ。教官の基本は、こんな事も出来るんだ...そう示して見せる事だと思うわ」

「なるほど、そうかもしれませんね」

「でもね、並のパイロットだったら、こうも素直には行かないと思うわ」

彼女はそう言うと、自分の考えを語って聞かせた。

このパイロット達は全員が、第〇六四戦闘航空団で極東戦線を戦い抜いた歴戦の猛者達である。戦闘機のパイロットとしてのキャリアは猛達を凌駕するし、彼らが単独で挙げた戦闘機の撃墜スコアは、猛達全員の戦果の合計を上回るであろう。ありていに言えば彼らは猛達より、パイロットとして経験豊富でありプロフェッショナルである。

その様な彼らであるからこそ当然プライドがある。しかし、彼らはそれを決して表には出さず、猛達の指導を受ける心づもりでいる。若年の猛達に対し対等に接するなど並の人間では出来ないことだろう。

「なるほど」

猛は相槌を打った。

「まァ、バトラスの操作に関してはあなた達の能力を認めてるって事かしら。模擬戦も悪い出来じゃ無かったし。プライドと高慢チキの違いが分かる人たちなのかもね。そんなものにこだわっていたら命を落とすって割り切ってるのよ。なかなか出来る事ではないわ。だから、さすがというわけ」

こう言って彼女は言葉を締めくくった。

猛は、ふと思った。

「こういう人達っているんだな」

昨日の模擬空戦時の土井垣とのやり取りや、将の除隊についての彼の考え方。そして、その部下である第〇六四航空団の隊員達。

(こうでなきゃ勝ち残れないよな。俺も見習おう)

こういうアドバイスをくれる小早川も、良い上官だと思う。

ところで、

(ヌフフフフ...)

二人っきりで良いムード。思わずにやけてしまう。

だが、その時！

「あっ、いたいた、何してるのよ、猛」

「猛、こんなところで油売ってたのか」

舞と博士の声がした。

「何の用だ？」

猛は不機嫌そうに言った。迷惑がっていた。いや、顔に敵意が浮かんでいる。

「フッフッフッ、ようやく新しいアクションパターンに完成のメドがたったわ」

猛のぞんざいな態度を不快に感じた様子も無く、博士は話始めた。

アクションパターン！ バトラス搭載の人工知能君に記憶させる動作プログラムの事なのだが、バトラスの操縦を司るのは詰まるところこれである。パイロットは幾つかの基本動作を、操縦時に適宜使い分けてゆく。その入力には操縦席の二つのレバーの先端にあるジョイスティックより為される。歩く、伏せる、物をつかむ、超電磁メーザーの照準に合わせ機体の向きを変える、飛行時に超電磁スラスタのベクトルを変更させて方向を転換する、等々の動作が、このプログラムにより為される。

人間の体は数百の骨と筋肉から成り立っているが、物をつかむ時、走る時など何か動作をする際、どの筋肉を進展し、あるいは緊縮させ、どの関節をどのくらい曲げるかなどとは細かく考えない。全ては人間の意識とは別の何かが執り行っている。無意識に行っていると言っても良い。だが、機械はそうはいかない。これを代行するのが人工知能君である。アクションパターンと呼ばれる幾つかの動作パターンを設定し、その組み合わせで操縦をするのだ。人は幼少時からの修練で運動能力を成熟させるが、ロボットはプログラムの改訂でこれを為す。人が失敗をするようにプログラムにもミスはある。トライアルとエラーの繰り返しで向上し精度が増してゆく。要するに試しと失敗の繰り返しの結果、成熟がもたらされるという事なのだが、対象が巨大ロボットであり人が乗っている事実が、失敗という事態をしくじったの一言ではすまなくしていたのだ...

「テメェ、今までどこに行ってやがった？」

「量産試作バトラスのロールアウトに立ち会っていたのよ。そんなことより、今制作中のアクションパターンはより、いっそう完璧だ。これによりバトラスの動作は人間以上に優雅で華麗になる。後は貴様の腕次第よ。戦闘力は倍増するぞ」

「じゃあ、お座りとチンチンでもやらせてみるか」

「バカモノ！ 人類の存亡を担う最新鋭兵器になんという事をさせるのだ。お前には、自分が人類最後の切札を駆っているという自覚が足らんわ。この天才、片貝が造った科学の結晶を操縦できる事を感謝したまえ」

「何を偉そうに。オタクの機械いじりが、深みにはまっただけじゃないのかよ。一〇〇〇億円の巨大なオモチャだろ、こんなの」

「戦局は予断をゆるさんのだ。全てはバトラスの双肩にかかっている。このバトラスこそは戦局を一変させる画期的兵器だ。必ずや人類を救い、さらに科学と芸術の融合としても歴史に残ろう。そして！設計者はこの私だ！ 今度の改装に際しても大胆な手法を取り入れてあるぞ。人工知能の認識アルゴリズムに学会ではタブーとされてきたダランベールのオペレーションを使用しておる」

博士は猛の言葉を聞いていなかった。

「...フィードバック機構はムーア関数を更に高階位で計算し従来以上の応答性を得ている...」

「ああ、そうかい」

猛はテキトーな口調で返事した。

「ところで、新部隊がラフライダーと空戦を行ったらスコアがゼロだったそうだな。オマケに撃墜までされたと聞くぞ」

「しょうがないだろ、初心者なんだから。その為に訓練してるんだ」

「それは甘いな。そう一朝一夕にバトラスの操縦が出来るものではない。この私が何故、貴様達をハナタレ小僧のころから厳しく訓練してきたのか、誰も理解していない」

「なにがハナタレ小僧だ。このマッドサイエンティスト」

博士は猛の言う事をなど聞いていない様であった。

「いいか、猛、バトラスはただの機械ではないのだ。あれは人類科学の結晶にして最高の芸術品なのだ。誰でも彼でもが簡単に操縦が出来る代物ではない。私が心血を注いだ傑作をそう簡単に扱える様になれるわけは無いのだ」

「このローマ法王員経真、そんな事、言いやがってもな、バトラスは主力兵器に選ばれたんだぞ」

「もって瞑すべし」

博士は空気に向かって合掌した。

「だいたい、あのパイロットの人達も、オレも同じ人間だ。オレに出来てあの人達に出来ないはずはないんだ」

猛は大見得を切った。この老人には口答えせずにはいられなかった。

「それはそうね」

小早川が言った。猛は彼女の眼差しに気付いてちょっと照れた。カッコつけ過ぎたかとも...だが後の祭だった。

「ほう、そうか、では、お手並み拝見といくか。どうせ悪あがきにしかならんだろうがな。まあ、せいぜい狂ってみるがいい」

そう言うと博士はからからと笑いながら一人部屋を後にした。

「何なんだ、今のは」

ドッと疲れが出てきた。

「片貝博士って、ああいうキャラなの？」

「えっ、ええ、まあ...アハハハハ。ところで、二人で何を話してたんですか？」

小早川の問いかけを、舞は笑ってごまかすと話題を転じた。

「将君の事よ」

「ああ、将ね。将なら元気よ。毎日、電話してるから。あなたのダメ教官ぶりも、しっかり報告させていただくわ」

「俺のどこがダメ教官なんだよ」

猛が頭から湯気を出した。

「それより、聞いて、聞いて。土井垣司令、毎日、航空総隊司令部と大ゲンカしてるみたい。着任早々、司令部とケンカしてたらしいけど、まだ続いているみたいよ。何もめてるのかしらね？

増援よこせかな？ ウン、多分そうよ」

「お前はどこまで行ってもミーハーだな」

「うっさいわねえ。ね、中尉はなんだと思いますか」

「さ、さァ、どうしてかしら...」

小早川がうろたえて、ちょっと困ったような顔をしたのを猛は見落とさなかった。

「偉い人には色々あるのではないかしら」

そう言うと小早川は席を外した。

「フーン、興味ないのかな」

「お前みたいなミーハーヤジ馬とは違うの」

「なんですってえ！」

今度は舞が頭から湯気を出した。

「大変だあー！ TVを見てみる」

パイロット待機室の外から、大きな声がした。その声は、チョー非常事態の勃発を予感させた。

猛と舞は大慌てでカフェテリアに駆けこんだ。

「オイ、舞、あれだ。見ろよ」

猛がそう言ってカフェテリアにある巨大なTVの画面を指差した。その場に居合わせた全員がTVを注視していた。

TVの画面では今まで映っていた歌謡ショーが中断されていた。その代わりに生真面目な表情をしたアナウンサーが神妙な語り口で告げていた。

「中東、メソポタミア州の第三ネオワシントンD・Cにて巨大地震が発生した模様です。現在、現地との連絡が不通になっております。テルアビブからの情報では…」

それは突然の天変地異であった。旧名バグダッド、正式名称第三ネオワシントンD・C、通称エル・ワシントンは大地震で壊滅した。

今世紀初頭の戦争でイラクはアメリカ合衆国に占領された。その後、治安が悪化し内戦が勃発した。この血みどろの戦いはイラクがアメリカ合衆国の五一番目の州となることで決着した。併合されたのである。（そうなるよ、思ってたんだよ）

旧国名イラクはアメリカ合衆国メソポタミア州となった。

エル・ワシントンはアメリカ大陸失陥後の残存アメリカ軍の策源地であり、極東と欧州の戦線の奥深くに位置する安全な国連軍の拠点でもあった。それは司令部機能のみならず新部隊の編成装備の拠点として活動していたのだ。それが今、昨日を失ったのであった。もちろん、戦局に与える影響は甚大だ。

※ ※ ※

その影響は即日、現れた。

「小牧と岩国の飛行隊が Guam へ移動するだ」と

「台湾とシンガポールの部隊が豪州戦線に派遣されます。本来はメソポタミアで再編制中の部隊が、豪州へ引き当てられるはずだったのですが、それが不可能になりました。他にも本州各基地から、部隊が抽出されるようです。まだ完全な計画は知らされてはいません。ですが追加の部隊移動があると考えerべきでしょう」

翌日というより、昨夜のメソポタミア地震からの徹夜空けなのだが、土井垣は副官の島から以上のような報告を受けていた。

本来、メソポタミアから得られるはずだった戦力が失われたのである。その穴埋めの為、国連軍は部隊の大規模な再配置を余儀なくされていた。また、メソポタミア州自体の復旧と救援の為の部隊も必要とされていた。それは必然的に前戦の戦力が手薄になる事を意味していた。

「まったく、悪いタイミングで最悪の場所に地震が起きたものだな」

「あのう、それと、本部から、隊長宛てに電文が届いています」

そう言うと島は、やりにくそうに、それを土井垣に差し出した。

土井垣はそれを受けとって一読した。そして、電文をグシャグシャと丸めるとポケットに押し込んだ。

「あ、あの、よろしいのですか。総監からの電文ですが」

「かまわん。全責任はオレがとる」

「しかし」

なおも抗弁する島を土井垣は制した。それから話題を転じた。

「全てのパイロットに食事を摂らせておけ。敵はこの混乱に乗じて攻めてくるぞ」

※ ※ ※

「ごちそうさま」

将は箸を置いて、手を合わせた。

「あら、もういいの？ まだ、ご飯あるわよ」

「うん、もうお腹いっぱいだから」

将は食卓の向かいに座っている初老の女性に言った。彼女は片貝夕子、片貝博士の妻であり、舞の実の祖母である。あの片貝博士の妻なのだが、きわめて物静かでおおらかな人であった。博士との馴れ初めは不明だが、専門バカの片貝博士が今日あるのは彼女に負う部分が多い。

猛、一矢も、将も養子として片貝家に引き取られてきた。この時、親身に彼らの面倒を見たのが夕子であった。猛達が博士を博士としか呼ばないのに対し、彼女をおばあちゃんと呼んで慕っている。

この頃になって、朝起きた時に猛や舞がいない事も、食堂で食べる隊食の事も、いままで習慣であった事の記憶が薄らいできた。そして、母親替わりの夕子が作ってくれる食事が、日常のものと感じられる様になっていた。なにより美味であったから。

だが決して以前の事を忘れたわけではない。時折、それを思い起こしては、将は心が空っぽになるような感覚に捕らわれてもいた。

「ねえ、おばあちゃん」

将は食べ終えた食器を台所へ運びながら、夕子に話しかけた。

「今日さ、僕、出かけて来るよ。中学校を見てきたいんだ」

「ああ、そうかい。うん、それがいいよ。もうすぐ入学式だからね」

彼女はにこにこして賛成してくれた。先日、将が戻ってから、彼女が将の中学編入の手続きを行ってくれていたのだが、実際に、その学校にはまだ行った事が無かった。ちなみに猛たちの母校でもあった。

(僕は結局、兄ちゃん達の通った学校に通うんだ)

と将は思った。戦闘と異動で慌ただしく、バトラスのパイロットと掛け持ちで学校へ通うのかと覚悟してただけに、すこしホッとした気分だった。三人と同じ学校に通えることが嬉しくもあった。

家を出たのは一〇時頃だった。ジャンパーにズボン。将が帰って来た後、夕子が買い揃えてくれたものだ。新品の服の肌触りが心地よく感じられた。

外に出ると、太陽がほんのりと温かくて、陽気も申し分ない。

足取りも軽く歩き出す。住宅街をぬけると商店街に入る。学校はこの先だ。人の往来も多い。歩きながら風景を眺める。商店の店先は賑わい、行き交う人は生き生きとして見えた。

将はふと足を止めて上を見上げた。そよ風が吹きぬける。街路樹がそよいで、木漏れ日が揺れた... とても穏やかだった。自分の心も時間も空間も。

「アレッ、君？」

不意にすれ違った人から話しかけられた。将は少し警戒しながら振り向いた。見た事の無い相手だった。学生服を着ている。全部で三人。背が猛ぐらいに高く、中学生よりは少し大人に見える。高校生だろうか。そういえば、この近くには高校もある。

「君、一条将君じゃない」

男子の一人が尋ねてきた。

「えっ、ええ」

知らない人に話し掛けられた緊張で将は小声しか出なかった。でも、ぎこちなく頷いたので相手はそれと確信したらしい。

連れの二人がそれを見て感嘆の声をあげる。

「うわー、TVそっくり」

「当たり前っしょ」

将はバツが悪い思いがした。

「あ、あなた達は誰ですか？」

緊張警戒の念を抱きながら、尋ねた。

「ああ、オレ達、この先の高校の生徒さ」

「登校日の帰りだよ」

彼らは口々に答えた。

「ところでさ、君はこんなところで何してるの？」

将はうろたえた。何と答えたものか迷ったが正直に答える事にした。

「あ、あの、僕、除隊になったんです」

「除隊？ やめちゃったの？ どうして？」

「は、はい。だから、その、子供が戦うのは危険だからって」

「へえ、そりゃそうだね。そう言えば、遥ちゃんて女の子、死んじゃったもんね」

「でも、他の三人は残ってるんだよね。吉原猛さんとか」

連れの一人が口をはさんだ。“吉原猛さん”という言い方が少しおかしかった。将がうなずくと言葉を続けた。

「あの人達、オレ達と大して歳かわんないんだよな。学校で先生がバトラスVを見習って、卒業したら防衛幹部学校へ行けってうるさいんだよ」

「えっ、それで進学するんですか？」

意外な話題に将は興味を示した。

「ダメダメ、いくら戦時下で人出が足りないからって、やっぱり誰でも入れる所じゃないよ。うちの学校の偏差値じゃ望み薄だね」

幹部学校。文字通り空陸海三防衛隊の養成学校である。士官学校だ。

(土井垣隊長は出てるんだろうな)

将はふと、そんな事を考えると、土井垣の事を思い出していた。厳しい様で思いやりのある人だった。もう会えないのだろうか。

「ねえ、一条君」

名前を呼ばれハッとして将は我にかえった。

「あっ、なんですか？」

「オレもバトラスに乗りたいな、なんて」

「無理無理、やめなよ。パイロットなんて難関の中の難関だぜ」

「良いじゃないか、夢ぐらい持ったって。それに、カレは立派に操縦してるんだぜ。まだ小学生なのに」

(そんな事になったら、死ぬかもしれないのに、怖くないのかな)

彼らの会話を聞きながら、将はそう思った。

その高校生は更にしゃべり続けた。

「それに、二十になったら徴兵されるんだぜ。戦争に行かされるんだ。どうせなら、バトラスみたいなすごいロボットに乗ってみたいよ」

「そうだよ。何やらされるか分からないんじゃないか嫌だよ。こっちからやりたい事をやる方がいいよ」

彼らは口々に言った。

徴兵。先日、はっきりと法制化された。遥の死をきっかけに政府は戦時国民総動員法を制定し、満二十才を迎えた成年男子は全員、防衛隊隊員として勤務する義務を負う事と定められた。希望者は十八から入営できた。徴兵される当人達の心の内はどうなのだろうか。

(この人達も、戦場に行くんだ)

基地の外も平和ではないのだ。そういえば、町の中でも避難壕の設置や地下街の避難壕への転用がなされ、それに伴い避難訓練が実地されていた。また、各家庭での食糧、医薬品の備蓄が義務付けられたり救急措置の講習が開催されたりと、非常時の対策が為されている。これまで基地内で生活していた事がかえって将にこれらの戦争の影を気付きにくいものにしていた。

それを将は今、悟った。

「ね、バトラスの操縦って難しいの？ オレ達じゃ無理かな」

照れ笑いしながら、改めて相手は将に尋ねた。

「そ、それは、慣れれば簡単だと思いますよ」

将は内心、戸惑いながら答えた。自分は何気なくバトラスを操縦していたが、いざ他人がやるとなると、どうなるのか予想するのは難しい。よく考えると、自分だって、やっている事は敵を照準に捉えて超電磁レーザーの発射ボタンを押しているだけのような気がする。

「なんか、あっけない答えだなァ... それで、戦闘の時はどうなの？」

「え、それは... おっかないです」

戦闘の事はあまり訊かれたくなかった。出撃直前の緊張のことや、拳句に遥が戦死したり。だが、殺し合いが如何なるものなのか、その実相を将は上手く言葉には出来ない。結局、怖いという言葉しか思い浮かばなかった。

「そう、怖いんだ」

「やっぱり、そうだよな。本当の恐怖だよな」

「当たり前だよ、そんなの。でも彼は戦ったんだ」

将は、そこで周囲の異変に気がついた。

「やっ！」

道行く人が立ち止まりこちらを見ている。いつの間にか人だかりが出来ていた。その人達は皆、将に好奇の視線を注いでいた。

「サイン下さい」

誰か一人がそう言うと、全員が将の方に殺到してきた。

「ひえええええええー」

将は高校生達に一言、別れを告げると、もと来た方向に走り去った。

スタコラ走って、将は家に着いた。学校を見るどころの話ではなかった。

呼吸が整うと将は家に入ろうとした。

その時、サイレンが鳴った。避難警報、空襲だった。

見上げた空は朱に染まっていた...

※ ※ ※

土井垣の予感は的中した...

「CMDゾンデから警報、敵編隊確認。房総半島南方、距離三二〇」

「防空指揮所より入電。スクランブル命令発令」

「調布、横田、厚木の各航空団に迎撃命令が発令されました」

オペレーター達が次々と情報を告げた。

「これは囿では、敵の本隊は別の所に来るのでは...」

島が土井垣に提言した。本日、大量の航空部隊が日本各地から南太平洋方面へ発進していた。残された防空戦力は手薄なものになっている。

「本部でも、それは承知しているさ。だが、たとえ囿であっても、この攻撃も大規模だ。放置しておく事は出来ん」

土井垣はそう答えると、一呼吸おいて言った「第一、第二戦闘隊をスクランブルだ。速やかに敵を殲滅させろ。それと、索敵隊を増発。敵の別働隊が、必ず隠れている。発見に全力を挙げろ」

この直後、関東地区一円に防空避難命令が発令されていた。

格納庫では敵発見の報と緊急発進命令に、蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。

「奴ら、良いタイミングで攻めてくるな。こっちが部隊を移動させるのを見越してるって感じだな」

猛がパイロットスーツの各所を点検しながら言った。

「衛星軌道の制空権は敵に握られてるわ。こっちの動きは筒抜けなんでしょ、きっと」

舞が言った。

「こんな時に地震が起きてくれるんだから、泣きっ面に蜂とはこの事だぜ」

「ぼやかないの」

超電磁スラスタ特有の重低音が響いて来た。すでに疾風の最初の一機が発信を開始していた

。

「急ごう」

一矢がヘルメットをかぶりながら二人を促した。

「慌てるなって。まだ、敵は遠くだぜ」

猛が少したるんだ口調で言った時...

「報告！ 味方戦闘機隊、九十九里浜東方沖合にて会敵。敵戦力一三〇ソーティ。戦闘を開始。全機スクランブル急げ。ただし、第四七独立中隊は現状のまま待機せよ」

「なんだって、オレ達は待機かよ。それにしても大編隊だ。また、キツそうだな、これは」

猛が悲鳴のような声をあげた。

「厄介だな」

一矢が放送を聞いて声をもらした。

「厄介？ 何が厄介なんだ」

猛が尋ねる。

「今までの敵の攻撃パターンからして、他にも別働隊が必ず来るよ」

過去の迎撃戦では、敵は必ず二手以上に分散して侵攻してきた。第一波は囷であり、第二波、第三派が味方の中樞めがけて一撃を加えにくるパターンが多かった。もし、そうだとしたら、残された戦力はあまりにも少ない。

「ウラのウラって事もあり得るんじゃない」

舞が提案した。それも心理の一つではある。

「どうかな。敵は昨日の地震でこちらが動揺している事を知って、そこにつけ込んできたんだろうからね」

「舞、乏しい脳みそで慣れない事を考えるな。敵が来たらその時はその時さ」

猛がズバリと言った。

「なんですって！ アンタこそお気楽すぎるのよ。この単細胞」

「二人とも夫婦ケンカしてる場合じゃないよ」

慌てて一矢が二人の間に割って入った。

「夫婦じゃないの！」

そうしている間にも疾風の離陸する音が行く度も轟いていた。

※ ※ ※

将は非常食等の詰められた緊急時持ち出し用リュックを背負い、夕子とともに家を出た。外に出ると隣近所の人達も同じ様なリュックを背負って、指定された避難場所へと向かって小走りに進み出していた。この区域では地下壕が整備された場所はなく、中学校へと避難する事になっていた。もともと、震災時の避難場所として利用される計画があり、その延長として急遽、避難場所として設置される事になったのだ。

道路の路肩には車が放棄され、オートジャイロも乗り捨てられていた。

人々は体育館に集まり、その中には遠方から来た通りすがりの人々も混じっている様だった。皆、ただ押し黙ったまま、時の過ぎ去るのを待っているかの様だ。

校舎の方には仮設の病院が設置され、指定された住民がボランティアとして手伝っていた。幼い子供達もいたが、皆おとなしくしている。慣れた感じがした。

「今まで、何回も空襲があって避難を繰り返しているけど、実際に爆弾が落ちたり、何かが墜落したりで、被害を受けた事は無いよ」

夕子の言葉を聞きながら、今回もそうである様にと、誰もが祈っているのだろうと将は思った。

将にとっては初めて体験する避難行であった。

それにしても、基地に居る時より不安なのは何故なのだろうか。

時間は刻々と過ぎていった。避難所となった体育館には何の変化も無かった。だが、避難警報は解除されなかった。将は体育館のあちこちを眺めやりながら、外はどうなっているのだろうと気になった。TVのスクリーンには警報中の表示が無言のままなされているのみで、およそ情報らしい情報が与えられはしなかった。だが、唯一言える事は日本の何処かに敵が飛来しており、迎撃戦が繰り広げられているのだという事だけだった。ここの静寂さからして、それが東京近辺とは考えにくいと将は思った。そして、猛達も戦っているのだとも思い、そう思うと胸が締め付けられるような気持ちもした。

突如、電灯が一斉に消えた。TVの画面も白くなっていた。

「停電だ」

誰かが叫んだ。体育館の中が薄暗くなり、ざわめきがひろがる。まだ夕刻には速い時間なので、窓からの採光で光はあった。だが、たとえ無言ではあっても、TVが消えた事は人々を動揺させた。

「発電所がやられたのか？」

誰かが叫んだ。誰も答えられるものはいない。

送電線が破壊されたのか、発電所そのものが破壊されたのかは分からなかった。確かめたいと思ったが、どうすれば良いか分からない。ただ、得体の知れない不安感だけが高まっていく。

「将ちゃん、大丈夫？」

気が付くと夕子が自分を見つめていた。将の緊張した顔付きに声をかけたのだろう。

「平気だよ、おばあちゃん」

少し、慌てて将は答えた。彼女に心配をかけるわけにはいかないと考えたから。しかし、彼の胸中は先ほどからの不安感がなおいっそう高まっていた。

ドキン、ドキン、...

その不安感に本当に胸が潰されそうに、苦しく感じた時だった。突然、外から轟音が響いて来た。そのうなりは加速的に大きくかん高くなり、絶頂に達したかと思えた時、爆音に変わり、微かに地響きすら感じられた。

「何か墜落したぞ」

体育館の中は急にざわめき出していた。落ち着く様にとの声が一同を制した。だが、ざわめきは容易には収まりそうも無かった。

将は夕子の制止を振り切って走り出していた。

「待ちなさい」

誰かが将を呼び止めた。将は無視して外に走り出た。そして空を見上げた。

「アアッ！」

将は声を上げて立ちすくんでいた。

「待ちなさい、君。危ないぞ」

大人の男性が後から続いて出て来た。彼は将に追いつくと同じく空を見やった。そして、顔をこわばらせていた。

遠くを見ると、町並みが紅蓮の炎につつまれて見えた。そして、その頭上、空高く、朱に染まった空でも何かが炸裂していた。

将には飛び交う戦闘機の群れが見えるように思えた。

また、何かが空か落ちてきた。墜落の瞬間、爆発の輝きの中に、その機影が一瞬だけ鮮明に視認出来た。

手足の伸びた人型の影。

「バトラス！」

我を忘れていた。

※ ※ ※

「敵の第三波を相模湾上に発見したとォ！ 何故、もっと早く見つけられないのだ」

将が空襲を目撃する数分前、木更津基地の司令室で土井垣空佐が激昂していた。相模湾上といえば、敵の海岸線突破は目前である。もっとも避けたい事態であった。

ともかく、予想通りに敵の新手が姿を現した。その数、約二〇〇ソーティ。防空指揮所からは、関東各地の全基地に予備戦力全てのスクランブル命令が出された。それを待つまでもなく土井垣は現在、基地に残って居る全戦闘機隊に発進命令を出した。

「全機、緊急発進。こっちが敵の本命だ。首都への侵入だけは食い止める」

その命令を発した後、土井垣は背後に人の気配を感じて振り返った。

そこには量産バトラス部隊のパイロット達が居並んでいた。

「出撃なら許可できんぞ」

土井垣は彼らの顔を見るや、先に切り出していた。用件は聞く必要も無かった。

「ですが、隊長、事態は急を要しています。一機でも多くの戦力が必要なはずです」

パイロットたちの代表格の男が言った。

「まともに機能しないモノを戦力とは呼べん」

土井垣は切り返した。量産バトラス部隊の技量はいまだ慣熟が完了したとは言い難かった。操縦感覚は向上していたが、機体を旋回、ロール等の機動運動をさせながら、敵を確認し、照準をつけ、撃墜させる、これらの動作を併行して迅速に行うまでには到っていなかった。

「ですが、困になって敵を誘き寄せるぐらいの事なら可能です」

「自分達にも戦わせてください」

彼らは口々に土井垣に懇願した。だが、彼は取り合わなかった。

「せっかく、編成したバトラス部隊だ。今ここで全てを棒に振るわけにはいかないのだ」

土井垣はそう答えた。パイロットたちは言葉に詰まっていた。

「量産バトラスが役に立たんと決まったわけでもないと思いますぞ」

その時、パイロット達の背後から声がした。

「誰だ」

土井垣が誰何すると、声の主がパイロット達の間を割って、姿を現わした。白衣姿だ。

片貝博士だった。

「私に名案があるのですかな」

ゆっくりした口調で博士は口を開いた。

「名案？」

「猛から話しを聞いておりました。機体操作に手一杯で照準が出来ないと。そこで対策を考えました。結論を言いますとバトラスの画像認識プログラムを改良しました。敵味方の識別能力を向上させてあります。人工知能君が、より迅速、正確に敵味方を判別します。敵と判断した標的に自動で照準も行ってくれます。極端に言えばパイロットは誤認が無いかを確認し引き金を引くだけでヨロシイ」

「そんな事が可能なんですか」

土井垣が問い返した。彼の表情が変わっていた。博士の説明に興味を感じたらしい。

「シミュレーション上は九九、九九%確実でしたな。もちろん、いきなり実戦テストというリスクも有りますが」

「格闘戦のレベルで敵味方識別装置と射撃管制装置が機能する、という事か」

ポツリと独白すると、土井垣は躊躇した。彼にしても難問であった。

「司令」

パイロット達が一様に土井垣を懇願の目を見た。

「いいだろう。やってみろ、出撃だ」

迷いを振り払おうとするかのように強い口調で、土井垣はそう言った。

「え～、出撃するんですか」

格納庫で片貝博士から事情を聞いて、猛達三人は絶句した。

「ぶっつけ本番でそんなプログラムを使うのかよォ」

猛が仰天した。

「照準が上手く行かんと言っておったな」

「それで、作っちゃったのか。けど、画像認識なんて上手く行くのかよ」

敵味方の自動識別は半世紀前、レーダー全盛期にも試みられた事であった。しかし、戦闘機の隠匿性の向上によるレーダーの信頼度の低下とともに、有視界戦闘が主流になり忘れ去られていた。今回、博士が試みるのはスコープから取り込んだ画像を直に走査し、敵味方の判別を試みるというもので、人工知能君のハードとしての処理能力もさることながら、ソフトの能力に負うところも大きい。

それをいきなり実戦投入するのである。それでも、土井垣が出撃を許可した背景には“格闘戦のレベルで敵味方識別装置と射撃管制装置が機能する”この言葉に、戦闘機パイロット出身の土井垣にとって、抗しがたい魅力が秘められていたからである。

これが実現したとき、ある意味で究極の無人戦闘機が完成するだろう。

「どうせ、また学会ではタブーにされているナントカアルゴリズムを使ってるんだろ。大丈夫かよ。自分を撃ったりしないだろうな」

「安心したまえ。この私が今まで、そんなまがい物を作ったことがあるかね？」

「というか、そもそもアンタという人間がまがい者なんだよな」

「なんだとオ！ 貴様、猛ッ」

状況もわきまえず博士は怒り出した。

「二人とも、いい加減にしてちょうだい。スクランブルなのよッ」

舞がうんざりした様に言った。

バトラスは全機が発進した。唯一機、プライム・バトラス、かつての将の搭乗機が残されていた...

「ところで、敵は相模湾上空って言ってたな。今から発進じゃ敵との遭遇は神奈川のド真ん中になるな。町の真上で戦うのか」

全速力で機体を飛行させながら猛が確認した。

「ソノ公算八九二ぱーせんと」

人工知能君が答えた。

「チッ、もしかして、おばあちゃんの居る所かよ」

猛は夕子と将の家が横浜近郊にあることに思い至らずにいらなかった。

疾風とバトラスの混成編隊からなる飛行第二四四戦闘航空団は、数分で東京湾を横断し海岸線を越え内陸部に進出。

彼らに先んじて厚木、横田の両基地から発進した部隊が既に戦闘を開始している。横浜市を中心とした第六副都心上空で空中戦が展開されていた。制空戦の最中、相互に撃墜された機体が地上に被害をもたらしていた。

「ひでエ、やってくれるぜ」

現場に到着した猛が最初に目撃したのは燃えさかる市街地であった。

「全機、敵編隊を誘導しろ、市街地から遠ざけろ」

編隊長機からの命令が入る。

「一矢、舞！ 戦闘モード突入だ」

「諒解！」

三機のバトラスは文字通り攻撃の切っ先となって敵に突入した。北上して来た敵部隊に対し、横から攻撃する格好になった。

敵のタルサリスの数個編隊が、スルリと転がる様に横を向き猛達に正面を向ける。だが、そのわずかな時間に猛達は数機の敵を叩き落としていた。出鼻をくじかれた敵に、後続の疾風の編隊が散開して襲いかかる。そして、十五機の量産型バトラスも。

量産バトラスは三機一組の編隊で行動し、先に突入した疾風の援護に従事した。加速して敵に急追し、一撃して後、そのまま離脱するという戦法に終始し、少しずつではあるが、戦果を重ねていた。

敵は一時的に態勢を乱した。だが、敵がフォーメーションを組み直すと防衛隊側は出血を強いられた。何と言っても数的不利なのだ。

戦闘空域が移動するに連れて、地上の被害も広がっていく。それが、将の住む町に迫っている事に猛達は気付かなかった。

「アッ」

立ち尽くしていた将は、何気なく、手首につけていたMORPHを見て声を上げた。混乱の最中、リンクが回復したのだ。奇跡的だった。

だが、混乱と恐怖を訴えるメッセージ文がダダダダダと吐き出される。

赤い空。見えない敵。突然の轟音。誰もが不安、いや恐怖、恐慌を訴えている。

その時、救急車が数台、サイレンを鳴らしながら入ってきた。

「アッ！」

そこから搬出され担架に乗せられた負傷者に、将は知った顔を見つけ声を上げた。それは先刻、道端で将に話しかけてきた高校生達であった。一人が顔を泥と血にまみれさせ、息も絶え絶えな様子で担架に横たわっていた。上着が脱がされ胸に巻かれた包帯にも血が滲んでいた。残る二人が横に寄り添って懸命に声をかけている。将の脳裡につい先刻の三人の元気な姿がよみがえった。そして、平和だった街並みも。

つい先ほどまで、穏やかさを保っていたものが一瞬にして消え去っていくのだ。

「町がメチャクチャになっちゃうんだな。そして、たくさん人が死ぬんだ。もしかしたら、兄ちゃん達も」

何もかもが、昨日と違う物になってしまう。そんな事...

その時、新しいメッセージが映った。幼稚園からだった。

”子供達が、泣き止まない”

！

子供達という言葉は、将の脳内では、ある言葉に直結していた。

“守る！”

将は胸の激しい鼓動を感じながら、その言葉を思い出した。自分の体が戦慄くのを感じた。

だが、それは恐怖からではなかった。心の奥から湧き起こる強い衝動だった。決定的だ。

守るのだ！ 戦うのだ！ 幼い命のために！

「おばあちゃん！」

将は体育館の中へかけ戻ると、力強い声で夕子を呼んだ。

続けて言った。

「僕、行くよ。基地へ戻るよ」

「...そうかい」

一瞬の沈黙の後、夕子は静かな声で言った。

彼女はギュッと将を抱きしめた。

「おばあちゃんの事は大丈夫、心配要らないよ。気をつけて行くんだよ。そして、隊長さんのお役に立ちなさい」

夕子は舞との電話でのやりとりから、土井垣の人と為りについて推測していた。おそらく指揮官としても人間としても優れた人物であろう事を悟っていた。この司令官の下でなら、たとえ、この子を失っても後悔はしないとさえ思えた。

外へ飛び出すと、将は乗り捨てられたオートジャイロを目指して走り出していた。基地に戻るにはこれを使うしか方法は無い。こんな物の操縦は、バトラスに比べれば、自転車に乗るのと同程度以下であった。

エンジンは駆けられたままだった。

低く這うように飛ばす。

「宇宙人め、小っちゃいからって舐めんなよ！ 地球人はなァ、子供だって、やる時はやるんだい！」

将は、赤い空へ向かって、どやしつけた。

木更津基地。

土井垣は、格納庫にいた。

「敵、第六波確認。敵戦力は一〇〇〇ソーティを突破します」

その報告を受けた時、土井垣は司令室をあとにしていた。

何も無い格納庫に、ただ一つ、存在するものがあつた。

プライム・バトラス...

土井垣は、その前に立ち尽くし、プライム・バトラスを見上げていた。

一歩、踏み出そうとした時、

「隊長！ いきなり、バトラスの操縦なんて、無理です」

聞き覚えのある声だった。幼さを感じさせる子どもの声だった。

そちらに目を転じた土井垣は、そこに信じられないものを見た。

その瞳には、将の姿が映っていた。肩で息をしながらこちらを見つめている。

将は土井垣に見つめられた時、竦んでしまったようだが、やがて意を決したように歩き出し、土井垣の面前まで来た。そして、土井垣に向き合った。

二人はしばし無言で向き合っていた。

「何故、ここにいる」

最初に口を開いたのは土井垣の方だった。抑えの効いた冷たい声だった。

将は土井垣と向き合っているだけで、もう足がガタガタ震えてしまいそうだったのだが、それでも気を奮い立たせて言った。いや、叫んだ。

「乗せてください。僕をプライム・バトラスに乗せてください」

「お前は必要ない」

土井垣は短く言い返した。

「お願いします。出撃命令を下さい。プライム・バトラスは僕の機体です。僕が世界で一番、上手く操縦できるんです！」

将はそう叫び返すと、さらに言葉を続けた。

「この前、隊長に言われた事は分かります。死ぬのだって怖いです」

将は泣きべそになっていった。

だが、言葉を続けた。

「だけど、他に誰もいないのなら、たとえ子供だって、やる時はやるしかないんです！」

そう言うのと将はジッと土井垣の顔を見つめた。今にも食いつきそうな目だった。懸命に土井垣を見つめる将の視線は強固で揺らぐこと無く注がれていた。

沈黙が流れた。

土井垣は自分が一つ、考え落ちしていた事を悟った。

幼い者を守る。自分はそれを信条に戦ってきた。

だが、少年は何時か男になるのだ。そして今、目の前の存在は、その第一歩を踏み出そうとしているのではないか。自分は、その瞬間に立ち会っているのではないかと...

彼は将の肩に手を置くと言った。

「一条将、原隊復帰を認め出撃を許可する。敵を叩き潰して来い」

その時、将の表情に現れた喜びの光を土井垣は生涯忘れないだろうと思った。

「来たか、将」

片貝博士が来ていた。将が戻ってきた事に何の感慨無いようだった。

「これを持って行け」

博士が指し示したのは、プライム・バトラスの腹に装着された、巨大な臼砲だった。まるで樽だ。

超電磁トレブルフォーン。博士はそう呼んだ。

試作品であり、一回しか使えないとも言った。だが、劣勢を一気に挽回出来ると断言した。

将は大きく頷くと、機上の人になった。

「データリンク試験」

「超電磁スラスタ、NO1、2オン。NO3、4オフ。NO5、6、7、8オン」

重低音が耳に響いてくる。機体の振動も微かに感じる。

「ラウンドベクトリアン」

「こちらバトラス」

「OK、バトラス。君のNOはセブんだ。フライトレコーダーをオンにしてくれ」

「出撃許可をお願いします」

「許可する。武運を祈る、バトラス7」

プライム・バトラス一号機は乙型装備に換装され、天空へ舞い上がった。目指すは第六副都心、横浜。

「行ったか」

司令室では巨大スクリーンに投影されたバトラスの飛翔の様子を見ながら土井垣は独りつぶやいた。そして、彼はポケットからクシャクシャに丸められた紙切れを取り出した。それは先日、航空総隊司令部より直々に送られてきた電文だった。

それには以下のように記されていた。

「先の命令を文書にて確認する。一条将空士長の除隊はこれを許可しない。直ちに原隊に復帰させるべし。航空総隊総監」

土井垣が連日、上層部と口論をやらかしていたのはこの件だったらしい。

「命令違反はせずに済んだわけか」

今はただ、将の健闘と無事を願うのみであった。

「FREETA—DOOOOOP！」

「エエイ、まだ敵は減らねエのか。こっちはもう限界だぜ」

そのころ第六副都心では、都市を覆う赤い空の中で、猛達が依然として苦闘を続けていた。味方機もかなり減少してしまった。

「ヤツら、分かってるんだ。こっちが主力を東に送っていて手薄になっているって」

「二人とも、無駄なお喋りをしてるヒマが有るなら目の前の敵に集中しなさいよ」

すでに一時間以上、戦闘を続けている。敵が優勢であり、最初のうちこそ損害を与え得たが、今や敵の攻撃を躲す事にいっぱいゝで、つけこむ隙は皆無。

三機のバトラスは致命傷となる損害こそ受けていないが、幾度となく破壊力線がかすり、満身創痕になっていた。

（このまま、物量に押しきられるのではないか）

ここにきて、三人は敗北を意識した。それは任務を放棄しての撤退なのか、それとも徹底抗戦による全滅なのか。

「オレ達、死ぬのか」

ふと、意識が緩みそうに成った時である。

「危ない！ 兄さんッ！」

一矢の怒鳴り声にハッとなった時には、もう遅かった。側面にタルサリスが迫っていた。完全に敵の射程に入っていた。

猛は体も心も凍りついたようになった。“やられる”と思う、僅かの時間すらなかった。

「FRA—DWEEEEEEET」

だが、その時、爆発して吹き飛んだのはタルサリスの方だった。

「な、なんだ、どうなったんだ」

虚脱状態になりそうなのを懸命にこらえながら猛は言った。

「誰だか分からないけど、狙撃したよ。誰だ？」

そう言うのは一矢だ。

「粒子ふいるたーニ感知アリ。敵味方識別信号確認...」

人工知能君が報告した。

スコープの隅に緑の光点が点滅していた。敵味方識別信号有り。低空飛行で接近してきたようだった。だから気が付かなかったのだ。たった一機。だが、味方だ。しかも、このアノテーションは！！！！

「これって」

「ホントかよ、オイ」

「ウソでしょ」

三人は一斉にこの信号に気付き、眼を疑って、九分の疑念と一分の希望の思いを込めて、一様に言葉を発していた。そして、望遠スコープでその機影を捉えた時...

「プライム、バァアトラアアアス！」

戦場に凜々しい雄叫びが轟いた。懐かしい声だった。

間違いなく、それはプライム・バトラスのまごうこと無き姿であった。プライム・バトラスの音紋照合をパス出来る人間は、ここにいる三人を除けば一人しかいないのだ。

「将！」

三人は一斉に歓喜の声を上げて快哉を叫んでいた。

将のプライム・バトラスは低高度より急上昇し加速をつけて、後方から敵編隊になだれこんだ。

将は見る間に数機を撃墜していた。そのまま、敵の中央へ突き進んで行った。敵中を縦断しながら、更に敵を叩き落としていった。敵も陣形を整え、この新たなる乱入者に攻撃を集中した。破壊力線の斉射が将を襲う。しかし、将は蝶が舞うが如き機動で全ての攻撃を躲していく。エアリアルのようにクルクルと回転しながら落下して、敵の攻撃を躲しつつ、敵を次々と狙撃した。たちまち数機のタルサリスが砕け散った。

「スゴイ！ あんな態勢で射撃が出来るのか」

量産バトラスのパイロット達、彼らばかりか疾風のパイロット達も驚愕していた。

そして、それは猛達三人も同じであった。

「あれが将かよ」

敵中突破を果たしたプライム・バトラスは、反転し敵に向き直った。よく見ると腹に臼のような物を抱えていた。その先から砲身と思われる物が伸びている。

「アッ、あれは...」

グレート・バトラスのコクピットでも、猛がプライム・バトラスが不格好な何かを構えるのを認識していた。

「将、それは乙型装備じゃないか。そんなモン使うのか」

乙型装備とは超高周波の超電磁ウェーブを放出し、敵機のアビオニクスを壊滅させる間接的ア

プローチ兵器だ。

通称、超電磁トレブルフォーン！

「全機、後方に退避してください」

将から通信が為された。

全機が退避した。敵は編隊を立て直して接近してくる。

「ちょうでんじいいいいい、

将が気合の入った声で叫んだ。発射命令は音声入力でも可能だ。出力は音量で決る。怒鳴れば、最高出力になる。

将は怒鳴った。

トレブルフォオオオオオオオン！」

凄まじい光が煌く。

その閃光に照らし出されたタルサリスは、一斉に不安定で無秩序な動きを始めた。狂いだした。編隊は完全に崩れた。

更に攻勢に出ようとして、プライム・バトラスは超電磁トレブルフォーンを投棄した。実はこの兵器は未完成品なのである。先に書いたように、一回、撃ったら壊れちゃうのだ（便利な設定だね）

将はそのままプライム・バトラスを前進させた。攻勢の流れの中でバトラスの四機は自然に集結した。

「ビックリしたぞ、将」

「いつの間にあんな腕を上げたの？」

将はそんな言葉をかけられながら、その言葉の裏に皆が自分の復帰を喜んでくれている気持ち感じられ、とても嬉しかった。

すでに、味方機が混乱した敵機の群れを食らいまくっていた。だが、その中に四機だけ損傷も無く反撃してくるタルサリスがあった。超電磁トレブルフォーンの被害を免れたようであった。編隊を崩さず反撃してくる。その連携の秀逸さは“黄金の中盤”と呼んでも差し障りがなかったであろう。

数機の疾風がこの四機に接近しようとした時、それよりも速く飛び出した機体があった。

プライム・バトラスだった。彼は単機で敵中に突入した。制止の声を振り切っていた。

そのコクピットの中で将は考えていた。

（ズッとってたんだ。僕にもきっと出来るって）

将は左右のジョイスティックを両腕のメーザーの照準に連動させた。そして足のレバーと背もたれを使って機体の姿勢を制御する。以前、猛が行った操縦法だった。

猛は機体を加速すると敵陣を突破して、将のプライム・バトラスに合流した。そして、背中合わせに宙に浮揚した。

「将、お前、何考えてる」

猛は将に通信を送った。返答があった。

「証明してあげるよ、前に言った事を。僕も兄ちゃんみたいになりたいって思ってたんだ」

補章

西暦二〇六四年、人類は未知なる異星人の侵略を受けた。

第〇章 訓練

西暦二〇六五年、人類は、まだ戦いの中にあつた。

赤く霞んだ大空を不可視的な巨人が馳せていた。眼には見えなかったが確かに空を飛んでいた。そして、それは巨人だった。明らかに巨大で、人の形をしていた。

その見えない巨人に蚊が群がった。こちらも見えない蚊であつた。双方ともに見えない存在なのに、彼等には相手の位置と動きがまるで目に見えているかの様であつた。群がる蚊とそれを振り払おうとする巨人。彼等の飛んだ軌跡は複雑に絡み合っていく。赤いミストをかき混ぜながら

...

そして、巨人には中の人があつた。

* * *

「そんなこと言いやがってもなァ、俺はアイツみたいに上手くは出来ないんだよ！」

彼、吉原猛は、そう怒鳴りたい気持ちを懸命にこらえていた。この直径4メートルのカプセルに閉じ込められてから、すでに半日以上が経過している。

早朝からブツ通しの訓練で一度も着艦がなく、オムツがぐしょ濡れになっていた。食事も発艦前に軽食を摂ったのみだ。もっとも、オムツの不快感が空腹感をまぎれさせてはいた。だが、意識は朦朧として集中力が乱れてもいた。

だが、そんな事にかまっている場合ではなかつた。敵 {アグレッサー} は目前に迫っているのだ！

猛は今、直径4メートルのコクピットの内部に座している。コクピット自体が球殻の中に設置されており、その球殻の内面が全て外部の映像が投影されるスクリーンとなっている。前後左右上下、三六〇度あらゆる方向がスクリーンで囲われている。故に、このスクリーンは全天スクリーンと称されているが、あらゆる方向の映像を映し出してくれる。隔壁や装甲を透視して、外景を見るに等しかった。その鮮明な高解像度の映像は、時に座席がむき出しのまま、天空にあるかのような錯覚すら与える。もっとも、今の猛には、そんな事を感じているゆとりはなかつたが。

スクリーンに周囲の光景が映っている。ここは伊豆半島沖合の洋上、高度五〇〇〇メートルの高空である。周囲には蒼空が広がり、眼下は一面見渡す限り太平洋の濃い青の海である...だが、今、それは赤く染まっていた。まるで、空が錆びたように思えた。実際には赤く澱んだ霧の中にある。

正確には、粒子...である。

* * *

「あらーむめっせーじ、粒子ふいるた一二感アリ。本機左翼前方二、けるる帯域ヲ確認。中央

部二、質量反応アリ」

操縦支援用のA I副操縦士（別名、人工知能君）が、抑揚のない合成音声で告げた。

「ケロ粒子、戦闘濃度散布！ スキャン開始。カメレオンモード始動」

人工知能君に指示をした。ひとつは、より詳しい索敵のために、もうひとつは、敵の弾を回避するためである。

ピポッ。

電子合成音がした。スクリーンの正面横手にウィンドウが開く。中央に光点が一つ

「チッ」

画面上の情報諸元を見て、猛は舌打ちした。飛行物体の容積の推定値が一定していない。揺らいでいる...

だが、それでも、対峙しなければならない。彼は舌打ちしながらも乗機の機首をめぐらし、それを正面に捉えた。

その時、それは三つに分裂した。その三つが、さらに三つに... やっぱり、一機ではなかった。容積値が揺らいでいたのは、複数の物体が密集していたのを一個の塊と捉えていたからだ。

それらは敵のはずだが、交戦規定上、即座の攻撃は禁止されている。味方を誤射する可能性があるからだ。とりわけ、既に敵味方が交戦中の空域に援軍として飛来した場合、なおさらそうすべきだった。

さらに接近すると、人工知能君が告げた。

「形状走査ヲ開始」

粒子フィルターはレーダーの代用になると同時に、目標物の具体的外観を走査して臆気ながら形状認識する事が出来た。これがなくては、カメレオンモードの跋扈する昨今、敵を明確に断定出来ない。断定出来なければ攻撃も出来ない。

人工知能君が答えを出した。

「走査完了」

対象物の形状が投影された。その解析画像はピンぼけ手ブレの写真程度の解像度だが...

とは言え、見間違い様も無かった。球形の本体の左右両側に安定板を貼り付けた、単純な、いや、シンプルな形態... タルサリスだ！

九機分の映像に次々と切り替わる。猛はそれらを全て目視確認した。

そして、叫んだ。

「形状確認完了。敵機と認定！」

猛の言葉を聴いて、人工知能君が敵かに告げた。

「了解。戦闘モードニ移行シマス」

タルサリスとは、‘敵異星人’の戦闘機(とされているもの)に対して、人類の側が付けたニックネームである。その形状は前述の通り、ボール状の本体の左右両側に安定板を貼り付けた単純なものであるが、驚異的な加速力と、どう考えてもあり得ない運動性能を有していて、地球側の既存の戦闘機には、良くこれに対抗しうるものがなかった。

「システム全開！全方位攻撃」

猛は人工知能君の音声をろくに聞いてなかった。逆に命令を出した。敵は目前だ。

「突入！」

敵機を示す光点も散開すると、めまぐるしく旋回した。猛はその群れの中へ飛び込んだ。敵機の軌跡が、鋭角に折れ曲がる。そして、一気にこちらの間合いに飛び込んできた。人工知能君は一瞬で複数の敵を捕捉した。捕捉までの作業はコンピューター任せだ。しかし、そこから先は自分がしなくてはならない。最後は人間の判断が必要になる。この事が兵器の全自動化が抱える問題点だった。その課題は今日に至っても解決出来てはいなかった。敵味方の判別、攻撃優先順位の決定、コンピューターがどれほど発達しても、人がやらなければならない事は無くなりはない。それらは、どうしても数式化出来ない事だった。

とにかく、回避運動をしながら... 考えている暇はない、反射神経の命ずるまま直感の勝負だ。止まるな！機動しろ！とにかくコンボを、たたき込め！

* * *

巨人は赤い霧の中に立ち込める蚊柱へ真正面から飛び込んだ。互いの軌跡が螺旋を描きながら絡み合った。

巨人の体から光の矢が放たれた。忍者が手刀を鋭く投げたかの様であった。その光子の矢は数匹の蚊を仕留めた。しかし、蚊の方も光子の毒矢を放っていた。そして、怯まずに巨人に群がっていく。その毒矢も巨人の体に命中して、確実にヒットポイントを稼いでいた。

双方とも、コンマ1秒と言えども止まることをしない。動き続けた。奔流のように流れに流れ、ひたすら旋回した。いささかも止まらない。澱みがあっても強引に突き抜ける。一瞬の勝負を繰り返した。

* * *

コンボを五〇回以上は叩き続けたであろうか... 敵はまだ半分も墜ちてない。

戦闘開始と同時に警報が鳴り響き続けている。それが一段とけたたましくなった。

「だめーじぼいんと、累計三八〇〇点、かめれおんも一どニ、重大ナ支障ガ発生スル可能性アリ」

「チッ」

猛は舌打ちするより早く左右のジョイスティックを振り回すかの如く操作して、機体の方向を巡らした。急速ターン。尻尾を巻いて逃げにかかる。こうなったら、それしかなかった...

(チクショウ、アイツならとっくにクリアーしてるのに...)

...だというのに、こちらは追い詰められようとしている。

(とにかく、トンズラだ)

無理やり気持ちを切り替える。増速した。だが、背中にプレッシャーをじんじん感じる。

レッドゾーンまで増速する... だが、後ろを振り返ると、スクリーンには敵機を意味する光点が一面にまぶしたように散りばめられていた。数が多いのを見せつけられただけで、敵がどんどん近づいてくるように感じてしまう。追いつかれそうだ。

「デコイ、発射」

猛が叫んだ。

空が開いた... そしてミサイルが飛び出した。何もない(はずの)空間で、いきなり、扉が開放された。しかし、現に、そこには内部が存在していた。何もない三次元空間に扉が広がり中が見えている。トワイライトゾーンだろうか？

さて、発射されたデコイは、電波、赤外線、可視光線等を撒き散らして、敵を眩惑しようとした。だが、効果は“無”であった。

無駄だ、そうと知りつつやってしまった。人間、追い詰められた時は心が弱くなってしまふ。気がつくと猛は絨毯のような平らな雲の上を飛行していた。左手から陽光が差している。猛の視界の隅に雲に落とされた敵機の影が入った。赤くにじんだ雲に、いくつもの黒い影が落とされている。

「チッ、こんなとこまで、良くできていやがるぜ」

そう毒づくくと、猛は視線を戻した。その時、一瞬だが、今度は、彼の視界の隅に自分の乗機の影が捉えられていた...

それは戦闘機、あるいは航空機の形状ではなかった。流線型のシャープなシルエットなどではない。ヘリコプターでもなかった。およそ、人類の作り出した空飛ぶ機械のいずれにも当てはまるものは無かった。もちろん、鳥や昆虫にも似てはいなかった。この様な形状で飛行するものなど存在し得ないはずであった...

それは人の姿をしていた。頭部と胴体、そして二本の手足を備え、どう見てもそれは人の形をしているとしか説明のしようがなかった。

巨大であった。頭からつま先(?)まで、三十メートルは有るだろう。

とにかく、全長三十メートルの空飛ぶ巨人が、現に存在し、今まさに戦闘機と空中戦を演じているところらしい。

しかし、それにしても...

それは、異様な光景だった。信じ難いものでもあった。実体が無い...見えない。にも関わらず、雲の上にはくっきりと影が刻まれているのである。

だが、もし、鷹並の視力のある者がジッと目を凝らして雲の上を観察したならば、もっと不可解なものを発見出来たであろう。それは、蜃気楼を想起させる揺らぎ、揺らめきであった。空間が局部的に歪んでいる様にも見えた。

「FREETA-DOOOOP」

その時、人工知能君が悲鳴をあげた(コミック版のス○ー△オーズを見ると、□2-x2の悲鳴はこう表記されている)

眼下の雲という水蒸気の絨毯を突き抜けて、飛行物体を示す光点の一群が、猛の眼前に躍り出てきたのだ。

最早、目視確認などしていられなかった。人工知能君の警告も聞き流した。

しかし、猛は追いかけられるまま逃げているうちに、このポイントに追い込まれていたのだとは考えなかった。この新手のタルサリスの一群は、言うなれば気まぐれで突然ここに現れたのだ。誰の気まぐれか? と言うと...

「あの陰険オヤジめ...」

とすることになる。

とにかく、挟み撃ちだ。逃げ場はない。こうなったら、やるしかない。

「全超電磁スラスター、ベクトル集中！ 出力最大！ 突進！」

猛はまなじりを決して叫んだ。一瞬もおかずに凄いgが発生。体がシートに押しつけられた。

* * *

巨人は猛烈な勢いで赤いミストの中の星をちりばめた様な蚊の群れの中に、突っ込んでいく。そして、獅子舞の如く荒れ狂った。光の棒を振り回して凶悪な毒を秘めた蚊を叩き落とそうと、有らん限りの力を出した。

しかし、

ダメだった...すべて虚しかった。それでも諦めきれずに荒れ狂う姿は、まさに断末魔...であった。

* * *

ヤケになって敵のど真ん中に突っ込んだ猛は、結果的に敵の集中砲火の良的になってしまっていた。

「あらーむめっせーじ。だめーじぽいんと、四五〇〇点」

「チ、チキショー！」

「かめれおんもーどノ維持ハ、不可能デス」

* * *

空の一部分が変調をきたしていた。タルサリスの光の矢が空を飛び交い、弾ける度に、空の色が剥がれ落ちていた。とにかく、空が剥がれ落ちたとしか言いようがなかった。そして、剥がれ落ちた後には陥穽が現れた。

タルサリスの光の矢が、驟雨のような密度と勢いを見せるにつれて、空の色は、メッキが剥落しペイントが洗い流されているかの如く消失していった。逆に、陥穽の方はどんどんむき出しになっていく。

その陥穽と思われていた空間は、そうではなかった。そこは虹色のまだら模様をしていた。そのまだら模様が生き物であるかの様に揺らめいている。

次に、その虹色の物体は次第にある一つの形態を成していった。ごくありふれた形だ。しかし、非常識に巨大だった。

* * *

「マイク・インディア」

猛が告げた。負けを意味する隠語である。

まるで、その声に合わせたかの様に空間の最後の一片が剥がれ落ち、物体は全貌を現した。それは人の姿をしていた。ただし、全長三〇メートルの巨人である。

コードネーム、グレート・バトラス。新型機動戦闘機である。

敢えて言おう、巨大人型ロボットであると...

* * *

カメレオンモードとは機体の外板が変色するような機能を持っていて、巧みに周囲の景色に溶

け込んで自らの姿を目視確認されないようにするものである(光学迷彩と言え、話が早いんですか?) とにかく、技術は進歩するのだ。

* * *

技術の進歩によりもたらされたレーザー光線兵器類の小型軽量化は、精密照準技術の進歩と互いに影響し合い、キロメートル単位で距離をおく物体に対しほぼ命中率100%の狙撃を可能にした。戦闘は先に敵を発見した方の勝利となってしまった。

この様な状況に対して、一部の国の軍人たちは適切な防御手段の開発を自国の技術者たちに求めた。その要請に応えるべく開発されたのがカメレオンモードであった。自由に変色できる素材で外板を作り、保護色の原理で自らの姿を景観に溶け込ませてしまうのである。戦闘機の外板は、軽量で、電波を吸収し、そのうえ耐熱性も備えていなければならず、更にまた、保護色の機能も併せ持つという事で開発は至難な事と思われた。しかし、技術者たちは良くその任を果たした。だが、仮想敵国も同様の手段を手に入れた時、敵も味方も相手を発見する事が出来なくなってしまった。

再び技術者たちは難題に直面したが、彼らはまた答えを見出す事が出来た。その答えが粒子フィルターである。

粒子フィルターとは、粒子を空気中に放出散布した際、その粒子に確率的重みを与えその解析結果を用いて物体の存在の有無を判別し、更に運動までも探知するものである。大雑把に言うなら、気流に煙幕を漂わせて、煙の流れで透明な物体の形を知ろうとする事と同じだ。(こういうモノを本当に研究している人がいるらしい)

また、ケロ粒子とは六方格子を形成しながら拡散する性質を持ち、粒子フィルターに役立てられていた。それから、ケロ粒子はゲッター線と呼ばれる特殊な電磁波を発生し、このゲッター線が空気分子を励起発光させるので、空が赤く染まるのである。

* * *

巨人の覆面が剥ぎ取られると、第二の巨人が現れる。この新しい巨人も肉眼では捉えられない。

* * *

カメレオンモードを解除。冷却開始...

七色のまだらが薄まっていき、ラバロイド装甲本来の白濁した色彩が露わになった。半透明な純白の姿には、先刻までの争いとはうって変わった静けさの様なものが感じられた。

コクピットの中も静寂に支配された。次々とパネルの光が落ち、粒子フィルターの解析画像からカメラ映像に切り替わったメインスクリーンが薄暗い曇り空を映している... ケロ粒子の大量散布により赤に染まっているのは、バーチャル上の事である。

それとは関係無く信号サイクルの音も止んだ。人工知能君もスリープ状態だ。

そんな薄暗い球殻の中で猛はゼイゼイと荒く呼吸を繰り返していた。ゲームオーバーとなったとたんに、体から力が全面撤退してしまったようであった。もちろん、先刻まで忘れていたがオムツも気持ち悪く感じている。

* * *

この時、薄暗い空ではあったが、目を凝らせば白い巨人の隣に、蜃気楼のような揺らめきが出現したのが見えたであろう。

* * *

しばらく朦朧とした頭で、スクリーン越しに薄暗いどんよりした空を睨んでいたら、ピピと電子音が鳴って人工知能君が目を覚まし、粒子フィルターに感知のある事を告げた。僚機だと言う。

「兄さん」

通信が入ってきた。チラリとスクリーンの横手を見やる。何も見えない。だが、猛の脳内には、その存在の形状が細部までイメージ出来ていた。猛の乗機と同様、巨大な人型戦闘機である。

「...」

「...あの、さっきは厳しかったよね」

「...」

「あんなタイミングでタルサリスを出されちゃ、手のうちようがないよ」

「...」

「ホント、むちゃくちゃだよ...」

「...」

「あ、あの...」

無言の猛に相手が言いよどんだ時だった。

「何をぼやぼやしとるかッ！ さっさと交代しろ！」

教官の怒号で会話らしきものは中断された。

「ほら、今度は、お前の番だぜ、一矢」

かなりぶっきらぼうな口調で猛も促した。

「う、うん...」

一矢と呼ばれた声の主はまだ何か言いたげだったようだが通信は途切れた。

彼の名前は吉原一矢。猛の弟、である。その乗機の名はキング・バトラス...

* * *

通信が途切れた途端、コクピットはシーンとなった。猛は息をつくと、スクリーンに描画された弟の機影の軌跡を目で追った...

それは、スクリーンの一点に灯る小さな光の点だった。蛍を思わせる青緑の灯だ。初めは、ゆっくりと真っすぐに上昇するブルーのラインを描いていた。

でも、ほんの数秒たつといきなり目で追うのが難儀な動きを始めた。昆虫が無作為に飛び回っている時の様な目まぐるしい動きであった。その軌跡の残像は複雑に絡まって丸まった糸である。

。

そうやって目まぐるしく飛び回っている。

「ふん！」

それが猛には気に入らない事のようにであった。

それでも、猛の目はその動きを捉えている。彼の脳内では実際の光景が完璧にイメージされて

いるのだ。弟の一矢がカプセルのようなコクピットの中で、コンボをたたき続けている姿も想起出来ていた。

人工知能君に命令し画像のモードを切り換える。スクリーンの映像は赤くどんよりとしたものに変化した。これはケロ粒子である。それから、一矢の機体を示す青緑色の蛍を思わせる灯の他に、紫色をした灯が多数映っていた。この紫色の群れはひっきりなしに飛び回り、蚊柱に見えた。

その蚊柱の中心に一矢の機体を示す青緑色の光点があった。よく見れば、紫の光点群は一矢の機体という一点に群がっているのであった。

ところで、今、スクリーンに映っているこの光景はCGが作りだしたバーチャルな光景である。なんの違和感もない。だが、偽装だった。彼ら二人、猛と一矢はバーチャルな映像を視ながら飛行訓練をしているところなのだ。

最初、曇り空に、一矢の機体の灯だけが見えたのが実際の映像である。そして、人工知能君が切り換えた画面、赤色の空に紫の多数の光点に加わった映像が仮想現実なのである。ケロ粒子を大量散布した戦闘状態を再現しているのだ。青緑色をした光点が一矢、無数の紫の光点が敵戦闘機タルサリスだ。一矢が目の回るような素早く複雑な軌跡を描いていたのは、敵の攻撃を躲していたからだ。

敵主力戦闘機タルサリスは従来の地球側戦闘機ではたちうち出来ないマニューバ性能を誇っていて、訓練において、タルサリスの役割を担うことを出来る機体が存在しないのだ。故に訓練を行う時は実際に飛行しつつも、CGで再現されたバーチャルな敵を見ながら戦うのである。

ただ、バーチャルとは言いながらも、その作り込み具合は徹底しており雲に影まで落とすのである。もっとも、教官に追い立てられている猛には鬱陶しいとしか感じられなかったようである。

それと、このタルサリスはバーチャルなだけにどこにでも降って湧く。要するに、タルサリスはプログラム上の存在であって、そのプログラムを操作すれば、どこにでも出現するのだ。全てが、母艦にいる教官の腹ひとつなのだ。現に先刻、猛が雲海の表面を飛行していた時、タルサリスが数機、雲海の下から猛の眼前に飛び出してきたが、あれは、先回りしたのではないし、あらかじめ待ち伏せしていたわけでもない。シミュレーターのオペレーションにより何も無いところにまさに降って湧いたのである。

はたから見ると、何も存在しないのに踊り狂っている様に見えることだろう。更に空を撃つ、その姿はちょっとマヌケかもしれない...

しかし、猛の脳裏にはそんな思いは微塵もなかった。この訓練に反発しながらも、やはり対抗心があるのだろうか、眼光鋭く一矢の乗機の動きに見入っていた。（職業病か？）

それだけではない、彼の動きを精密に捉えていた。

紫色の雲霞の中へ青緑色の一回り大きな光点が幾度となく突っ込んでいく...

スイスイ動く一矢... 自分の動きとは違って見える。一矢にはタルサリスの動きがよく見えているのだ。予測が的確だ。

敵を表す紫色の光点が速いペースで減少している。一方、一矢の失ったヒットポイントはかす

り傷程度...

「...」

無然としている間に紫色の光点はたったの二つになってしまった。

二つの紫色の光点と青緑色の大きな光点が目まぐるしく飛び交い飛行の軌跡が絡み合う。合わせて三つの光点が接近しては遠退き、再度肉迫する。

一矢はなかなか撃とうとしなかった。ただ、接近と反撥を繰り返している。猛には一矢が何かの間合いを取っている様に見える。だがそれは何なのか？

その時、紫色をした光点が...二つ同時に...弾けた。撃墜されたのだ。二機同時に。猛の目ははっきりとそう捉えていた。

一矢は二点を同時に狙撃したのだ。それも実にあっさりとやってのけた。全て、反射神経と先読みのカンの鋭さの賜物だ。

一矢の訓練はあっさりと終了した。

* * *

同時刻、訓練空域を遠く離れた日本近海の洋上に海上防衛隊が有する大型空母イカズチが航行していた。防衛隊最大の艦、と言うより極東方面で最大の軍艦であった。アメリカ海軍がほぼ壊滅した現在、世界最大最強の空母だったかもしれない。そして、このイカズチこそバトラスの母艦である。

そのイカズチの飛行甲板にて、一人の男が先の顛末を望見していた。

バイザーを下げているのでその表情を知ることは出来ない。他にワイヤレスのヘッドホン、手首のリングには小さなブレスレット型の情報端末。

バトラス実験部隊の責任者、神宮寺脩少佐である。猛と一矢の上官である。

その少佐は人工知能君と会話をしていた。

「オーガニック・パーツ〇〇三号。脈拍、血圧、血中老廃物、脳波レベル、全テ許容限度ヲおーばーシテイマス... オーガニック・パーツ〇〇五号モ同様デス。訓練ノ一時中断ヲ推奨」

「無用だ」

神宮寺はあっさりと即答した。

言われるまでもなく、バイザーに投影されているグラフを見れば、その様子は一目で把握出来た。時間の推移とともに集中力、俊敏さといった能力がどんどん劣化してゆく。当たり前の事だ。しかし、彼らの活動の持続時間は確実に長くなっている。二人は確実に成長している。

彼らはもっと高見へ行ける！ 行かせなければならないとも思う。

確かに二人にとって過酷過ぎる訓練だろう。だが、精兵を育て上げるには避けては通れない訓練なのだ。何よりもこの若さで戦場に投入されようとしている猛と一矢のために、彼ら自身が生き延びるために、自分に出来る事はこのぐらゐの事しかなかった。

「今度はコンビネーション訓練だ」

マイクを外部通信に切り換えると神宮寺は短く告げた。

* * *

「チェ、やっぱり休憩はナシか...」

グレート・バトラスと同型のカプセルの中で吉原一矢は毒づいた。一矢の搭乗するキング・バトラスは兄猛が乗るグレート・バトラスの兄弟機である。

もう、正午をとくに過ぎている。早朝、警報でたたき起こされ、パンを食べただけでスクランブル。それから休み無しで訓練はぶっ通しだ。オムツも考えたくない有り様だ。それに昨晩は良く眠れなかったのだ。

まったく滅茶苦茶な話だ。しかし、それでも、実戦に比べればどんな訓練でもマシなのだそう。それも、はるかに... 北極戦線は確かに凄惨な状況であるらしかった。

それ故、増援が求められ自分たちもカウントされているらしい。

それにしても、兄が低迷している理由は何なのか？

そうなのだ。昨晩もその事を考え悩んでいるうちに夜が明けてしまい、極度の睡眠不良のまま出勤となってしまった。

訓練当初は二人の成績に差はなかったように思う。しかし、ここ最近である。何が理由なのか、二人のスコアに差がつくようになった。それで兄は苛立つことが多くなり、そこにきて教官の一方的な怒声が、兄の苛立ちに輪を掛けた。

先ほども恐る恐る兄に声をかけてみたが機嫌は最悪だった。しかし、シミュレーションでいかさま同然のオペレーションをするなど、教官の側にも何を考えているのか分からないところがあった。

「インフォメーション・メッセージ...」

空母イカズチからデータが届いた事を人工知能君が告げてきた。訓練はまだまだ続くらしい。

「嫌な予感がするなァ...」

そう思いながら、一矢はデータの確認を始めた。

* * *

「どけェエエ！！ 一矢ァァァ！！」

「F R A - D W E E E E E E E T !!」

人工知能君も、悲鳴。もう最悪という意味らしい。

「むちゃだ！兄さん！！」

ぐわっしやあああん...二人は追突した。

...最悪の結末だった。訓練の出だしからして荒れ模様だった。二人で共同して輸送機を護衛するというミッションだったのだが、どちらが先鋒でどちらが輸送機の直掩になるのかというフォーメーションを決める時点でもめた。猛は一矢の意見に理由もなく反抗し神宮寺の一喝でようやく訓練はスタートした。

結局、猛が先鋒を担うことになったが、後衛の一矢との連携を考慮せず文字通り猪突した。タルサリスの蚊柱に真っ向から突っ込んで行ったが深入りしたところで孤立した。ヒットポイントが恐ろしい速さで減少を始めた。見かねて一矢が輸送機を放置して救援に駆けつけた。一矢は脱出するよう促したが猛はこの忠告に従わず、二人ともタルサリスの雲霞の中での乱闘になってしまった...

その、あげくの果ての衝突事故であった。

キング・バトラスは小破ですんだがグレート・バトラスは大破とはいかないまでも損傷軽微ではすまなかった。

これはバーチャルではない。

* * *

「ケガをせずに済んだのは緩衝器の性能のおかげだ... 設計者に感謝するんだな。だが、設計者はこんな時のために、緩衝器を設置したのではない！」

空母イカズチ艦内のブリーフィングルームで神宮寺のテーブルの前に男が二人、直立不動の姿勢で立っていた。まだ、十代後半といった感じの若者だった。吉原猛と吉原一矢の兄弟である。

二人は容貌がソックリであった。同じ人間が二人いるように見えた。瓜二つという言葉があるがまさにその通りだった。

実は、二人は一卵性双生児の兄弟であった。兄が猛。弟が一矢である。

二人は無言のままだった。

「本来なら、調査委員会が開かれなければならないが、それではバトラス部隊の玉成が遅れてしまう。本件の報告書は航空連隊長のところで止めておいてもらった」

「も、申し訳ありません」

一矢はそう言って詫びた。猛は無言のままだ。

「猛！」

神宮寺は猛をキッと見つめた。猛も睨み返していた。実を言えば、この時すくみ上がっていたのは一矢であった。

「責任はお前にある」

「！」

「お前は自身の功名心にはやりスコアを稼ぐ事にのみ意識を奪われて個人プレイに趨った。その結果敵中で孤立し、一矢の介入が必要になった。だが、お前は一矢に救援を求める事もためらった。早急に救援を求め敵群から離脱するべきだったはずだ。結局、見かねた一矢が独断でお前の救援行動に出ざるを得なかった。だが、そのため守るべき輸送機を護衛のいない状態にしてしまい、輸送機は撃墜された」

「.....」

猛は何も言えなかった。凶星だった。今にして思えばその通りだ。

「何故、冷静に大局を見ようとしない」

「そんなこと言ったって、あれもこれも全部出来るかよ」

「言い訳をするな！（この時も、すくみ上がったのは横から見ていた一矢の方だった）そんな根性では戦場に出たら一瞬で落とされるぞ。それだけではない、味方にまで被害が出る。現に今日の訓練がそうだ。いいか、いつも周囲に気を配り迅速に的確な判断を、行動をしろ。それがお前の義務だ」

「無茶苦茶ばかり言いやがって！ 頭にきたぞ」

「お前には反省の必要があるな」

「そうだよ、どうせ全部、俺が悪いんだ」

「三日間の営倉行きを命ずる」

「！」

いきなりの宣告だった。

猛の顔がこわばったように見えたがそれも一瞬の事だった。彼は臆せず言い放った。

「そんなに俺のことが気に入らないんなら、いっそ、俺を解任すればいいだろう！」

「お前はお前の責務から逃げる事は許されない。営巣でその事を良く考えろ！」

話は終わった。猛はMPに連行され一矢は独り部屋を辞した。

* * *

「やはり、無理をさせ過ぎたか...」

二人がいなくなった後、神宮寺は独り言ちた。

二人とも完全にオーバーワークなのは分かりきった事だった。特に猛は、だ。彼の訓練だけは特殊なのだ。本来ならパイロット、取り分け戦闘機のパイロットは厳しい審査をパスした者のみが選抜されるのだ(ホントだよ) だが、戦局はひっ迫している。北極戦線では少しでも多くの機体とパイロットを欲しているのだ。そのために、まだ開発中のバトラスと若過ぎる彼らまで動員しなくてはならないのだった。

バトラスが未完成であるがために、パイロット要員である猛と一矢には多大な要求が課せられる事になった。だが、未完成機のテストパイロットとは、パイロットの任務が数ある中でも最も過酷な任務の一つだ。にも関わらず若過ぎる彼らには経験、技巧、スタミナと、あらゆる面で能力が不足しているのは否めなかった。心構えも出来ていないであろう。過剰な要求の連続に反抗的になったとしても無理もない。

* * *

ともあれ、空母イカズチは、帰港すべく錨を上げた。

* * *

「んでもって...ターンの練習を繰り返し、次に曲技飛行しながらの射撃訓練。最後にキングとグレートは模擬空戦。最初はグレートとラフライダー三機の編隊でキングを迎撃...」

格納庫のサービス・ステーションに数人の人影がたむろしていた。話をしているのは戦闘機パイロットが着用する耐Gスーツを身にまとった人物であった。バイザー付きのヘルメットを小脇に抱えていた。その周りを繋ぎの作業服を着た整備員たちがとりまいている。彼らは熱心に聞き入っていた。自分達の整備したメカの出来映えが気になるのだろう。

「...二回戦はキングがラフライダーと組んでグレートを攻撃、これもキングの勝ち。自分が上手く囷になって、そこをラフライダーが一撃離脱攻撃。司令が頭にきたみたいで、猛に怒鳴り散らしたの。注意が足りないだの、四方に目を配れとかね。まア、御尤もだけど。で、もう一戦」

そう喋っているパイロット姿の人物はまだ少女であった。その顔つきは若く、体つきは細身、スラリとしている。年齢はハイティーンくらいだろう。声は艶のあるアルト。とても澄んでいる。淡々とした話し振りだ。その声の響きが彼女に少し冷たい雰囲気を与えていたかもしれない。とはいえ、よどみ無く話すのが気さくな感じを与えていた。

彼女の名は片貝舞。猛達と同期でバトラスのテストパイロットであった。

「今度は一矢がスカしたことでさア。自分のラフライダーを先に落とさせちゃって。そして一対一の戦い。蜻蛉の縄張り争いみたいな空中戦が始まったのよ。結局、一瞬のチャンスを手にしたキングの勝ちだったわ...で、最悪の雰囲気の中で、共同作戦の訓練に突入したわけ」

「それで、接触事故になったんですね」

整備士の一人が言った。

「まあね。一矢の無敗記録は更新中。猛は絶不調継続ね。でも、不思議よね...あの二人、なんだかんだ言っても、出来に大差があるはずないんだけどなア...」

ドガガガ...

床から伝わる振動に舞は振り向いた。二台の巨大なキャタピラ駆動の搬送車が近付いていた。その巨大なハンガーの上には二体の巨人が仰臥していた。グレート・バトラスとキング・バトラスの二体である。舞のいるサービス・ステーションは格納庫の上層にあるのでその全貌が良く見えている。

全長三十メートルの銀色の巨人。その体型は人間そのものに感じられる。頭部の形状は人の目鼻立ちを模し、意図して人の顔に似せてある。特に両眼はハッキリ分かる。掌には無骨ではあるが五本の指が揃っている。

機体のデザインには個性があった。グレート・バトラスは中世日本の甲冑を着た武者を想起させるデザインをしていた。とりわけ、頭部がそうだった。兜のような外形で、額についた三日月の様なアンテナは兜の前立にそっくりだった。

頭頂部にある檻の様なアンテナが王冠を思わせ、中世西洋の君主を連想させるのがキング・バトラス。胴体も鎧を纏っているかのようだ。巨大な円卓の騎士とも思えた。

今、この二体のバトラスは機体に損傷をし修理されるところである。グレートは右肩が大きくひしゃげ、キングの方は右足の踵に歪みがあった。

二台の搬送車は彼女の前を通り過ぎ、更に進んで格納庫の壁際で停止した。その隣にはもう一台、同型の搬送車が置かれていた。そして、そのハンガーにも巨大ロボットが横たえられていた。この三体目の機体はグレート・バトラスの僚機であり舞の乗機であった。

舞の機体にはクイーン・バトラスの名称が与えられていた。ロボットに性別など無いのだが、前二体に比して細身のフォルムが女性的な優美さを感じさせてはいた。また、胸の二つのレーダードームがまるで女性の乳房だった。設計的にはキング・バトラスの軽量化試作機であり、冠をかぶった姫君というところだ。

グワアアアアア

イカズチの船体が唸る。そして大きく揺れた。イカズチは増速したのだ。

「あっ、一矢...」

振り返ると、ステーションの入り口に一矢がいた。

「...やあ...」

一矢は所在なさそうに見えるように見えた。

「あ、あの...大事な機体を壊してしまって申し訳ありません」

まず、彼は整備員に頭を下げてバトラスの破損を詫びた。そうしたところ、整備員達には怒っ

ている様子がないのでひとまずはホッとした。

「猛は？」

舞が訊いた。

「営倉入りだってサ...」

「マジで!？」

「.....」

「.....」

「あ、あの...」

「.....」

猛のことを考えると、何を話せばが良いのか分からなくなってしまう。そうして、二人は口を閉ざさしがちになってしまうのだった。

ぐいいいい〜ん

二人とも場を繕う事が出来なくて困っていると轟音が聞こえてきた。格納庫の一区画からであった。

二人が目を向けると、グレート・バトラスの破損した肩を修理すべく、先ほどの整備員達がグレートの機体に群がって腕全体を外したところであった。

「巨大ロボットか、厄介なメカだね...まったく」

* * *

ロボットの軍事利用は今世紀初頭、半世紀前より行われていた。従来の兵器に人工知能を付与し、戦場の無人化の手段として登場したのだ。だが、完全に人型をしたロボットの登場には更に数十年を要した。ロボットの需要は多岐にわたる分野に存在していた。工業用としてのロボットハンド（マニピレータ）であり、建築作業用の起重機としてであり、極限作業用の遠隔操作機としてであった。軍事使用も検討された。とはいえ、これらは二足二腕の人型に固執していたわけではない。機能のみを考慮した時これは必須条件ではなかったのだ。特に、脚部に関してがそうであった。脚による歩行機能は障害物を乗り越え、荒地、密林のような不整地を移動する手段として有望視されてはいたが、二足歩行は姿勢制御が困難で機器的にも運用操作技術的にも難題を抱えてしまっていた。軍事技術に関しても、最初に登場したロボット兵器は六本脚の歩行戦車であった。

しかし、それでも、なお...人の姿をしたロボットを創ろうとする者たちの営みが途絶えることはなかった。人が人の姿であるかぎり、自らの姿を模した機械（創造物と言っても良いのかもしれない）の創造は、頑として模索され続けるのではないだろうか。それも、より大きく、より強く。人間には、そのような欲求が本能であるかの様に存在しているとは言えないだろうか。世界中の国々で、労力と費用が幾ばくかが注ぎ込まれ続け、技術者達が研究に従事した。

最初に人型のロボットの実用化に貢献をしたのは、医療機器分野の技術開発の成果であった。すなわち、義手、義足、もっと言うならサイボーグ技術の研究開発である。それは医療現場の要求であり、全くの別分野のことではあった。それらは完全ではないにしろ、医療の現場での要求に応えうるレベルに達した。だが、この時、遺伝子工学やバイオテクノロジーの進歩が人体の生

での再生を可能にし、再生医学と呼ばれる分野を確立した。サイボーグ研究の成果は不要となってしまったのである。

彼らの研究は無用の長物となったかに見えた。しかしここで、一人の技術者が自分達の研究を人体機能の増幅手段として応用することに着目した。これは本来、人間の腕力や脚力の強化を目的としたものだが、嘗て人間増幅機と呼ばれた概念で、前世紀に一度試みられた着想でもあった。それが異なる分野の進展で復活することとなった。要は巨大ロボットの開発である。

その可能性は未知数であったが、技術者達は惜しみなくエネルギーを、熱意という愛情を注いだ。技術者達が具体的に為すべきことはスケールアップ、機構の巨大化であった。だが、その企ては極めて困難なもので不可能とすら思われた。

スケールアップ（巨大化）する時一例として、寸法を二倍にした場合、体積、重量は二の三乗、八倍になる。三倍なら二十七倍である。当然、材料の強度や動力源の出力も八倍にする必要があった。さもなくば、密度が八分の一で強度が同一の物質を使用するしかなかった。そんな事は不可能だった。しかも、彼らの考えたスケールは二倍どころではなかったのだ。

それにも関わらず、ありとあらゆる改善、奮闘、猛烈な努力の末、巨大ロボットは誕生した。佇立、歩行し、疾走までしてみせた。

だが、悲惨であった。歩いただけで、一大事であった。全長三〇メートルの、それが、動くとき、轟音をたて、局部的に烈震を引き起こした。鼓膜が破れ、家屋が倒壊した。歩くディザスターだった。ただ単に歩く事さえ許されない...そんな存在だった。だが、技術者たちの誰一人として悔いるものはいなかった。

* * *

ここで超電磁スラスタが登場する。

西暦二〇二四年、イギリスはロンドンのチェルシー大学の理論物理学者フランク・ランパードが「トレカルティスタ理論」を提唱した。これに対し、同大学の物性物理学者ジョー・コールは「メディアプンタ理論」を唱え、両者の間に激しい論争が展開された。この論争は、やはり同大学のフランス人数理学者クロード・マケレレの「ワンボランチ理論」により、一応の終息をみた。こうして「大統一理論」が完成した。

「大統一理論」は自然界の四種類の力（重力、電磁力、強い相互作用、弱い相互作用）が、“ある一つのもの”を四つの方向から見たものに過ぎない事を示すと同時に、更に一つの可能性を示唆していた。それは人類が、この“ある一つのもの”を任意の方向から見る事が出来るかもしれない、という可能性であった。すなわち、先の四種類の力以外の作用力を人類が創出出来るかもしれない、という事であった。具体的には、任意に素粒子を生成し、その相互変換により擬似的な重力、核力、電磁力を、発生させるのである。

これが世に言うピコ・テクノロジーである。

最初にこの業績をなしとげたのは、イタリアのミラン大学のウクライナ人工学博士アンドレー・シェフチェンコであった。彼は自分の研究成果をまとめ「味量子力学」という形で発表した。その骨子は、いわゆるビター粒子とマイルド粒子の相互変換による“こくまろ理論”であるが、その中で、彼は五つ目の力を生成し、超電磁力と命名した。こうして、超電磁気学なる分野が出現

した。

それだけではなくアンドレー・シェフチェンコは、この力を応用した推進機関の製作にも成功した。これが超電磁スラスタであるが、発明者の名前を取ってシェフチェンコ機関とも呼ばれる由縁である。

しかしながら、ミラノ大学で試作された超電磁スラスタは実用には程遠いものであった。これを実用化に成功したのが、イギリス陸軍兵器廠 {アーセナル} のスウェーデン人技師フレデリク・リュングベリと、フランス人技師ロベール・ピレスであった。彼ら二人により、超電磁スラスタで駆動する飛行艇ハイバリーが開発されたのである。

先のロボット開発者達は自分達の作品にこの新種の推進機を搭載する事にした。これにより彼らの抱えていた問題は一応の解決を見た。しかしながら、こうして出来あがったものは全長三〇メートルに達する巨大なロボットであった。しかもそれは歩く機械ではなく、どちらかと言うと人型の飛行機となってしまうていた。どのような需要と使い道があるか口々に調査もしないまま設計製作に突っ走った結果ではある。

だが、この人型の飛行機にはある特色があった。このロボットは手、足、胴にそれぞれ超電磁スラスタを搭載し、それにより飛行するのであるが、直進する時は当然、全てのスラスタのベクトルを一致させねばならない。もし方向が揃わなければ、モーメントが発生し機体は回転してしまうからだ。ここで技術者達はこの現象を逆手にとった。すなわち、故意にスラスタの方向をズラす事で方向転換を図ろうとしたのである。ロボットは飛行中に、スラスタ自身の位相を切り替えたり手や足を動かしたりする事で、自由自在に方向転換をした。その軽快さ、機動性は従来のいかなる航空機をも凌駕した。特にポスト・ストゥール状態に於いていかなる有翼戦闘機に対しても、圧倒的な性能の違いを見せた。驚異の戦闘機が出来てしまったのである。

ALL ROUND VECTOR FLIGHT SYSTEM (全方位ベクトル飛行機構)の完成であった。(あるいは、ROUND VECTORIANとも呼ばれている)

そして、技術者達は(日本人からなるグループだったが)防衛隊というスポンサーを得たのだった。

こうして完成したのがFSXR(次期人型主力戦闘機)通称バトラスである。

* * *

イカズチは根拠地たる横須賀基地に帰港した。基地内は光が煌々として明るい。が、空を見あげれば既に星空である。それでも埠頭にいる隊員達は夜である事にも夜の冷気にも気が付ついていないかの様に作業に没頭していた。接岸したイカズチの脇腹からは数枚の分厚く幅のある跳板が倒れ、それを栈橋として多くの物資が行き交って行く。

そのごった返した雑踏の中をひっそりと吉原猛空曹長がMPに引き立てられて退艦したのに、気付いた者はおそらくまい。そして、収監された事も。

* * *

独房の中... 猛はその片隅の床面に座っていた。崩れ落ちた様なだらしのない格好で壁にもたれていた。独房には壁の高いところに一つだけ窓が有り、星の光が僅かだが射していた。この隅に座るとちょうどその光を浴びることが出来た。

その微かな光のせいで、夜目にも独房の中がうっすらと見えていた。だが音は何一つ無く、完全な静寂であった。

壁にもたれかかって光を浴びながら、窓から小さな星空を眺めていると、昂ぶっていた心が平穏でおおらかな気持ちになるような気がした。

猛は色々な事を思い返していた。

昨日までの訓練のこと。今日の事故のこと。それから、自分の生い立ちを。

孤児だった猛は弟の一矢と二人、片貝という家に引き取られた。ロボット操縦の英才教育と称するものを施される為である。そこで一人の少女と出会った。名を舞と言った。以来、彼らは兄弟のように生きてきた。

(六歳の時だったよな、突然、わけの分からないテストをされて、それから、片貝の家に引き取られた。ロボット操縦の為の訓練ばかりだった。毎日、トレーニングをし、学校の授業もそっちのけで数学や工学ばかり仕込まれたっけ。義務教育が終わればフルタイムで特訓だ。いつの間にか大人顔負けになっちゃった)

何の為、こんな事をしていたのだろうか？

(思えば俺も、一矢も、舞も、年相応の思い出なんて無いじゃないか)

今日の戦闘訓練にしても、何度、肝を冷やしただろう。もうだめだと諦めかけたことだろう。

何故、こんな生きた心地のしない経験をしなければならないのだろう、それも、あんな司令なんか命に命令されて。

「やってられっか」

猛は小さくつぶやいた。

そんな猛に相変わらず淡い光が降り注いでいた。

* * *

「やれやれ、困ったなァ」

同時刻、一矢は正規の宿舎の寝心地の悪い寝台の上でボヤいていた。まったく、戦闘員は眠れる時に眠っておかねばならないのに...床についてからウンウン言いながら寝返りをうち、また小さく唸ることを繰り返していた。それにしても、自分には荷の重すぎる難題がいくつもある。

この戦争のこと。バトラスのこと。訓練の過密な日程。そして猛だ。

確かに昔から兄は気が短くて喧嘩っ早い男だった。権威を振りかざす人間に対して反抗的だったりもする。でも、あの司令は厳しすぎると思う。ことに、訓練のシチュエーションの想定は無茶苦茶だ。あれでは撃墜されない方がおかしい。

「違う、問題は、そんな事じゃないんだ」

司令が厳格なのは単に軍人だからというわけではないと、一矢は直感的に考えていた。兄に対しても何かを慮っての事ではあるまいか。では、それは何なのか？ それさえ分かればこのチームは円滑に動き出すのではないか。

...などと考えていると、

「ウ〜ム... ムー..... ...」

眠ってしまっていた。

* * *

ハッとなって目が覚めた。凄まじい警報音が鳴り響いている。だが、それに続くアナウンスの方が強烈だった。

「緊急警報！ 緊急警報！ CMDゾンデより入電。敵機襲来！ 繰り返す。CMDゾンデより入電。敵機襲来！ 全機、スクランブル」

そこまで聞いて眠気は吹き飛んだ。背筋に寒気を感じる。体がおののいた。震えているのが自分でも分かる。いつかは来るであろうと思っていた事が、今、現実が発生したのだ。

とにかくブリーフィングルームへ急行しなくては...

一矢は寝台から飛び起きると手早く制服をまとい部屋を後にした。

* * *

日本は開戦時の大規模奇襲での被害をごく一部に限定されていた。損害は主要国と比べ軽微であった。敵は日本を重要視しなかったらしい。前世紀後半には経済大国として羽振りの良かった日本であるが、今世紀初頭には周辺国の追い上げによりその地位を失っていた。その事が日本を救ったのかもしれない。開戦から一年、壊滅を逃れた日本は世界の兵器工場として機能し始めていた。日本の工業的基盤は失われたわけではなく、その技術力も健在であった。国連軍の速やかなる装備の拡充の要求に応えられる貴重な存在であったのだ。だが、敵もようやく、このユーラシア大陸東岸の弧状列島の重要性を認識したようであった。

最激戦地である北極圏へ戦力の抽出を余儀なくされていた防衛軍の不備を衝くかの様に、敵は日本、それも関東一帯に押し寄せてきた。

* * *

廊下に飛び出すと人の流れが激しい。その中を一矢も走り出した。ふと見ると前方に見慣れた後姿があった。

ダッシュ。

「遅いわよ、一矢！」

ようやく追いついたと思ったら叱責の声が送られてきた。

舞だ。

「来たわね、とうとう」

「うん」

「いきなり関東に来るなんて、異星人さんも大胆ね」

彼女はとても落ち着いている様に見えた。自分が心の中では震えている事を知ったらどう思うだろう？

キィィィィィィン...

耳をつんざくように甲高く激しい音。戦闘機の離陸音。既に出撃を開始した部隊があるのだ。

手近な窓から空を覗いた。

「あっ」

一矢は立ち尽くした。背後の人の流れも忘れて...

赤い夜空があった。

第一章 初陣

事の起こりは一年前にさかのぼる。西暦二〇六四年二月、人類は突如、未知なる異星人の侵略を受けた。それは完全な奇襲により始まり、その後、人類は敗退を重ね防戦一方であった。

この頃、地球は緩やかではあるが統合されつつあり、人類はその営みを太陽系内の諸惑星に拡大し、月面、火星、木星には経済圏が成立していた。今世紀初頭の紛争の傷跡は癒えつつあり、宇宙へと進出した人類は新たなるフロンティアを得、希望ある未来へと踏み出したはずであった。そして、前述した二〇六四年二月、太陽表面において大規模な磁気嵐が発生し、それに呼応するかのように敵、異星人は襲来した。磁気嵐は完全な電波障害をもたらし、通信は混乱し作動していたレーダーも麻痺した。更に電子機器自体が使用不能となった。磁気嵐によるこの様な障害は宇宙進出時から幾度か経験された事であったが、この時の磁気嵐は前例の無いほど強暴なものであり、地球の通信機能は完全に崩壊した。太陽フレアから放出された素粒子の暴風は粒子フィルターすらデッドアウトさせ、ニュートリノ通信までも不能と化した。この時の人類に外敵は想定されていなかった。軍事的に無警戒、無防備な状態におかれたと言えよう。そして、敵はこれを待ち受けていたかのように現れたのである。理想的な奇襲攻撃であった。

磁気嵐が沈静化した時、太陽系の各惑星基地からの連絡は途絶えていた。SOSを発すること無く全滅したのである。地球の周回軌道を周る人工衛星群も消失していた。成層圏外の全てが敵に制圧されてしまったのだ。そして、そこに生きていた数百万の人々が命を失ったのである（〇xダムに比べるとショボいか？）人類が営々と築いた文明圏は百年前の位置まで押し戻されたかのようにだった。だが、これで終わりではなかった。いふなれば序章に過ぎなかったのだ。

地上が混乱から回復するよりも早く、敵は地球そのものへの攻撃を開始した。その第一段階は衛星軌道からのピンポイント爆撃であった。北米大陸、西欧諸国を中心にロシア、中国、インドが攻撃を受けた。更に敵のサイバーアタックでウェブが完全に崩壊した。

もはや、地球外生命体が実在し、しかも敵意を持ち攻め寄せてきたのだという事は否定のしようもなかった。だが、人々は更に驚愕の事実を知らされる事となる。先の奇襲に連なる空爆で世界各国の大都市が炎上するさなか、壊滅したはずの通信網が突如、息を吹き返した。後刻、推察された事だが異星人が捕獲した通信衛星を調べ上げ、地球の通信網を乗っ取ったようであった。TV画面に写し出された異星人の姿は怪異とは程遠いものであった。それ故、いっそう怪異に感じられたかもしれない。その放送を見た全世界の人々は息をのんだ。異星人の姿が自分達と寸違わぬものであったから。そこに現れたのが、うら若い女性であったから。

見た目には女性であった。彼女は地球人と変わらない目鼻立ちをしていた。顔の彫りの滑らかなところが、アジア系人に類似していたかもしれない。

大きく異なる箇所があった。瞳と頭髪の色である。瞳はグリーンで髪はオレンジ色をしていた。だが、肌の色は透けるように白く、目に眩しかった。

そんな事より、その女性の顔の造形は、鮮明で、細やかであった。そして、静けさと気品を漂わせていた。こんな時でなければ、見とれる者が大勢いたことだろう。真に秀麗という言葉が相

応しかった。瞳と髪も美しかった。

彼女は、バラの花弁を思わせる朱唇の両の端が微かに持ち上がり、目は細められ、力みの無い、リラックスした表情をしていたが、突如、高笑いを始めた。

狂瀾。

見ていた者は、それを不気味を覚えた。嘲りと憎しみ、何よりも偏執的な歓喜を見てとったのだ。オレンジ色の瞳の輝きに恐怖した。

彼女は流暢な世界各国語で告げた。嘲笑と共に告げた。

「神聖なるリーデの名において、貴様ら、卑劣にして野蛮なる地球人に降伏と隷属を要求する。いかなる抵抗も無意味である」

「我々はリーデの尖兵である。貴様ら、卑劣にして野蛮なる地球人に降伏と隷属を要求する。いかなる抵抗も無意味である」

敵は自らをリーデと称していた。それが宇宙の何処にあるのか不明であった。その姿は人類に酷似している。敵の意図も戦力も分からなかった。理由も判然としないまま地球は脅威に晒されたのだ。そして、降伏を拒絶したら皆殺しにされるであろう事を皆が言外に感じていた。

大多数の地球市民が恐怖で恐慌状態に陥るなか国連軍総司令部はある決断をした。

反撃！

国連会議は迅速な行動をした。各国国民に平静を呼びかけ抗戦を訴えた。なにより、この時点で国連軍が態勢を立て直し、反攻を行い得たのは僥倖、奇跡であった。奇襲を逃れ生存していた数少ない戦力が、実に迅速に再編成された。しかし、沽券を賭けた戦いにおいて勝利する事は出来なかった。異星人の飛行体は驚くべき機動性を持ち、旧来の航空機は対抗出来なかったのである。結果、地球の制空権はリーデ（と名乗る勢力）のものとなった。開戦（であろう）五日後、敵は北米大陸に降陸を開始した。巨大な母艦と思しき物体が流星群のように大挙、飛来した。この後の、二ヶ月にわたる地上戦での国連軍（主体はアメリカ軍であるが）の敢闘は、過去の戦史にも類を見ないものであり、なにより同盟諸国に貴重な時間を与えたのであった。自国を焦土としながらも、彼らは圧倒的に優位な兵器を装備した敵を相手に粘り強く戦っていた。

二〇六四年五月、国連軍総司令部は北米大陸からの撤退を決定した。言うまでも無くアメリカ国民を見捨てる事となり、戦いの長期化を招く事となる苦汁の決断ではあった。しかしながら、この二、三ヶ月の攻防の期間に欧州、アフリカ、アジア等の他地域への第二戦線の展開は無く、主戦域での戦いも国連軍の後退に連れ、敵の攻撃は鈍りつつあるように感じられた。開戦時こそ勢いは敵にあったが、それが末勢となってきたようであった。

五月一〇日、東海岸シアトルの陥落と同時に北米大陸での組織的戦闘の終結が告げられた。北米大陸の喪失である。人類史上最強の国家が消滅したのである。大量の難民が発生し海と南のメキシコ以南を目指した。

戦いそのものが終了したわけではなかった。北米大陸からの撤退後も敵の攻勢は続き、東はハワイ諸島が失われ、西はアイスランドが占領された。敵にはまだ余力が残されているかの様であったが、アイスランドからイギリスに飛来した敵軍の撃退に成功した事で国連軍首脳はようやく愁眉を開いた。敵は攻勢の限界点に達したようであった。東方ではハワイを拠点としたリーデ

軍が、南太平洋でアンザス軍（豪州とニュージーランドの合同軍）と空中戦を繰り広げ、カナダ、アラスカから別の一隊が北極経由でロシア・シベリア地区に進出を企図していた。南方ではリーダー軍の一群がパナマを越え南米コロンビアまで進出を果たしていた。衛星軌道は敵の完全な制圧下にあった。これに対抗し敵のピンポイント爆撃を防ぐため宇宙攻撃軍が組織され南洋の島々を拠点に活動を開始していた。また、リーダー人により月面に恒久基地が設けられているらしい事が観測された。いずれにしても、宇宙空間は敵の制圧下であり、衛星軌道からの攻撃への迎撃が唯一反撃らしい反撃であった。この状況下で戦線は膠着し数ヶ月が過ぎていた。戦況は小康状態で安定はしたのだが、予断を許さなかった。なにより、政治経済の中枢、要であった北米大陸の失陥は痛手であった。ユーラシアの国々は戦力の回復に努めたが攻め寄せてくるのは常に敵であり、日々空襲を受け迎撃に奔走させられていた。果てしの無い消耗が続いた。

そして今、二〇六五年三月である。

* * *

ブリーフィングルームは人でいっぱいになったかと思ったら、あっという間に無人になっていた。一矢と舞の二人だけを残して。

何を隠そう、スクランブル発動、全機出動と同時に二人にはする事が無くなっていたのだ。実のところ、彼らはある企業から出向してきた民間人であり、戦時特例法により階級が与えられていたのに過ぎなかったのである。彼らはバトラスのテストパイロットであり、バトラスはまだテスト段階にあるのだ。

二人とも押し黙ったまま幾ばくかの時が流れていく。

「どうなるのかな？ みんな、無事に帰ってくるのかな？」

一矢が言った、小さな声で...

舞が何も答えなかったので、一矢は言葉を継いだ。

「誰も帰って来なかったら、俺達の番なのかな？」

「...どうして、そんなこと言うの？」

舞が一矢の顔を覗きこんだ。お姉さんの目線...

「だって、前は大勢パイロットの人達がいたけど、北へ行っちゃったり戦いの度にいなくなって、戻ってくる人も新しく来る人もいないし。残ったのが僕達だけになったりしたらどうなるのかって」

「それはそうだけど、でも考えすぎよ。防衛軍の基地はここだけじゃないし。それに私達、民間人じゃん。戦うのは仕事のうちに入ってないわ〜♪」

「気楽だね、お前。兄さんみたい」

一矢が顔をしかめた。

「デヘヘ。まあ、まあ。しかし、お主、ちと考えすぎでござらぬか？」

「どうせ僕は兄さんみたいに凶太くないよ〜だ。チェッ、どうなってるのかな、戦闘は？ せめて最前線の状況だけでも分かればなァ...」

「ムフフ」

それを聞いた舞が怪しげな笑みを浮かべた。

「……」

「チョット、こっち来てみて…」

舞は立ち上がると一矢の服の袖に指を引っかけた。そして、部屋の一隅へと引っ張って行く。そこには基地内の情報端末のコンソールが置かれていた。

舞はその椅子に腰掛けるとキーボードを叩きだした。それに連れて画面が次々に切り替わっていく。

「実はさァ、おじいちゃんのパスワード、ちょろまかしちゃったんだ。デヘヘ」

「博士のパスワードをか？ って…お前、マズいだろ、それ」

「だってェ…タブレットが研究室の机の上に置きっぱなしなんだもん」

「まったく、あの博士ときたら…って、お前、軍のネットに不正アクセスなんかしたら、超厳罰になるんじゃないのか？マズいからやめときなよ」

「だって、戦いがどうなってるか知りたいって言ったじゃん」

舞の指は軽やかに動き打鍵は止まらない。

「そりゃ、言ったけどさァ…でも、どう考えたって…」

「ジャ〜ン。もう、繋がっちゃったも〜ん」

舞はスナップを効かせて、人差し指の先端をリターンキーに叩きつけた。

「本部、本部、増援はまだかァァァ！」

「！！！！」

まさに、いきなり飛び出してきたその怒声に、二人は腰が抜けそうになった。その声の主の凄まじいばかりの混乱、恐慌がダイレクトに自分たちの心に叩きつけられた思いがしたからだ。ただ、ただ、恐ろしいばかりの緊迫感だった。

だが、それに続く、更なる声に二人は心底震え上がった。

「第七六戦闘隊、応答無し」

「第四五戦闘隊、応答無し」

「FREETA—DOOOOOP」

「筑波副都心に敵機、侵入」

「第一七戦闘隊より救援要請。楠栗山観測点、通信途絶」

「九十九里哨戒線、突破されましたァァ」

「FRA—DWEEEEEEET！！」

二人は顔面蒼白になっていた。聴きにくい通信でもないのに耳に全神経を集中させていた。

やがて、舞が口を開いた。

「ど、どういうこと、これ？」

うわずった声だった。事実を事実と認めたくない時、あまりにも深刻な事実を突きつけられた時、誰もが発するこわばった口調…

一矢は答えられなかった。答えたくなかった。

「負けてるって事！ ねェ、そうなの！」

今度は、認めたくない事実そのものに怒っているかの様な声った。

一矢は仕方なく頷いた。首の筋肉をこんなに固く感じたことはなかった。

「ど、どうなっちゃうの、私たち？」

(分かるもんか) 一矢はそう言おうとした。

だが、新しい通信が聞こえてきた。

「幕張メガコンプレックスに敵編隊が接近中！！！」

「至急、援軍を派遣しろ」

「ダメです。迎撃可能な位置に戦闘隊がいません！」

その声は完全に上ずっていた。

舞が自分でも気付かぬうちに半ベソになって一矢を振り仰いだ。

「！」

そこに一矢の姿はなかった。

* * *

第一一五戦闘隊は迎撃用戦闘機ラフライダーを装備されていた。ベテランパイロットのほとんどを北極戦線に抽出され隊の状態は必ずしも良好とは言えなかったが、戦隊司令の柏倉少佐は出来る限りの方策を総動員して戦場に臨んでいた。

空中戦の要諦は如何に速度を落とさずに敵の背後に位置を占める...か、にある。

敵の背後に回り込むためには、複雑に入り組んだ飛行の繰り返しによる。敵よりも素早く、敵よりも小さな旋回半径で、それを行うことが望ましい。そうやって敵を自機の前に追いやり狙撃するのだ。この点で、彼が乗る戦闘機ラフライダーは最高の機体であった。地球上では...

だが、超電磁スラスタを搭載したタルサリスはスラスタのベクトルの転換によって移動方向を変えていた。それは有翼機よりも急激な方向転換し内側に回り込むスキなどなかった。更に、有翼機の泣きどころを知ってか知らずか、タルサリスはラフライダーのポスト・ストゥール状態で複雑な機動飛行を行って見せた。もはや、ラフライダーには追従不能であった。

北米での戦いやシベリア戦線からの戦訓に記されている様に、敵は従来の航空力学とは根本的に異なる手段で飛行しているのだ、という事を思い知らされずにはいられなかった。

さんざん旋回飛行を繰り返した挙げ句、彼は部隊の半分以上を失っていた。

「この機体ではヤツらには勝てない」

我知らず、独語していた。

* * *

メガコンプレックスに敵が接近中。その通信を聞いた時、足が勝手に動いていた。

超高層複合住宅{メガコンプレックス・スカイ condominium}通称バビルタワー。十万人の市民が生活する超高層建築物である。その高さは一〇〇〇メートルに達する。二十一世紀の都市のシンボルのようなものである。

一矢は走った。発令所を目指して。

* * *

事態は横須賀基地の発令所でも把握していた。

関東エリアにはもはや有力な戦力は残ってはいなかった。急遽、中部エリアからの増援部隊を

派遣することが決定された。だが、彼らの到着には時間を要する。事態は一刻の猶予も無かった。しかし、止むなしという空気が発令所の大勢を占めているようであった。敵の攻撃はあまりにも強力で既に大損害を被っているのだ。現状では事態の悪化を遅らせるだけで精一杯なのが誰の目にも明らかであり、援軍を待つ事しか策は無いようであった。そんな空気が大勢を占めていた。

(いや、まだだ。まだ、終わりではない。戦う力は残されている！)

皆が諦めてしまった中で神宮寺はそう認識していた。だが、それは危険な賭けでもあった。それゆえ神宮寺も強行な意見具申をためらっていた。決断するにはどうしても後一つプラスアルファ的な要素が欲しかった。それも、とても強烈な何かを、トリガーを引いてくれる何かを、である。

神宮寺はふと視線を移動させていた。何かの知らせでも受けたかの様に目を発令所の扉に向けていた。

まさにその瞬間である。その扉が左右に開いて人影が一つ飛び込んで来た。

吉原一矢、であった。

そして、何の偶然であろうか、一矢が最初に発見した男は神宮寺であった。

二人の視線が真っ向から衝突した。

その瞬間、全ては決まった。

* * *

「いいか、空曹長、何事も訓練通りにやればいいんだ」

機体に乗る直前、整備主任にそう声をかけられて一矢は自分がそんな階級だったことを思い出した。急な決定にも関わらず機体は万全の態勢に整っていた。戦闘機が次々と出撃していく中で整備士達はバトラスの修理も行ってたのだ。感謝すべきであろう。その整備員達は敬礼して見送ってくれた。一矢は拳を握り親指を立ててサインを返すとキング・バトラスのコクピットに入った。

動力が起動しヘルメットのバイザーに諸々のデータが投影される。次に全周スクリーンが周囲の光景を映してくれる。バトラスは搬送車に載せられたままゆっくり動き出していた。周囲の光景がゆっくりと後に流れて行く。

やがて巨大なエレベータに載せられバトラスは地上に姿を現した。管制塔からの指示に従い発信準備をする。コクピット内の全表示はブルーとなり異常の無い事が確認された。一矢は発進許可を求めた。

「こちらバトラス」

管制室から応答が来た。

「OK、バトラス。君のNOは7(セブン)だ。フライトレコーダーをオンしてくれ」

「出撃許可をお願いします」

「許可する。武運を祈る {グットラック}、バトラス7！」

一矢はレバーを引いた。スクリーンに映る周囲の光景がゆっくりと下へ流れ落ちていく。徐々にその速度が速まっていった。そして、全てが眼下の光景となっていた。

一矢は続けて司令室の指示に従い所定の高度まで上昇。それから、水平飛行に移行。更にビーコンを目標に移動する。

キング・バトラスは戦場への空路をひたすら進んだ。深夜ではあるが天候は快晴。多少、雲が散見された。(でも全部、朱に染まっているのか???...墓穴を掘ったか? この設定)

全周スクリーンの映像は三六〇度全て赤くボヤけている。赤い霞の只中を駆け抜けているようだ。

ドキン! ドキン!

急に、一矢は胸が締めつけられ息が苦しくなった感覚に見舞われた。

そして!

ここで稿が破られていた!

バトラスVは、これでお終いです。下らない現実逃避の妄想にお付き合い頂き、有難う御座いました。

皆様の今後のご健勝を、お祈り致します。

2017年11月24日

ガラパゴスゾウガメ